
わたしはあなたのおかずになりたい

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしはあなたのおかずになりたい

【Nコード】

N7070N

【作者名】

NAO

【あらすじ】

——わたしはあなたのおかずになりたい。幼馴染みの美少女・国^く方^に藍^{かた}子^{あいこ}の一言で物語は始まる。主人公・葉山誠一郎^{はやませいいちろう}に訪れたある悲劇が彼女にそう言わしめ、親友、田中和臣^{たなかかずおみ}とともに悲劇に向かって立ち向かう！ ちょっぴり馬鹿で変態なラブコメディ。

プロローグ

「わたしはあなたのおかずになりたい」

蒼穹の真ん中で、鳶がつまらなさそうに飛んでいた。

「わたしはあなたのおかずになりたい」

校内放送のように二度繰り返された少女の発言に、昼休みの教室が戦慄する。

窓からそよそよと頬をなぜる風。その風が運んできた悪戯であれば良かったと、葉山誠一郎は思った。髪質の堅さからなのか、短い髪の毛がツンツンと逆立っている少年は、慣れたような仕草で眉間を押さえる。

「分かった。お前の言いたいことは分かった」

「分かってない。他の誰でもない、わたしが誠一郎のおかずになる。そうすれば解決」

眉根一つ動かさない涼しい顔で言っただけの少女。所信表明演説で壮大な目標をぶち上げる内閣総理大臣顔負けの所作である。

「わたしが、くにかたあいこ 国方藍子くにかたあいこが、誠一郎の専用のオナー——」

「それ以上言うな藍子！ ここは公衆の面前だぞ。お前の発言は火に油を注ぐようなもの、いや、燃え上がる火の中に爆弾を投げ込むようなものだ、うん」

「んんー、んんー……ぷは」

即座に誠一郎に口を塞がれた藍子。

「……誠一郎、どうしてなの。わたしには自覚がある。誰よりも誠一郎の性奴隷として――」

「だから、やめい！」

「んんー」

二度、口を塞ぐ。

「いいか、藍子、お前は俺がいいとまでしゃべるな、いいな？」

周囲に聞こえない小さな声で注意する。

「（こくこく）」

悪びれない見目麗しくも涼しい顔が、肯定の意味を込めて上下に動いた。それにつられて、腰まで及ぶ黒髪がしなやかに揺れる。櫛を通そうとすれば力をかけなくても櫛の方から滑り落ちていきそうな上質な髪質。テレビコマーシャルで過剰に演出される髪の毛が、現実に体现されたかのようだ。

「よし、良い子だ。お前は少し黙ったまま反省している」

「（こくこく）」

餌を目の前に待てを強制された忠犬のようなうなずきっぷり。

ため息の後、誠一郎は、改めて隣の席に座る藍子を見る。ぱっちりつぶらな双眸も、鉛筆すら乗っかりそうな長いまつげも、いい仕事をしている白磁も負けを認めるような肌艶も、黄金比に整えられた鼻梁も、この少女は当たり前のように有している。美しさというものを選びすぐったら国方藍子が出来上がった……そんな馬鹿げた思考すら見る者にさせてしまうのが、この国方藍子という少女であ

る。それでも、うっかり者の神様が付け加えるのを忘れたものがあるとするれば、エアーズロックの壁面のようにぺったんこな胸（それはそれで価値があるが）と、最初から外れかかっている理性のたが……破天荒で一直線な思考回路であろう。

その傾倒した思考回路は、主義として一般にこう認知されている。

「ははは、相変わらずの容赦のない誠一郎至上主義ですね。ま、僕もその主義者のひとりですけど」

物腰の柔らかな声は、誠一郎の背後からだった。

振り返った誠一郎の目の前に、コーヒ―牛乳のパックが二つ差し出される。パックを差し出したのは眉目秀麗な顔立ちの少年だった。藍子に負けず劣らず美しい髪は、ややもすれば不潔に感じさせてしまう長髪でありながらも、清潔感をふんだんに漂わせている。加えて、八頭身は軽く満たすであろう見事な長身は、決して瘦躯ではなくインナーマッスルによる形成なのか、芯が太いモデル体型。一見ただけでスポーツが出来そう、という第一印象が世の老若男女から与えられるであろう。

「おう、サンキュ、和臣。かずおみ 何というか、主義って言っても藍子のはもはや病的レベルだ」

困ったようなため息を吐く誠一郎。

「あー……褒めてないからな、藍子」

頬をわずかに染めている藍子をたしなめる。照れている表情も無表情。ほんのりと染まる頬を見分けられるのは誠一郎と、和臣ぐらいである。

「はいどうぞ、これは藍子さんの分です」

和臣がにっこりと微笑む。ホストなら間違いなく指名ナンバーワンであろう完璧な微笑である。その証拠に和臣を横目に見ていた女子数人の目がハートマークに変わっている。恋に恋する少女のビジョンでは、きっと和臣は薔薇や百合やらのすごい数の花に囲まれていることだろう。白くきらりと輝く歯の演出付きで。

「藍子さんは誠一郎君と同じコーヒー牛乳で良かったのですよね？」
「（こくこく）」

藍子は無言でうなずきながらも一つのコーヒー牛乳を受け取った。

「……？ 藍子さん、どうしたのですか？」

「（ぶるぶる）」

「聞いてやるな、和臣。これは藍子にとっての試練なんだ」

「試練……ですか」

「ああ、試練だ」

「（こくこく）」

三人がほぼ同じタイミングでパックにストローを刺し、ちゅるると一口嚙下する。

言葉のないわずかな静寂が訪れた。

広い校庭の上空で、鳶がぴーひよろろとまるでのどかを絵に描いたように旋回している。教室内にわだかまっていたざわめきも、どうやら藍子のいつもの奇行として日常の中に溶けていったらしい。藍子の清楚可憐なたたずまいからは想像できない軽挙妄動は、日常茶飯事。火が付くのも早いが鎮火も早い。美女が絶対に言わない文言を素で言うのが藍子であり、それ故戦国時代の武将の台頭がそう

であつたように話題の興廃もあつと言う間なのであつた。人間の環境適応能力も案外侮れないのである。

ストローの白がコーヒー色に染まり、二口目を三人で飲む。

誠一郎は自らの椅子にどっかりと腰を落ち着けながら。和臣は長身を隣の席に寄りかからせながら優雅に。藍子は両手でしっかりとパックを持って小鳥のように。

喉を潤すコーヒー牛乳の味はいつもと変わらず甘ったるい。

校内でしか売っているのを見たこともない無名メーカーのコーヒー牛乳は、誠一郎に学校に来ているんだな、と改めて実感させていた。

つかの間の小休止、開口一番は誠一郎だった。

「藍子、反省したらしゃべっていいぞ」

「……。誠一郎、もう終わり？」

「終わりとは何だ。もっとして欲しいのか？」

「誠一郎の今の言い方……。いやらしい。いやしくて好き。でも、わたし的にはもっと強い口調がいい」

「これで終わりじゃないぞ、もっと続けて欲しいのか、この牝豚が――みたいな感じでしょいか」

「ナイス、和臣。それ、それがいい。誠一郎、それ言って」

藍子は、涼しい迫力で誠一郎に顔をにじり寄せる。瞳の中には表情に表れない期待で充ち満ちている。

「言うか。なぜ俺が藍子を喜ばせなきゃならん」

「妻をよがらせるのは夫の勤め。時には妻からも夫をよがらせなければ」

さも当たり前前の藍子の口調。迫り来る藍子の背後では愛欲が静かに燃えていた。

「さすがは誠一郎君、彼氏彼女の関係はすでに越えているわけですね、理解しました」

「するな。理解するな。俺はコイツの彼氏じゃない」

「昨日は駄目な日だって言ったのに。誠一郎は何度も何度も求めてきて……」

「さすがは誠一郎君、常人の倫理観はすでに超越済というわけですね、誤解していました」

「するな。理解も誤解もするな。俺の名誉のために藍子のネタをバラすとだな……駄目だって言っても求めたのは、藍子の実家が経営してる喫茶店、そのペロンチーノだ。ちょうど定休日で食えなかっただけだ。食いたいときに食う、それが俺のポリシーなんだ。だから、なんとしても食べたくて、俺はちよっとしつこく――」

「そう、しつこく誠一郎は私の敏感な部分を攻めたの」

「そうそう、お前はココが敏感で感じるんだよな……って、んなわけあるか！」

「……いゃん」

「いゃんじゃねえ！」

力んだせいかストローからコーヒーが飛び出す。

「ふむふむ、誠一郎君、藍子さん感じるココとは？」

「は！？ 知るか！」

「……んんっ」

「んんっじゃねえ！」

ついには力みすぎてパックからストローが飛び出す。

「そ、それにだな……藍子はどうか知らんが、俺は残念ながら絶賛童貞中だっ！」

「わたしも処女。絶賛初めて募集中」

そのとき、教室中の男子生徒の耳がそばだった。

……ごくり。……処女なのか、国方さん……。おい、それより募集中ってなんだ……。いや、募集中は募集中だろ。……何を言ってるんだ彼氏を募集するなら分かるが、いきなり初めて募集だぜ……。さすがは国方さん、パネェっす……。なあなあ、俺でも応募したら当選できるのか……。×切はいつだ……。

等々、妄想をかき立てられる男子諸君である。

「ふむふむ、誠一郎君は童貞。藍子さんは処女ですか。実は、お恥ずかしながら僕も童貞なんです。絶賛はされていませんけどお相手募集中ですね。良い相手が見つかった暁には優しくご指導いただきたいものです」

そのとき、教室中の女子生徒の耳がそばだった。

ごくり……。童貞なんだって、和臣君……。ぽっ。優しくご指導して……。って、私、私が、和臣君を優しくリードしてあげられたら……。ああしてこうして和臣君の美顔が恥辱に歪み……。…（ふらふら）。…！？ きゃっ！ 由美がのぼせて倒れたわよ！ 保健委員！ でも、どうしてかな？ もしかして、誰か心に秘めた人がいるとか……。……ごくり……。誠×和……。な、なな、何をおっしゃっているんです！ ……そんな、そんな不謹慎なこと……。和×誠に決っていますわよ！

等々、妄想をかき立てられる女性諸氏である。

「ごほん、あー、盛大に話が逸れてしまったな。よし、話を振り出しに戻そう」

ばんばんと机を叩いてリセットする。

「振り出し、ですか」

「ああ……藍子にはすでに言ったんだが……和臣、聞いてくれ」

地面に落ちたストローをあきらめ、パックの口を手で大きく広げる。

「はい？　どうしました？　そのような怖い声を出して」

背筋を伸ばして座り直すと、大きく開けたパックの口からコーヒ―牛乳をゴクリと飲み下す。中のコーヒ―牛乳が飛び出さんばかりにパックを置くと、誠一郎は切り出した。

「俺はお前が田中和臣であることを信用して打ち明ける」

前の席に座る和臣の右手を両手で強く握りしめる。握力は誠一郎の決意の表れであった。

「はい、なんなりと。僕も誠一郎君ならどんなモノでも受け入れて見せますよ」

その発言に一部の女子の顔が真っ赤になった。

誠一郎はそんな女子達を横目に、和臣にだけ聞こえるように声量を落とす。

「和臣、俺――」

何気のない昼休みの教室。

昼食時に弁当のおかずではないオカズの話で盛り上がるくらいには何気ない昼休みの教室。青空の袂では相も変わらず鳶が他人事の

ように空を回り、暑い日に暑いと意味もなく連呼する現代人ように
ぴーひよろろぴーひよろろと鳴いている。窓から入り込んでくる夏
の微風は、肌をなめ回したいやらしい熱気を連れて、反対側の廊下
の窓から一見さんのように早々に通り抜けていく。

季節は夏だった。

夏本番だった。

「――俺、勃起しなくなった」

そんな夏の物語。

プロローグ（後書き）

興味を持って下さった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

突然連載を始めることになりました、NAOと申します。端的に自己紹介をするなら、SennheiserヘッドホンとISAMU KATAYAMA BACKLASHブランドをこよなく愛する小説家になろう作家……というところです。その他完結済連載もありますので、興味をもたれた方はそちらもどうぞ。ちなみにこの小説ですが週2回更新を目標にしております。どうぞ、よろしく願います。

評価、感想はもれなく作者の栄養になります。

第一話・「わたしは我慢できない」

パイプ椅子の転がる音が、無人の部室に響き渡る。

閉め切られた部室の窓、閉め切られたカーテンが外の光を受け止めている。カーテンのわずかな隙間から差し込む強い光。部室の薄暗闇を切り裂き、その光線上を黄金色に輝くほこりが音もなく漂っていた。エアコンの効かない蒸し暑い空気の中で、つぶやくような声が漂うほこりをゆると動かす。

「わたしが誠一郎を苦しみから解き放つ」

部室の椅子に腰掛け、ほっと一息を入れた直後だった。

その有無を問う暇も与えずに誠一郎は押し倒されていた。馬乗りになるのは藍子である。下腹部にはえもいわれぬ柔らかな感触がある。シャツごしであるせいか、徐々に染みこんでくる藍子の温もりは、部室の蒸し暑さとはまた違う温度である。気温の熱さと、人肌の熱さは別物であると誠一郎は知った。

「私には、誠一郎が思う全てを受け止める準備がある」

氷のような冷静な声と言葉の意味は、炎のように燃えていた。押し倒された衝撃で、床に打ち付けた後頭部の痛みが、思考を停滞させる。

「待て藍子」

それだけ言って下腹部に目を落とすと、短いスカートから黒いニーソックスが伸びていた。無駄のないしなやかなライン。太ももからふくらはぎまでの曲線美は、異性からすれば喉から手が出るくら

い触れたくなるはずだ。

「だから誠一郎は、思う存分、私を汚すの」

「おい、聞いているのか、藍子」

誠一郎の声は届いているはずなのに、肝心な所までは届かない。藍子が押しつけてくる下半身はスカートに隠されているが、わずかにめくれた部分では白い色がチラチラと見え隠れしていた。それが下着の色であるということは考えるまでもなかった。

「我慢できない。わたしは我慢できない」

藍子の両手が、誠一郎の顔を優しく挟む。手からこぼれ落ちる芥子粒のようなきらめきを伴い、藍子の黒髪が誠一郎へ流れ落ちる。髪は、まるで天蓋付きのベッドのように外界を遮断し、二人の世界を作り出す。

「……いいから、聞け」

「聞かない」

鼻と鼻がぶつかるくすぐったい距離。

藍子からは柑橘系の匂いが香る。しかし、その奥から香ってくるのは甘く、胸を締め付ける汗の匂い。少女ではない女性だけが元来から持つ香水。

「……。……誠一郎」

表情を変えない藍子が、自らの下腹部と隙間なく接触している誠一郎の下腹部に目を落とす。

「……なんだ」

難しい顔をしたままため息を吐く誠一郎。

「どうして起たないの」

ぐりぐりと無表情でお尻を動かしながらつぶやく。

「……だから困ってるんだろうが」

「わたしの性奴隷としてのアイデンティティは」

「お前を性奴隷として採用した覚えはないし、今後採用するつもりはない！」

暑苦しいとばかりに藍子の顔を押しやる。

「これがいわゆる就職氷河期」

氷河のような冷静な顔だが、ニヤリ顔の成分が含まれていることを理解する誠一郎。

「……。まあ、もしもお前がそういう就職活動をすれば、間違いないとお前に対する有効求人倍率が跳ね上がるだろうな」

「なら、誠一郎の有効求人倍率も今すぐ跳ね上がらせる、わたしが、この手で」

「下ネタはやめい」

ズボンのチャックに伸びた手を払いのけた時だった。

ガチャリと部室のドアが開く。

「誠一郎君、部室への緊急の召集とは一体——っと、これはこれは

……色々すみませんでした」

「違うぞ、これは違うんだ」

藍子を乱暴に床に転がしながら慌てて立ち上がる。

「勘違いするなよ、断じて俺の意思は介在していないからな！」

焦る誠一郎をよそに、藍子はどこ吹く風で闖入者を迎え入れていた。

「……痛い」

言いながら、お尻をすりすりときする藍子。表情は至って平板である。

「勘違いなんて、するわけじゃないじゃないですか。見たままのことを見たまま理解するだけですよ」

「世間一般では、それが勘違いの元になることが多いらしいぞ」

汗をだらだらと流しながら、誠一郎は特大の頭痛を感じていた。藍子に押し倒されたときに打ち付けた外側の痛みと、思考が誘発する内側の痛み。いわゆる前門の虎後門の狼状態。

「和臣、今はわたしの就職活動中、邪魔しないで」

「藍子さん、この度はいずこへと就職なされるのですか？」

「性奴隷。誠一郎専用の」

「断じてそんな職業はないからな」

誠一郎に後ろから抱きつこうとして避けられる。藍子の手が空しく空気をつかんだ。

「ちなみに初任給はどの程度なのでしょう。気になりますね」

転がっていたパイプ椅子を片付ける和臣。片付けながら指を一本立てて、にこやかに微笑んでいる。

「初任給は、誠一郎からの愛」

「払うつもりはないぞ」

「なら払わなくていい。わたしの愛は無償だから。ボランティアと同じ、報酬は求めてない」

「でも、年功序列型賃金体系をとっているから、年々誠一郎から受け取る愛は増えていく。さらに、それに伴い出世もする。性奴隷から、恋人、愛人から夫婦へと」

「色々と複雑な出世コースですねえ。定年退職後の年金もある程度保証できると良いのですが……。ふむ……思ったのですが、その職業から言うとは定年退職って、いわゆる熟年離婚のことじゃないでしょうか」

突飛なやりとりが誠一郎の頭の上をキャッチボールする。

「退職することはない。揺りかごから墓場まで続く永久不変の職業だから」

「それはいいですね。最近が会社で年金まで保証してくれませんか。資産運用を強いられるよりは、死ぬまで現役が堅実というものです。僕の就職先もそれにしましょうか」

窓を開けて部室の空気を入れ換えながら、不穏な提案が始まる。外界から吹き込んでくる風すらも、誠一郎にとっては不穏な話題を煽っているように思えてしまうのだった。

「なら、和臣も一緒に性奴隷？」

「はい、一緒に性奴隷を頑張りますよう。精一杯尽力しますよ」
「おい、お前ら」

振り返ると、表情のない藍子と、微笑む和臣ががちりと握手を交わしているところだった。

誠一郎の頬を特大の汗が流れ落ちる。

「そうです藍子さん、研修制度や、配属先などはどのような？」

「研修はない。配属先は、各々の適正を判断してもう決めてある」
「ちなみにどこへ配属を？」

もったいぶったように一拍おくと、藍子は誠一郎をちらりと見て、口を開いた。

「わたしは前、和臣は後ろに配属」

「！早速ですが、サービス残業を！」

「待て待てえい！」

がちりと交わされていた握手を手刀で切り裂く。

「待てない。わたしたちは就職活動に忙しいの」

「俺の前や後ろを危険にさらすような就活は禁止だ！」

「なら、和臣は上の口、わたしは下の口に配属」

「！早速ですが、休日出勤を！」

抱きしめようとしてくる和臣を身体をひねってかわし、下半身にタックルを見舞ってきた藍子もレスリングさながらに潰して制する。

「俺の前も後ろも上も下も、全部俺のもんだ！」

「誠一郎君、それは受け取り方によってはとても寂しいです」

「知った事かよ！ 一般人が早々体験しないような憂き目に遭うのは御免だ！」

「それは困りましたね」

本当に困った顔で悩み始める和臣。

「誠一郎、パワハラ」

「お前等のセクハラはどうなる！？」

「そんな誠一郎にインターシップ」

素早く起き上がり背後を取ろうとする藍子に不覚にも腰を取られてしまう。

「……ふふっ」

「和臣！？ 今の意味が分からないし、面白くもないからな！？」

「いえいえ、面白いですよ」

誠一郎と藍子のとっくみあいを見ながら、なにやら満足げな笑みを浮かべる和臣だった。

第二話・「解散！」

「それでは、これから我らが映研……映画研究同好会にとって重要な発表を行う。部員一同、心して聞いてくれ」

上座にある机、そのパイプ椅子に腰掛けた誠一郎。その向かいには、同じく机が二つにパイプ椅子二つ。それぞれ和臣と藍子が座っている。まるで過疎化した小学校の生徒と教師のように向かい合う。

「部員一同と言っても、部長である誠一郎、副部長である和臣、性奴隷であるわたしの計三人しかない」

無表情で手をあげる藍子。まるで教師に質問する生徒の態である。

「おかしいですね、僕の記憶では、部長が誠一郎君で、副部長が藍子さん、そして僕が性奴隷であったはずですが」

「違う、わたしが性奴隷」

「いいえ、僕が性奴隷です」

「奴隷になりたきゃ、少し黙れ」

「……」

お互いに譲ろうとしない美女とイケメンに釘を刺す。まるでその釘で作られた昆虫標本のようにふたりは素直に口を閉ざした。誠一郎は満足そうにその二人を見やると、握り拳に咳払いをし、ゆっくりと話し出す。

「あー、よろしい、よく聞いてくれ」

パイプ椅子を引き、大仰に立ち上がる。

「今日をもって、映研は解散する！」

机を両手でバンと叩き、重大さをアピールする。

恋人に突然の別れを告げられたらきつとこんな顔をするのではないか、そんな悔しさと悲哀のにじんだ顔が和臣に現れる。

「せ、誠一郎君、それは本気なのですか？」

フラット極まりない表情でありながらも、藍子の顔にもわずかな陰りが見える。能面とは、全く同じ顔貌でありながらも光りの当たる加減、つまり影の濃淡によって無限に表情が変貌する。恒常的無表情少女の藍子は、まさにその能面のようにわずかな濃淡でしか表情を読み取れない。

誠一郎が読み取った藍子の表情、それは紛れもなく哀切だった。

「どうして……」

誠一郎は気持ちをぐっと堪え、頬を固くし、唇を引き結ぶ。

「和臣、藍子、すまない。これは決めたことなんだ。決意は意を決すると書く、だから俺の気持ちは揺るがない」

対したのは、和臣だった。

「誠一郎君お気持ちは分かりました。ですが、一つだけ言わせてください。僕にとって、この部活、いえ愛好会はかけがえのないものでした」

身振り手振りを交えた懇願。それは全速で空港に駆けつけ、去る

うとする彼女を呼び止める彼氏が如く、迫真そのものである。

「言ってしまったえばここは、この学校という怠惰で無為な檻の中で与えられた唯一のエデンでした。映研と言いながら映画っぽいことは何一つしてこなかったこの名ばかりで虎の威を借る張り子の虎のようなこの活動が……どうしました誠一郎君」

「お前は俺になんか恨みでもあるのか」

「いいいえ、そんなつもりは毛頭！」

「かわいそうな誠一郎。よしよし、いたいいたいのとんでいけ」

神速で誠一郎の隣に寄ってきた藍子が誠一郎を撫でる。

「そこは痛くない」

手は股間。

「きもちよかった？」

「気持ちよくない！」

「誠一郎君！ 藍子さん！ 僕は真面目ですよ！」

「お、おう……？」

「さっきと立場逆」

振りかざす握り拳で訴えかけられる。誠一郎が意気にたじろぎ、風圧が藍子の髪を吹き上げた。熱波が頬を叩くほどに振りかざされた和臣の拳は、伝説の勇者も真っ青だろう。

「僕は、僕にとってここは何よりの心のよりどころでした。誠一郎君と藍子さんだけが視界に入るこの空間こそが僕にとっての……そう共有結合のようなものです」

瞳を閉じ、走馬燈のように回り出す記憶の情景を噛みしめているのだろうか。和臣の前髪が、唇が震えている。

(……ん？ 何だって？ きよ、恐竜滅亡？ 白亜紀か？)

(誠一郎、共有結合)

閉じられたまぶたを良いことに、こそこそと話し始める。

(ば、馬鹿野郎、知っていたさ。共有結合だろ、共有結合。あー、あれね、あれは重要だ、うん。無くてはならないよな。共有して結合するんだもんな、そりゃ大事だ)

明後日の方向に目が泳いでいる。

(誠一郎……かわいい。なでなで)

(なでるな)

(かわいい。しこしこ)

(しこ……おい！)

ズボンのチャックを半分まで下げられたところで、慌てて手を払いのける。

もう少しで先っぽに触れられてしまうところだった。危ない。危ない。

しなやかな雌豹の動きに戦慄を覚える誠一郎。

「お二人とも、聞いていらっしやいますか？」

「聞いているぞっ、なっ？ 藍子？」

「うん。しこしこ。……ごめんなさい」

関節とは逆に手首を捻りあげられる。激痛だが無表情。

「いいですか、お二人とも。共有結合なのです。原子同士で互いに電子を放出し、その電子を互いに共有することによって生じる結合、それこそが共有結合なのです！ 結合の強さは強く、共有結合によって形成される結晶は、共有結合結晶と呼ばれ、代表的なものにはダイヤモンドやシリコンなどの半導体があります。僕と誠一郎君と藍子さんはいわばそういう関係。互いに放出し合う愛情という電子を互いが共有し、それが三人の心身を深々と強く結びつけるのです！ そうして結合された僕たちはダイヤモンドのように強固に結ばれているのです！ 結合は英語で言うところの Bond、Bond にはまたこういう意味もあります」

声のトーンが下がる。優しくも印象深い鷹揚な声音で和臣は言葉を紡いだ。

「……絆です」

真摯で強い眼差し。冗談なのか、冗談ではないのか。普段の和臣からは想像の出来ない声の色に誠一郎は戸惑う。いつもなら冗談かそうでないかぐらいは簡単に判別できるのに、このときばかりはそれが判断できなかった。類い希なる美の笑顔で微笑んでいるのはいつものこと。しかし、中に宿る感情の琴線が見え隠れしているように誠一郎は何となくもどかしくなる。

知っているようで、知らない。分かっているようで、分かっていない。理解しているようで、理解していない。

まだまだ自分の知らない和臣がいる。

誠一郎はそんな風に思えてならなかった。

「僕にとって、世界なんてどうだって良いのです。誠一郎君と藍子さんさえいてくれれば、お二人との絆さえあれば、他の何物も無用

の長物です。そうと知っていてもあえて、この場所を、この映研を放棄するその訳を教えてください」

「和臣が燃えてる」

藍子の凜とした無感情の声が、誠一郎を思考の螺旋から連れ戻した。

「ああ、俺もこんなに必死な和臣を見るのは初めてかもしれん」

「さあ、誠一郎君、茶番は終わりですよ、教えてください！」

観客に訴えかける舞台俳優のように、胸に左手を当て、右の手のひらを誠一郎へ伸ばす。

開けた窓からは、夏の微風が幕間を告げるように入り込んでくる。軽音楽部のベースの音がお腹をずしんと叩き、バスドラムの低い音が演奏を引っ張っていく。やがて聞こえてきた透き通るような声。彼女たちが歌うのは、奇しくも絆を歌う詩だった。

「分かった。和臣、お前にそこまで言われたら、その訳を教えなくてはいけないな」

「というか、初めから言うつもりだった？」

「黙れ藍子、流れを断つな」

「私は誠一郎に起って欲し——」

握り拳が藍子の頭に落ちる。

「……痛い」

小さな頭の上には特大のたんこぶ。もわもわと湯気がたつさまはとても痛そうである。

「テイクツーだ、和臣」

二本の指を立てる。

「ごほん、では……。さあ、誠一郎君、茶番は終わりですよ、教えてください！」

観客に訴えかける舞台俳優のように、胸に左手を当て、右の手をひらを誠一郎へ伸ばす。

開けた窓からは、夏の微風が幕間を告げるように入り込んでくる。軽音楽部のベースの音がお腹をずしんと叩き、バスドラムの低い音が演奏を引っ張っていく。やがて聞こえてきた透き通るような声。彼女たちが歌うのは、奇しくも絆を歌う詩だった。

「……」

藍子はたんこぶをさすっている。

誠一郎が一度顔を下に向け数秒。そして再び顔を上げたとき。

彼はニヤリと笑っていた。

「確かに、映研は今日で終わりだ。だが、なにも俺はこの場所を、お前等との時間を終わりにするとは言っていない」

起死回生。

「……！ では！」

和臣の顔に希望が宿る。

「ああ、そうさ、今日からこの愛好会は新たな姿に生まれ変わるん

だ。世界に類を見ない新しい集団へと新生するんだ！」
「……新生と申請かけてる？ それとも新生と真性？」

藍子は無視された。

軽音楽部の曲が最後のサビに入る。

ボーカルとコーラスが絶妙に絡み合い、絆を歌い上げる。ギターがうなりを上げ、ベースが全体をリードする。キーボードが彩りを加え、ドラムが全てをまとめ上げる。歌声は演奏の後押しを得て、感情全てを吐き出していく。

「遠からん者は音に聞け！ 近くば寄って目にも見よ！ 今日からここは——」

「ここは！？」

歌うよ、大好きをありがとう。彼女たちは奏でていく。

「ここは——勃起部だ！」

音楽が、突然止まる。

……どうやら歌詞をかんだらしかった。

第三話・「勃起するか？」

「B O K K I B U ?」

顔色を変えずに藍子が右に首をかしげる。

藍子の小顔よりも大きな疑問符が、ぴよこんと頭上に現れる。

「そうだ、勃起部だ」

「E r e c t i o n c l u b ? (訳・勃起部?)」

顔色を変えずに藍子が左に首をかしげる。

藍子の小顔よりも大きな疑問符が、ふわりと頭上に追加される。

「ああ、そうだ」

「おっき部？」

「暴走族を珍走団と呼ぶみたいに言うな」

「意味は同じ」

藍子の頭に浮かんでいた二つの疑問符が、子供の握りしめた風船のように空へのぼり、天井の中へ消えていった。それを見ていたわけではないだろうが、誠一郎は天井に目を馳せ、顎に手を当ててうんうんと考える。

「同じだが、こうぐつと来るものがあるだろう、ぐつと。おっきはこう……なんだ、目覚ましがじりじり鳴っていてだな、眠いから後五分……みたいなゆったりとして、怠惰で、春眠暁を覚えず的などころがあるだろうが。しかし、勃起は違うぞ！」

かっと目を見開く。

「布団を跳ねとばし！」

手で仮想布団を跳ね上げる。

「目覚ましを叩き付け！」

仮想目覚ましを投てきする。

「大声でおはようございます！　と言いながら、パンを加えたままドアを蹴破って登校するぐらい雰囲気あるだろ！」

仮想食パンに食いついたまま、走る振りをする。なんともオーバーアクションである。走り出した姿勢のまま首だけで藍子を見ると、藍子は反応してこくりとうなずいていた。

「うん、ある。雰囲気、ある」

「ぐつとくるだろ」

「ぐつとくる」

「勃起するか？」

「勃起する」

人から共感してもらえんというのは嬉しいものである。

「えらいぞ、藍子」

「うん、えらい」

自然と藍子の頭にのびた手が、絹のように滑らかな髪の毛を撫でる。撫でればさらさらと清流のように髪がゆらめき、光も追従するように流れる。まさに神聖な泉に手をそつと差し入れたときの波紋

のように。

「えらいえらい」

「うん、えらい。わたし、えらい」

えらい、えらい、と赤子のように繰り返す藍子は、誠一郎の手の感触を味わうようにまぶたを閉じる。

藍子は無表情だが、誠一郎には彼女が感じているのが分かった。ぴくりと反応する藍子の体軀、震え、その体温。吐き出される吐息には表情にはない色が混じっていた。

誠一郎も藍子を撫でるのが気持ちよくなってしまつて、何となく照れ隠ししてしまう。

「藍子、ちなみに、どこが勃起するんだ？」

「クリー」

「俺が馬鹿だったよ。俺の想像（胸の先端部）の一步先を行ったお前はすごいよ」

撫でていた手で藍子の口を塞ぐ。

「んーんんー……ぷは。……これは塞ぐプレイ？」

「こうしなければやんごとなき機関によって俺の口が塞がれそうな気がした」

「……。わたしは下の口を塞いで欲しい。溢れる前に栓をして欲しい」

「何が溢れるかは聞かないでおこう」

「愛え——……なんでもない」

拳を見せつける誠一郎の威圧感に藍子は言葉を飲込んだ。

第三話・「勃起するか？」（後書き）

興味を持って下さった方、読んでくださった方、ありがとうございます。早速ですが、言い訳です。実はこの二倍くらい書き終わっているんですが、推敲させてください。短くてごめんなさい。更新はすぐに出来ると思います。ではでは。評価、感想はもれなく作者の栄養になります。

第四話・「俺が勃起するために」

「そんなまさか……！」

端から見たら夫婦漫才とも取られかねない誠一郎と藍子の凸凹なやりとりの隣。

「僕達の絆を紡ぐこの場所が……！」

両手を震わせる和臣が、歯をがちがちとならすほどに身体をわななかせていた。

「そんな卑猥な名前の活動団体に………素晴らしい」

狂気の発明をした発明家が、自らの恐ろしさに身震いするようにぶつぶつと言葉を漏らす。

「そう、そうなのですね。要はこういうことなのですね」

校内の女子達が見たらゾクリとしてしまうほどの確信に満ちた目。

「陰茎の内部には、三つの海綿体が通っています。左右一对の陰茎海綿体と、その下側にある尿道海綿体の、計三本です。尿道海綿体は中に尿道が通っていることでも知られ、性的興奮やその他の生理現象により、静脈洞への血流が多くなると、海綿体は血液で満たされて膨張して硬くなります。これにより、陰茎全体も膨張して硬く変化する……これが勃起のメカニズム！」

額から滑り落ちた汗が和臣の美顔をなぞり、顎へ到達。狂気に引

かれた和臣と同様、重力に引かれて床に落ちていく。

「誠一郎君、藍子さん、つまり、勃起部とはこう例えられるのですよ。三つの海綿体、そのうち二つ陰茎海綿体は僕と藍子さん、そして尿道海綿体は誠一郎君。三人が一つの束となり、一つの強大な勃起を作り上げるのです。三人が、膨張して硬く、より雄々しく巨大に！ かの武将毛利元就は三人の息子を枕元に呼び寄せ、言ったそうです。一本では脆い矢も、三本束になれば頑丈になると。毛利兄弟の結束を強く訴えかけた逸話です。……同じですよ。海綿体だつて同じなのです。三人が束になればきつと……きつと最高の勃起が出来るはずです！ そそり立てるはずです！」

「……和臣、暑苦しい」

ぼそりと小声の文句を言い、藍子は誠一郎の腕にそつと自らの腕を絡める。さりげなく胸の感触を誠一郎に味わって欲しいとさらなる接近を試みる。

「なぜに近付く」

「誠一郎、クールだから」

顔を押し返される藍子。しかし、身体はしっかりと誠一郎にしがみついている。誠一郎はタコの吸盤に体中を蹂躪されているようなイメージが頭をよぎった。

「捻りが足りない、五十点」

「……誠一郎、冷たい」

「五十点、合わせ技一本って所か」

「……。また誉められた。今日は、良い日。今日は、良い日」

耳をほのかに赤くしながら、なにやら指折り数える藍子。額をぴ

たつと誠一郎の二の腕につけてぐりぐりと髪の毛を押しつけてきている。それはまるで、太陽の光をたっぷりと浴びた布団に顔を埋める瞬間の至福に似ていて、顔色は平板ながらもとても気持ちよさそうだった。なんとなく突っぱねるのも悪くなってしまうて、誠一郎は渋々藍子に腕を貸すことにする。

昔から、藍子には最後の最後で甘いのが誠一郎なのであった。そういうとき、大概胸の奥がくすぐったくなるのも昔と変わらない。

「そうまでして、そこまで考えて……誠一郎君、あなたは素晴らしすぎます」

くすぐったいのは藍子の行為だけではなかった。

和臣による手放しの称賛に、誠一郎は頬をポリポリとかく。

「そ、そんなにかな？」

「ええ、そんなにです。世界中を探しても勃起部なんて部活動は存在しないでしょう。なんというアバンギャルド。しかし、世間は僕たちを認めてはくれないでしょうね……」

「勃起だから」

静かに藍子は核心を突く。世界中が同意したくなる、もっともな理由である。

「いいえ、それだけではないのです。世界はいつだってそうでした。時代の先を行こうとする者は、そのあまりの革命的発想から大衆に受け入れられず、排斥される運命にありました。僕たちも例外ではないかもしれません。革命はいつだって過激。身に溜まった毒を全て吐き出すところから始まります。そういった産みの苦しみを味わってこそ、変革を感じることが出来る」

和臣は、開け放った窓の外をしみじみと眺める。その細められた眼差しの行く先にあるのは、歴史の中に葬り去られてきた名も無き英雄達の無念であろうか。

「リング上の殺虫剤、DDT (Dichloro Diphenyl Trichloroethane) ……その技を使いプロレスのリング上で数多くの猛者を撃ち倒してきた男が、二〇〇五年に突然この世を去りました」

神々しいまでの太陽光に包まれる和臣。誠一郎はそのとき、彼の額には白く長い鉢巻きがされているように見えた。目をこすった直後に、そのはちまきは跡形もなく消え去っていた。

「破壊王と呼ばれた彼は言いました。『破壊なくして創造はなし、悪しき古きが滅せねば誕生もなし、時代を開く勇者たれ』……と。彼もまた僕たち同様、強い絆で結ばれ闘魂三銃士と呼ばれていました。そして今、僕たちは映研という安寧を破壊し、勃起部を作り上げ、時代を開く勇者となった。誠一郎君、藍子さん、僕たち三人はいわば勇者とそのパーティなのです。勇者は紛れもなく誠一郎君、あなたです。そして、藍子さんと僕はその勇者に遣える——性奴隷」

「……オイ」

口の端をひくつかせる誠一郎。

「僕はその勇者の剛直な剣を受ける盾になりましたよう！」

和臣は歌劇団も驚嘆するほどの笑顔と神々しい光りを背中に背負ったまま、最高の笑顔を作る。

「そしてわたしはその勇者の極太な剣を入れる鞘になる」

瞬間的に腕から離れた藍子が和臣の隣でこれまた歌劇団もうらやむクールな立ち姿を決める。劇ならば大団円だっただろう……が。

「誰が受けて入れるか！」

破壊王もびっくりのチョップが二人の部員の頂点に落とされた。

「何をおっしゃいます！ 誠一郎君の剣はなまくらですか！」
「和臣、和臣」

目尻に涙を浮かべている和臣の袖を引く藍子。

「どうしました藍子さん」

「誠一郎の、今はなまくら」

「！ おっと、これは失礼。なに些細なことですよ。ああ、今日も外は良い天気です」

「うん、些細。今日も外は良い天気」

突然気まずく視線をそらして、二人で空を見上げ始めた。

「何二人で残念そうな顔をしゃがる！ なんか俺が傷ついてるみたいな感じになったじゃねえか！」

「大丈夫、いざとなればわたしが勇者様の剣をしこしこ磨いてあげる」

「しこしこで剣が磨けるか！ 磨くならごしごしだ！」
「分かった強めにしごく」

筒を持つように指を曲げると、藍子そのまま上下にピストン運動を始める。

「しご……その動きはやめなさい」

「分かったもっと早——」

「やめようね、藍子」

藍子の右手を取り、背中へと捻りあげて関節を締め上げる。誠一郎の非情なる関節技が藍子の首肯を導き出した。

「……誠一郎、わたしはもっと平和的な解決を望みたい」

「僕たちは絶つことの出来ない絆によって繋がれています！」

空気の読めない和臣の大声が、関節技を決める誠一郎と藍子にフロントから投げられるタオルの如く入り込む。

「その絆を武器に、僕たちは道無き道を前進するしかないのです。僕たちの作った轍を、後継者が道しるべとするために」

この台詞だけを聞いたら、おそらくは失神する女子が幾人も現れたことだろう。誠一郎は思った。将来メジャーなミュージシャンになることを夢見る貧乏な彼氏を、つついひもにしてしまう彼女の気持ちはこんな感じではないかと。

「——僕たちの正しさは、僕たちが証明するものではありません。後の歴史が僕たちの正しさを証明してくれるのです」

窓枠に手を置き、語りかけるように蒼穹を仰ぐ。和臣の後ろ髪がふわりと浮き、シャツが風でたなびく。和臣はいつだって何をやらせても馬鹿みたいに格好良い。

誠一郎は認識する。

部室に充満する熱さと夏の匂いが、和臣の額に浮かぶ熱意の汗と

一緒になり、大きな奔流となってぶつけられた気がした。映研であった頃には一度たりとも無かった感情の高ぶりがそこにはある。親友の心強い言葉が、誠一郎の内なる心にわずかな火を灯す。

これならば勃起できるかも知れない。

誠一郎は反抗期を迎えた息子を見下ろし、会話を試みようとする。しかし、息子はぴくりともしない。口を閉ざしたまま、頑固（固くはないが）にそこにあるだけだ。

「……ところで、誠一郎君」

蒼穹に背を向けて、真面目な顔を誠一郎に向ける。

「この部活は一体何をするのです？」

「和臣、馬鹿？」

「そうですね、柄にもなく熱くなってしまいました」

ははは、と笑って和臣がぼけてみせる。

「ま、いいさ、それも含めて和臣だ」

和臣の胸を拳で小ずくと、ウインク。

「誠一郎君、僕は不意に溢れた青春の雫で前が見えません」

「はい、ハンカチ」

「あ、ありがとうございます」

藍子の差し出した猫柄のハンカチで、丁寧に目元を拭う和臣。

「勃起部の活動は簡単だ。目的は一つしかないからな」

人差し指を、二人の部員に示す。

「俺が勃起するために、この世の全てを性の対象とすることだ」

第四話・「俺が勃起するために」（後書き）

興味を持って下さった方、読んでくださった方、ありがとうございます。今回はこんな馬鹿みたいな小説を書いています。本来はもっとちゃんとしたものを書いています。本当です。その証拠に、『小説家になろう』に投稿されている他の小説は……っていう宣伝です。興味を持たれた方は是非、読んでくださると嬉しいです。「スクール・オブ・ザ・デッド」とか、「多重人格な彼女」とかがオススメ。評価、感想はもれなく作者の栄養になります。ではでは。

第五話・「ぎゅっ」

「俺が勃起するために、この世の全てを性の対象とすることだ」

「この世の全てを性の対象に、ですか？」

目を丸くする和臣のオウム返しが、誠一郎の不敵な笑みを誘う。

「ああ、そうだ。物事には必ず始まりがあり、終わりがある。俺が起たなくなったのにも理由があるはずだ。そして、どうすれば起つことが出来るのか。俺は残りの人生を俺の勃起にかけたいと思う。明日は必ず来ると信じて。空けない夜はない。そして――」

誠一郎は、まるで艦隊指揮を務める司令官が全軍出撃と命令を下すように、右手を前方に大きく振った。

「――起たないアソコはないんだっ！」

「誠一郎」

「誠一郎君……」

驚く二人をしっかりと見つめる。

艦隊司令官の魂が乗り移ったかのような誠一郎は、次の瞬間、作戦の失敗全てを背負うような沈痛な面持ちで、二人に深く頭を垂れていた。

藍子と和臣は急激に上がったり落ちたり野誠一郎の態度に言葉を挟めないでいる。

「自分勝手だと、お前等には関係ないことだと十分理解してる。俺の自己満足のために、おそらく全生徒をも敵にしかねない。いや、全生徒で済めばマシかもしれない。生徒だけでなく教師、世間から

も……果ては世界からも敵視されるかも知れない。それでも、それでも俺は……俺は起ちたい」

木造校舎にある映画研究会の部室。床の木目を凝視しながら、誠一郎は頭を下げ続ける。

勃起部などという不届きな名前の部活を非公式にも立ち上げようとしている。俺が勃起できないことをいいことに、何も知らない女子達を見境なく性の対象としてしている。どう考えても百害あって一利しかない。一人が犠牲になることで他の百人を救える……なんて美談で終わる話でもない。もともと誰かが迷惑を被っているわけでもないから、俺が止めればそれで終わり。むしろ、こちらから仕掛けに行くだけなのだから、他人からしたらはた迷惑なだけだ。誠一郎は思考の荒波の中で歯を食いしぼる。

「どうしようもなく起ちたいんだ」

迷惑を顧みない行為。果たして友人達を巻き込んでまですることだろうか。黙っていても人望も、人気もある藍子と和臣だ。俺に付いてきたって株が下がるばかりだろう。

……でも、たとえそうだと分かっている、俺は俺の、男の尊厳を懸けて何が何でも勃起したい。自分が男であることをもう一度実感したい。

いつか他の誰かと幸せな家庭を築く、そのためのスタートラインに立ちたい。

綺麗事と言われてもいい。童貞で人生を終えるのがいやなだけじゃないのか、そう言われてもいい。気持ちよくなりたいだけじゃないのか。そう罵られてもいい。

なんと言われようが。何をされようが。俺は起ちたい。勃起したい。何が何でも。

「勃起したいんだ……っ！」

深く、そして切に誠一郎は腰を曲げ、真摯に言葉と態度で尽くす。

「今更恩着せがましく言われても困りますよ、誠一郎君」

拒絶するような落胆混じりの声に、誠一郎は胸がずきりと痛んだ。

「自分勝手？ 自己満足？ そんなものは犬の餌にでもしてしまえばいいのです」

顔を上げる。誠一郎の藁にもすがるような顔を見て、和臣はウインクしてみせる。

「そんな顔をしないでください。僕は言ったはずですよ。僕にとって、世界なんてどうなったって構わないと。誠一郎君と藍子さんさえいてくれれば、お二人との絆さえあれば、森羅万象すらも有象無象に属します。生徒が、教師が、世間が僕たちの敵？ 僕にとっては世界すらも敵視していませんよ。はっきり言って路傍の石です。誠一郎君が起ちたいと望むなら、僕は死して屍になろうともあなたの肉棒をすごいて見せますよ」

「和臣、お前って奴は……！」

涙が出そうになる。

「どうです？ 勃起しましたか？」

「ば、馬鹿言え、するかよ！」

和臣に見えないように目元を袖で拭う。

「ふふ、それは残念」

涼しい風が目元を抜けると、水滴の跡がよけいに冷たく感じられる。それが和臣にばれてしまうのではないかと、誠一郎はもう一度隠れて目元を拭った。

「さて、藍子さんはどうしますか？」

和臣の質問を藍子は視線だけで受け止める。誠一郎の顎に額がぶつかるのではというほどに接近すると、両手で誠一郎のシャツの胸元をぎゅっとつかむ。漆黒の瞳が誠一郎を下から見上げてくる。深く澄んだ瞳の表面にははつきりと誠一郎が映り込んでいた。瞳に映る誠一郎は小さく頼りない。藍子の瞳が深遠なる奈落であるならば、簡単に吸い込まれて、なすすべ無く落ちて行ってしまっただろう。

「わたしは、物心ついた頃から誠一郎のもの。ものに主張する権利はない」

まばたきはない。まつげの一本一本まで精巧な人形のようなだ。ころうじて人と分かるのは、唇だけが言葉の生成に忙しく動いているからだ。どこまでも純粹に美しい人形のような人間。あるいは人間のような人形か。

「誠一郎が白を黒と言え、それは白でも黒。死ねと言われれば、今すぐに死んでみせる。殺せと言われれば、たとえ神でも殺してみせる。壊せと言われれば、たとえ法則でさえ壊してみせる」

「藍子さん……」

「あ、藍子……」

藍子の言葉は強い。抑揚がない分ことさら強い。少女の深沈たる

態度で、誠一郎は身体を縛り上げられる。

「わたしは誠一郎の盾であり、矛であり、鎧であり、誠一郎の望むもののすべて。わたしの目、耳、鼻、唇、髪、肌、胸、腕、手、足、わたしを構成するすべては誠一郎のためにある。誠一郎のために磨かれている。すべてが誠一郎のために生きている。それがわたしという生き物。国方藍子の存在意義」

だというのに、身体が縛り上げられ、身も凍るような意思をぶつけられたというのに、藍子の言葉は誠一郎の深くに落ちていった。胸の真ん中に。障害もなく、驚くほどあっさりと。

「……。藍子、お前は本当にそれで良いのか？」

でなければ、誠一郎はこれほど落ち着いて言葉を発することが出来なかっただろう。

藍子の華奢な肩に手を乗せて問い返す。表情に色はなく、言葉にも抑揚はない。しかし、肌と肌を通して確かに伝わる藍子の火照りが、藍子は人形ではないと確信することが出来る。

「わたしには、その質問の意味が分からない。わたしにとっての選択肢は誠一郎。誠一郎が唯一の選択肢」

「全ての道はローマ……もとい、誠一郎君へ続くということですか。改めて言うことではありませんでしたね、藍子さんは誰にも負けないう誠一郎至上主義ですから。もちろん、僕も」

和臣が誠一郎の肩口に手を乗せる。藍子の体温ではない、もう一つの体温が誠一郎の中に染みこんでいく。熱く火照るそれは藍子に負けず劣らず。

「馬鹿野郎だ……」

三人が共有する体温が、いつしか同じ温度となった時。

誠一郎はまるで悪役が断末魔であげる哄笑のように大きく笑い出す。

「お前等は揃いも揃って馬鹿野郎どもだ！ ああ、俺は勃起する、俺は絶対に勃起してみせる！」

嬉しさの余り、肩をつかんでいた手を少女の背中に回し、誠一郎は自らの腕の中に収める。つまりは、抱きしめてしまった。

「あう……誠一郎、苦しい。でも、嬉しい。もっと強く、ぎゅっ、して」

「あ、藍子さん羨ましいですね、僕も、ぎゅっ、に混ぜていただけませんか？」

「！ あ、いや、これはもののはずみでだな……っ！」

とっさの出来事はやはりとっさに解除される。

「ぎゅっ。誠一郎、ぎゅっ、して」

「するか！」

だっこしてとせがむ赤ちゃんのように無防備に両手を伸ばす藍子。

「ぎゅっ。ぎゅっ、して」

「僕もぎゅっいいですか？」

冠詞に美と付いてもおかしくない二人に迫られながら、誠一郎は部室の中を逃げ惑う。嫌だ嫌だと逃げ回りながらも、誠一郎は心に

灯ったほのかな温かさに、身体が突き動かされるような思いだった。
今なら何時間でも二人から逃げ回れそうだな、そんな気がしていた。

第五話・「ぎゅっ」(後書き)

興味を持って下さった方、読んでくださった方、ありがとうございました。以降
ます。これで起承転結で言うところの”起”は終わりました。以降
を書くのが楽しみです。目標は変わらず週二回更新です。ではでは。

第六話・「恋人同士が交わすその意味で」

「さすがは誠一郎君ですね、先頭を切って行ってしまわれました」

鞆を肩に提げて真っ先に部室を出て行った誠一郎に遅れること数秒、和臣が微笑みのまま部室を出て行こうとする。誠一郎に蹴り開けられた反動でゆっくりと戻ってくるドアのノブを受け止めながら、和臣は振り返る。

「さて、僕たちも行きますか」

夕焼けに色に変わりつつある部室の薄い橙の中には、黄昏色に染まった無表情の少女。暖色が少女の髪を丁寧に染め上げる。意識しなくとも、藍子の鞆を肩にかける一動作にも美は発生していた。

まるで藍子につきまとうストーカーのように美さはどこからでもいつでも現れた。

美さにストーカーのようにつきまとわれるというのは、女性にとつては究極の羨望となるだろう。

「……和臣？」

じっと見られていることに気が付いた藍子が、夕焼けを背に首をかしげる。

「――藍子さん、僕はあなたが好きですよ。もちろん、恋人同士が交わすその意味で、です」

にこやかに、和臣は告白した。

「……」

夕焼けの中に残された二人。少女は淡いオレンジを背負い、白い肌は簡単に夕日の色の侵入を許す。少年はその少女の夕日に照らされた髪の美しさを見て、心の中で感嘆していた。

たった一人の人間のために作られたただ一つの美しさを考えていた。

いつもの微笑みを浮かべながら、和臣は親友の存在をほんの少しだけ疎ましく思ってしまう。決して外に出ることのないその思いは、即座に和臣の冷静に制御され、心の奥底に封印される。

「和臣の言っている意味で答えるのなら、わたしは誠一郎が好き。それ以外のことは考えられない」

「知っています。そう回答が返ってくることも一言一句予想できていました。そうだと分かっている、言っておきたかったです」

「……」

ドラマの中かと見紛うばかりの美男美女の共演。あまりにも整えられた舞台の上では、まるでモンタギュー家の一人息子とキャピュレット家の一人娘がたどるかの有名な悲劇の物語のように、他人には非現実性を帯びてさえみえただろう。

「ならなぜって顔をしていますね」

顔色の変わらない藍子の変化を読み取ることの出来るのは、二人だけ。藍子の思いを一心に浴びる誠一郎と、その親友である和臣だけ。

「おそらく僕が好きになる女性を挙げるしたら、まず藍子さんしかないでしょうね。それぐらい藍子さんは素晴らしく美しい女性で

す。もちろん、外見だけではなく中身もです」

「わたしは常に美しくなければならぬから」

「誠一郎君のために、ですね？」

「そう、誠一郎のために」

部屋の温度は徐々に下降線をたどっていく。まるで傾いていく夕日に連れ去られるように。

「だから、僕は藍子さんが好きなのです。誠一郎君に好かれようと、愛してもらおうと純粹に努力をする藍子さんが僕は好きなのです。しかしながら、誠一郎君はなかなかその好意に応えてはくれませんが……」

「誠一郎は、いつか応えてくれる」

「だいいいですね。あ、いや、嫌味な気持ちなど含まれていませんよ。これは本心からです」

「分かってる」

「繰り返しますが、僕は誠一郎君を好きな藍子さんが好きなのです。なんともはや、難儀なものですよ。考えてみてください、誠一郎君至上主義な藍子さんは僕を好きになることはありませんし、僕は誠一郎君至上主義の藍子さんが好きであるために藍子さんを自分のものにする事が出来ない。これは参りました」

困った顔を微笑みに重ねる。

「誠一郎君が勃起したいと望んでいるならば、僕はそれを全力で応援します。僕も誠一郎君は大好きですから。それともう一つ……誠一郎君を支える藍子さんも僕は支えて見せますよ」

「どうしてそんな確認するの」

ドアを押し開けて、一人廊下を出る。藍子に問いかけられた質問

を背中を受け、和臣は肩越しに首をひねってみせた。

「……さあ、なぜでしょうか。僕も分かりません。強いて言うなら、安心したいのではないのでしょうか。藍子さんは優しいですから。きつと僕を振ったりしないでしょうか？　だから、僕は藍子さんに自分の気持ちをさっさと伝えてしまうことで、優しさにつけていることに成功したのです。藍子さんが優しいことを良いことに、答えを先延ばしにしておうと。あるいは、保険でしょうか。好き嫌いの疑心暗鬼に陥るよりは、はっきりしてしまったほうが身の振り方が単純で済みますし。ふむむ、僕は僕が思っている以上に卑怯者のようです」

「卑怯じゃない」

音もなく部室の机に置かれた自らの鞆を肩にかけると、和臣の隣を通り過ぎる。

「それに、わたしは優しくなんかない」

「そうですか？」

「優しくなんかない」

毅然とした歩みで藍子は歩き出す。

「先に行く。戸締まり、お願い」

「お先にどうぞ。僕も後から合流しますよ」

ポケットから部室の鍵を取り出す和臣。親指で空中に弾くと、斜陽を受けてきらりと輝く。

「……結局、僕をこの場で振らなかった時点で、藍子さんは優しいですよ。そして、やはり僕は卑怯でした。誠一郎君、僕はこんな人

間ですが、嫌わないうでくださいね」

廊下で独りごちながら、和臣は映研から勃起部へと改名した部室と、親友に隠している藍子への思いに鍵をかけた。

「そして、藍子さん。あなたの想い、残念ながら前途は多難のようです」

背中から迫る甲高い足音を、和臣は背中で聞いていた。

迷いの一切無い歩みは、軍靴の足音にも似ていて、身を固くしてしまう緊張感すら音に含ませる。音は徐々に接近し、やがて和臣の近くで止まった。

第七話・「……怒るときは怒るんですよ」

「国方は相変わらずの葉山至上主義なのね」

剣の切っ先を突きつけるような鋭い声が、和臣を背中から斬りつけた。軍靴のような甲高い足音と、廊下に通る鋭い声質を持つ声の主は、まるで将官クラスの威圧感を感じさせる。

「風紀委員の狼さんが僕に何か御用でしょうか。申し訳ありませんが、本日の部活動は終了致しました。入部申し込みでしたら、後日また日を改めていただけませんか？」

「面白くもない冗談を言うのね」

「よく言われます」

背後を振り返った和臣。そこにいたのは、一度見たら忘れられない印象を称えた一人の凜然とした少女であった。栗色の髪を後ろで一つにまとめ上げ、前髪は目にかかるほどに長い。長いまつげと、細く整えられた眉は刃物を想像させ、それが一層、強気で鋭い目を引き立てている。一見すれば美少女ではあるが、本質として横たわっているのは、他を寄せ付けない冷酷さと、伶俐さだ。態度や言葉づかいにもそれは存分に現れている。藍子が機械的な冷たさだとすれば、この少女は人間的な冷たさであろう。

「でも、冗談は時と場合、何より人を選んだ方が良いわね。世の中には冗談で済まされることが多々あるから」

「七海さん、僕に何か――」

「六條よ。六條と呼びなさい。私を気安く下の名前で呼ばないで」

頭一つ違う和臣を見上げながらも、態度は明らかに見下す者の視

線。

「それは失礼しました。……では、改めまして六條さん、僕に何か御用でしょうか」

「ええ、単刀直入に言うわ。映画研究会なんて辞めて、風紀委員会に入りなさい。ここはあなたのいるべき場所ではないわ。あなたは極めて優秀な人間なのだから」

命令口調が廊下を反響する。

「六條さんのように、ですか？」

「そうね」

優秀な人間であることに迷いはないのだろう。あるいは自負があるのだろう。すんなりと肯定の言葉が唇からまろびでる。

「お誘いはありがたいのですが、僕はすでにこの部活に籍を置いておりますので」

「形だけの映画研究会に何の意味があるのかしら？ 活動報告の際に慌てて活動しているふりを見せるだけの墮落した部活。田中君のような優秀な人間がするようなことではないわ。怠惰無為に時間を浪費していくだけの非生産的な活動……本当にナンセンスね。早々に廃部にしたほうが学園のためだわ」

挑発的な目。目つきが悪いとも言えた。

左手を腰に当てて、顎をしゃくするようにまくし立てる六條。和臣は疲れたように右手で顔を覆いながら、少し困った風のため息を吐く。しかし、顔を覆った右手、その人差し指と中指の間からのぞく目は、誠一郎に見せる普段の和臣とは明らかに違っていた。

「六條さん、僕は一応理性的で通っておりますが……怒るときは怒るんですよ」

いつしか夕闇が廊下に帳を下ろし始める。夜にさしかかろうとする廊下には、和臣と六條以外、誰の姿もない。ロマンチックとはかけ離れたぴりぴりした空気が、二人の間で鏗迫り合う。

「ああ、そうだったわね。この部活にはアイツがいるんだったわね。感情のない人形女が――」

衝撃が、廊下の窓を揺らした。

和臣の左手が六條の耳朶のすぐ側を貫き、木造の壁にひびを入れていた。和臣の手が壁にわずかにめり込み、砕けた破片がばらばらと六條の制服の左肩に降り積もる。耳をつんざく音にもかかわらず、六條は涼しい顔で和臣の視線を受け止め続ける。

「田中君……他の生徒に見られたら勘違いされるわよ」

確かに、写真でもってこの状況を切り取れば、壁に女性を追い込んでいる強引な男……そんな構図とすることも出来ただろう。が、写真ではない現実の中においては物騒な表現ばかりがつきまとう構図でしかなかった。

「いえ、六條さんの肩に目障りな蚊がいただけですよ」

「そう、ありがとう」

明らかに作り笑いとも言える和臣の笑顔には興味も示さず、六條が肩に積もった破片を払う。

「いえいえ、どう致しまして。最近多いですよ。僕も近頃周りに

蚊が多くて悩まされていますから」

「気をつけた方が良いわよ。近頃の蚊はしつこいから。いつの間にか血が吸い尽くされていた、なんてことになるようにね」

「蚊取り線香でも焚きましようか」

和臣が皮肉すらこもった冗談を放つが六條は相手にしなかった。

「国方に言っておきなさい。私は決して許さない」と

「？　どういう意味です？」

「郵便配達員が運ぶ荷物の上に頭を回すところくなことになるわよ。その荷物が危険ならば危険なほど……ね」

「そうですか。では、危険な荷物を配達しないよう配達の際は肝に銘じておきますよ」

「ふざけた男」

吐き捨てて、髪を揺らしながら遠ざかっていく。背筋の伸びた後ろ姿、迷いのない歩調は、百メートル先からでも六條だと判別できるほど印象的な歩き姿だった。和臣はもうひとつ大きなため息を吐く。

「僕もまだまだ未熟のようです。しかしながら――」

ぴりぴりと痛む手をぶらぶらさせながら、鞆を肩に提げ直す。

「――僕には彼女のどこが良いのか分かりかねますよ、誠一郎君」

第七話・「……怒るときは怒るんですよ」(後書き)

連続更新ですね。シリアスっぽい感じは個人的には書きやすいです。

第八話・「人はなぜ過ちを繰り返すっ!」

右に藍子、左に和臣。それが誠一郎にとっての登校風景であった。一部で話題になっているこの美男美女を両手に持つ登校風景は、最初こそ誠一郎にとって気後れする日課でしかなかった。まるで、トレンチコートを着た二人の人間に両手を握られている、かの有名な捕まった宇宙人の写真のようでさえあった。

二人とも極端な誠一郎主義でありながら、極めて完璧な美男美女であるためにあらぬ噂を呼んだりもしたが、結局はただ気が合う者同士がどういう因果か出会って仲良くなってしまった……というごくごく当たり前の理由に落着した。

人の噂もなんとやらとはよく言ったもので、今ではこの左から右へ背が小さくなる順に並んだ三人の登校風景を見れば周囲の人間は、この三人が歩いているということは朝の閉門まで五分の時間があるな……などといういわゆる判定基準の一種にさえなっている。それは嫌でも目立つ藍子と和臣のせいに他ならないのだが、引き立てられるように、誠一郎もいつのまにか多くの知られるようになっていた。

……それが良きにつけ悪きにつけ。

「あ、和臣君だー、おはよー」

「おはよ、和臣君」

「美由紀さんに真由さん、おはようございます」

「ねね、あとで宿題見せてー」

「いいですよ」

「さすがっ! イケメンは違うね!」

「そうそう、美由紀さん、いつか紹介していただいた『ウツディ』というパスタのお店、先日行ってみましたよ。冷製パスタがとても良かったです」

「あ、行ってくれたの？　ね、言ったとおり美味しかったでしょ？」
「はい、美由紀さんはさすがです」

にっこりと微笑む和臣。十人が十人心穏やかにされる完璧な微笑みである。

「ちょっと美由紀、その店は私がアンタに教えたんじゃない。ねえ、それって抜け駆けよね？　分かってる？　和臣君はみんなのものなんだからね、協定を破ったバツとして、和臣君は私にも宿題を見せること」

「……。真由さん、それって僕へのバツじゃないですか……？」

「あ、気が付いた？　あはは」

「あはは、じゃないわよ真由。じゃ、和臣君、またねー」

最後に和臣の肩をとんと叩き、三人を追い抜いていく二人の女子生徒。

「……ねえ、美由紀、今さりげなく和臣君触ったでしょ！」

「知らなーい！　知らなーい！」

追い抜いた先でなにやらききやうふと騒ぎ会っている二人である。

「和臣……今の誰だ？　仲、いいのか？　いや、お前が誰よりモテることは知ってるんだがな……」

誠一郎が難しい顔で考え込んでいる。

「おや、誠一郎君、嫉妬ですか？　嬉しいです」
「だ、断じて違うぞ」

「オウ、シット」

和臣が微笑みながら朗らかに何かを言った。

「……」

「……」

木の葉がくるりと一回転。三人の間を季節外れの木枯らしが拭く。通学の途中で吹き荒ぶ寒風に身をさらしながら、三人の歩みが止まる。身を切るような寒さの中で、顔色一つ変えない藍子が誠一郎の袖をくいくいと引く。それはまるで雪山で遭難して眠ってしまいそうになる相棒を励ますような素振りに似ていた。

「誠一郎、誠一郎。……大変、誠一郎の動きが止まってる」

「……ハッ！ ふう……死ぬかと思ったぜ……」

頭と肩に降り積もった雪を身震いで払い落とす。仮想雪は、どうやら誠一郎が空想から覚めると同時に溶けてしまったようだ。

「まさか、分かっているにも絶対に言わないシヤレを平然と言っているとは……やるな和臣」

「Oops！ I Did It Again……（おっと、またやっちゃいましたか）」

「ブリトニー・スピアーズもびっくり」

「ああ、Toxic（毒性）なことこの上ないな……」

「和臣……Baby One More Time（ねえ、もう一回）」

「ではお言葉に甘えて——」

「やらせるかよっ！」

和臣の口を塞ぎにかかる。

「いいか、俺はお前に嫉妬したんじゃないぞ。嫉妬なんか……するかよ。ただ、その、なんだ……」

もぐもぐと口の中で言葉を噛み砕く。

「さっきのお二人は一組の長谷部美由紀さんと、三組の鈴木真由さんですよ。お二人は同じ演劇部に所属していて、とても仲がよろしいのです。よく部活動の帰りに駅前の喫茶店のケーキを頬張っている姿を見ますよ」

和臣の楽しそうなにこにこ顔に、誠一郎は一抹の不安を覚える。

夏蟬の呑気な鳴き声が、熱さを余計に盛り上げた。

「……和臣」

「はい、なんででしょう？」

「お前、分かっててからかったな」

「はい。誠一郎君至上主義者としては、誠一郎君に嫉妬していただけるのはこの上ない喜びですから」

「だから俺は嫉妬なんかしてないってだな——」

「誠一郎が……嫉妬。誠一郎が……嫉妬。誠一郎が……嫉妬。……わたしも、嫉妬させる」

口の端をひくつかせる誠一郎の拳と、それを見て降参とばかりに両手を上げるポーズをする和臣。そして、誠一郎と和臣のやりとりを見ていた藍子が、口元に手を当ててぼそぼそとやんごとなき台詞をつぶやく。夜の神社で見かけたら、間違いなく五寸釘とわら人形を持っていそうなつぶやき方であった。

「お、藍子さんだ。チーッス！」

「……おはよう」

強面の男子生徒が、藍子を追い抜くと同時に深く頭を下げる。

「チッス、藍子さん」

「おはようございます、国方さん」

運動部とおぼしき屈強な男から、眼鏡をかけたインテリ風の男、果ては汗っかきな太った男からも、次々に声をかけられる。校門の近くになってからは余計にそのエンカウント率は増える。

藍子は頬の筋肉一つ動かさずに、ひとつひとつ律儀に挨拶を返す。腹話術師の人形のようにではあるが、唇が動いていることから、かろうじてその比喻からは逃れられている。

「オッス、国方さん、今日も相変わらずのクールビューティーっぷり、最高っす！ では！」

「おはよう……。……！」

藍子はなにかを思いついたかのように人差し指を立て、声をよく聞かせるために誠一郎により近付く。すでに袖と袖は触れあっており、身をとろけさせるような柑橘系の香りが、誠一郎の鼻先を一層くすぐった。

「誠一郎、誠一郎」

「ん、なんだ」

身体を寄せて、藍子が誠一郎の耳元でささやく。

「今の誰か、聞いて」

意図の分からない問いに怪訝そうに眉をひそめる誠一郎。

「は？ 知るかよ。確か四組の奴と……もう一人は五組ので、あとは……分らん」

「誠一郎、嫉妬。……嬉しい」

「おい、今のどこに嫉妬するような要素があった」

「オウ、シットー」

「人はなぜ過ちを繰り返すっ！」

藍子の策略に気が付いた誠一郎が機先を制する。

藍子の美しい顔貌を左右から引っ張り、引き延ばす。まるで獲物に絡みつく大蛇のようである。白磁のような真っ白な頬が、つねられたところからみるみる赤みを帯びてくる。

「あらら、藍子さんのほっぺがまるで正月の焼き餅のように伸びて……むむ、焼き餅のように……？ 焼き餅……やきもち……やきもち……嫉妬……オウ、シットー」

「させるかあああっ！」

藍子の頬を解放。

回転させた身体の手度そのままに、和臣の頬を強襲する二匹の大蛇。

「痛いです……誠一郎君」

両隣の美男美女は、もれなく頬が赤かった。

第八話・「人はなぜ過ちを繰り返すっ!」(後書き)

作者が楽しんで書いているせいで(横道に逸れているせいで)、これの二倍書けておりますが、とりあえずここまでで掲載します。一話は3,000文字程度が理想だと思っています。ではでは。

第九話・「……言って」

両隣の美男美女は、もれなく頬が赤かった。おたふく風邪を引いたように頬を赤く張らす二人の美男女は、それでもどこか嬉しそうに頬を抱えている。サドとかマゾとかそう言った属性云々を超越して、誠一郎にそうされることが嬉しいという感覚でさえある。

「誠一郎……痛い」

「誠一郎君、痛いです」

「くそ……まるでウロボロスかメビウスの輪のようにぐるぐる話を戻しやがって……」

「長いものには巻かれると良いみたいですよ」

ぽんと手を叩く和臣の頭上を、のどかにツバメのつがいが飛んでいく。峠でダウンヒルバトルをする二台の車のように、同じコースを阿吽の急旋回でつかず離れず飛行するツバメに、目を奪われる。と、同時にため息を吐く誠一郎は、その二匹のツバメを羨ましそうに眺め始めた。

「長いものに巻かれるより、わたしは縛られたい。恋人的な意味でも、肉体的な意味でも。……強く。強く、誠一郎に」

「束縛ですか、いいですね。愛し合う男女ならばこそ許されるインモラルな行為です。もちろん、両方の意味で、ですが」

ブルーインパルスの如くアクロバット飛行を繰り返すと、やがてツバメは二羽仲良く電線の上に止まる。こくりと二羽うなづくような仕草をすると、また飛び立っていく。

誠一郎が思い浮かべたのは、恋人同士ではしゃぐ浜辺的一幕……きやつ、冷たい！ やったなつ、このっ！ あはは、うふふ……的

テンプレートな展開。

爽やかな朝に目を細める誠一郎。

ツバメはなんて自由なのだろう。俺も自由になりたい。朝っぱらから嫉妬とか束縛とか、愛憎渦巻くことのない自由な世界へ……―
―そうして、逃避の先に輝く朝の光が誠一郎を包み込む。

「和臣、違う。束縛ではない。緊縛がいい。強く。きつく。わたしの肌に跡が残るくらい……激しく。荒々しく。わたしが誠一郎の所有物であることをわたしの身体に教え込む。……調教する」

「藍子さん、あなたって人はなんて……！ 聞きましたか誠一郎君、藍子さんにここまで言ってもらえるなんて、あなたはなんて幸福――……誠一郎君？」

ああ、世界は、なんて綺麗なだろう。新緑の鮮やかさ、朝露の輝き、世界はこんなにも儚く美しいのに……！ 昔の俺ならば、それを純粋な心で受け止めることができただろう。美しいものを美しいと感じることが出来ただろう。

「誠一郎君？ どうしたのですか、そのような菩薩のような穏やかな表情をして……？」

しかし、今の俺にそれは出来ない。俺は世界を敵に回してでも勃起すると決めたのだから！

「そうだ藍子、良い子にしていたら後で教室の椅子に縛り付けてやろう」

「！」

藍子の耳に猫耳が生えていたら、きつとぴょこんと跳ね上がったに違いない。無表情のまま誠一郎の顔を凝視する。藍子の瞳に映る

誠一郎は、モーニングティーをたしなむ上流貴族のように穏やかであつた。

「手は後ろ手に縛り上げて、口にはガムテープだぞ、いいだろう。俺を思っているなら、受け入れられる。お前ならきつと受け入れられるはずだ」

「！……わたし、できる。誠一郎を受け入れる」

待てを言われた黒猫のような藍子が、ご褒美ほしさに腕にすり寄ってくる。

「ああ、誠一郎君の表情がみるみる恐ろしいものに……」

日射病患者のようにふらりと身体をよろめかせる。誠一郎は身体を寄せてくる和臣の肩を押しやりながら、切り替えるようにため息を吐いた。

「……。冗談だ、真に受けるなよ、藍子」

「後ろ手に縛り上げる……口にガムテープ……クロロホルム……誘拐……身代金……ストックホルム症候群……禁断の愛……二人が一つに……わたしの小さい……誠一郎の大きい……痛い、でも、嬉しい……動いて……」

「真に受けるなつての」

最速での脳天にチョップが振り下ろされる。

「痛い。今、良いところだったのに。誠一郎の童貞が、私の処女が」

「勝手に俺の童貞を奪わないでいただきたい」

「わたしは勝手に奪われてもいい」

「奪わん」

「奪って」

「……誠一郎君、藍子さん、お話は一時中断に致しませんか」
「ん？ どうした和臣——」

和臣の真剣な声の先。

学園の門に、腕章をした女が立っていた。

腕章には黒字で風紀委員会と書かれている。栗色の髪と強気さを前面に出す鋭い目。まるで研ぎ澄まされた刃物のような少女——六條七海が、腕を組んで仁王立ちしていた。

「相変わらず、朝から馬鹿な話には事欠かないのね」

「おはようございます、六條さん。今日も良い天気ですね」

笑顔を浮かべる和臣とは対照的に、無愛想を決め込む藍子。無表情ではない、無愛想。他人が見れば藍子はいつものフラットさを保っているように見えたが、誠一郎と和臣からすればそれは無表情でも険悪な部類に属しているものだった。だから、無愛想。

「おはよう、和臣君。……藍子、私には朝の挨拶はしてくれないのかしら？」

「……」

数秒の沈黙は雄弁なるものだった。

明らかな六條の拒絶と、それを受け止める藍子。火花散らすではない、抜き身の真剣を互いの首筋にあてがう極限の緊張感。それは鼻で笑う六條によって、簡単に打ち破られた。

「憎たらしい女」

「ろ、六條！ ……さん」

頬の筋肉が強ばった藍子に気が付いて、誠一郎は慌てて会話に紛れ込もうとする。

「お、おはよう、今日も暑いな」

誠一郎は視界に入っているにもかかわらず、軽く無視されてしまう。

誠一郎は、ちくり、と胸が痛むのを感じた。

無視されるだけならばおそらくこんな痛みは感じなかった。むしろ、無視されなくなるまでつつこんでいくのが葉山誠一郎という人間だった。

しかし、誠一郎はそれが出来ずにいた。出来ないばかりか、制御できない痛みは黒い霧を発生させ、朝の親友との騒がしくも楽しかった喧噪を薄緒のように消し去っていく。

自分が自分で憎たらしい。誠一郎は痛みと共にそんなことを思った。

「ね、和臣君、昨日の話少しぐらいは考えておいてね」

誠一郎を無視したまま、六條は和臣に話しかけた。

「さて何のことでしょうか」

誠一郎の隣では和臣が微笑みを浮かべたまま空とぼけてみせる。肩をすくめる姿は絵になっていて嫌味の一つも感じさせない。ただし、それは嫌味を感じさせないだけで、好感を持たせることはない。唯一、和臣のいらだちを感じられる誠一郎ではあるが、今の誠一郎には無理なことであった。

棘を刺されたかのような痛みが、胸の奥に残ったままでは。

「……」

藍子の口元が声もなく動く。誠一郎、と彼女は声もなくつぶやいていた。

瞳の中には誠一郎が映ったまま。誠一郎の瞳の中にある痛みを正確に読み取る。

「……七海」

校門前に漂う不穏な空気が、学園の門をくぐる生徒達さえも避けて通させる。藍子の低い声は、その場に存在する人間の耳に否応なく滑り込む。突然、背中を駆け上がった戦慄に周囲の生徒達はきろきよろと辺りを見回す。それを平然と受け止めるのは六條七海、その人であった。首筋には見えない刃が今なおあてがわれ、互いの喉元を切り裂こうとかがっている。

「人形がしゃべったわ。驚きね。何年ぶりかしら？」

「……七海」

「そうね……真言宗大本山浄土寺の本尊秘仏の開帳ぐらい久しぶりじゃないかしら」

初めて藍子は自らの意思で誠一郎の前に進み出た。

「誠一郎に挨拶して。おはようって、言って」

誠一郎をかばうように前に出、藍子に音もなく近付いていく。

「誠一郎は、言った。おはようって、言った」

藍子と六條。手を伸ばせば触れることの出来る距離。

「どうして私がこんな駄目人間に挨拶しなきゃいけないのよ」

駄目人間。その言葉が槍のように誠一郎に伸びる。その槍を誠一郎に突き刺さる寸前で受け止めるように、藍子は六條の手首を握りしめていた。

「……言って」

六條が力でふりほどこうとするがびくともしない。藍子の静かな力が六條を制する。

「……ぐ……放しなさいよ」

長い前髪からのぞく、切れ長の目。

「言って」

応じるは、絶対零度。

「私は学園の風紀を守る風紀委員よ。こんなことをしてただで済むと思っているの?」

「藍子、長くなるようなら、俺は先行くぞ」

誠一郎の精一杯の軽口。

平常時の声で言えただろうか。何気なく言えただろうか。

誠一郎は緊張の中でそんなことを考えていた。

「誠一郎……。でも、誠一郎は挨拶した。おはようって、言った」
「気にすんなよ。それより遅刻するのは嫌だぞ、俺は」

「行く。誠一郎が、そう言うなら」

生まれた軋轢が実は夢でしたと言わんばかりの、変わり身の速さだった。六條の手首を解放した藍子は、ご主人様に呼ばれた犬のように素早く誠一郎の隣に並ぶ。誠一郎の右。指定席。

誠一郎はたしなめるように藍子の額を軽く握った拳で小ずく。

藍子は誠一郎の人差し指が触れた箇所にと手をつなわせ、噛みしめるようにぼそりとつぶやく。

「……。誠一郎が痛いこと、わたしも痛いこと。それは嫌だから。わたしのせいだから」

藍子の声を聞いて、誠一郎は大きく深呼吸する。ちくりと痛む胸の痛みを振り切るように、六條を振り返る。

「六條さん」

夏の日差しを後方に控える六條が誠一郎を視界に捕らえる。仇敵を見るに値する、鋭い眼光が突き刺さる。

しかし、誠一郎は、それに恐怖や嫌悪といった負の意識を抱くことはなかった。

胸は変わらず痛い。ちくり、ちくりと痛む。

それでも、痛みに耐えるだけではどうにもならないと思ったから、純粹に反発したかった。

訳の分からない痛みに反発したかった。

「——おはよう！」

手を挙げて一言。

誠一郎の大声に六條は一瞬虚を突かれた顔になるが、次の瞬間に

は苦々しい顔で手首をさすりはじめる。

「……………」

「さて、僕も行かなくては。では六條さん、お大事に」

一礼して去っていく。和臣が小走りに誠一郎の左に並ぶ。

「葉山、誠一郎……。藍子が唯一、心を許した人間……」

怨嗟を吐く六條の手首は赤く、手の跡がくつきりと残っていた。

「…………ふざけないで。そんなことは許されないわ…………許されないのよ…………！」

第九話・「……言って」(後書き)

Q.. シリアスでしょうか。

A.. いいえ、ラブコメディです。

第十話・「おっぱいおっぱい」

教室。

朝のホームルームが始まるまでの喧噪に囲まれながら、誠一郎は頭を抱えていた。

「ぬぐぐ……」

抱える原因となっているのは、学園門をくぐったときの六條との一幕である。

「くそ……駄目だ。なぜだ。なぜなんだ。六條さんの前に出ると俺は緊張の余り、いつものような上手い言葉が出てこないんだ……！
うぬぬ……」

「日頃からそんな上手い言葉を言っていましたっけ？」

和臣は誠一郎の背後の席。

「エロい言葉？」

藍子は誠一郎の隣の席である。

必要な人間に必要な配置につかせる漫画的な席配列で、誠一郎は額に汗を浮かべながら無理に笑ってみせる。

「うぐぐ……ふふ、いいさ、次こそは、次こそは……きちんとした会話を！」

「気を落とさないでください、誠一郎君。ほら、藍子さんも何か誠一郎君に言葉を」

「エロい言葉なら、かけてあげられる」

「これは期待できそうですね」

「誠一郎」

頭を抱えていた誠一郎の頬を人差し指でつつく。

「……なんだ藍子」

「おっばい。誠一郎、おっばいおっばい」

「大間違いだ！　それで俺が元気になると思っているならな！」

耳たぶにキスをする距離まで詰め寄られたせいで、甘い吐息が耳にくすぐったい。誠一郎が椅子を蹴倒す勢いで身体を起こす。電撃のような感覚がすごい勢いで背筋を駆け上がっていく。

「なった。誠一郎が元気になった」

「本当ですね」

「でも、ここは元気じゃないみたい」

「女性が男性のそこにためらいなく手を伸ばすな」

ズボンの真ん中にためらいなく伸びてくる手をパチンとはたき落とす。

「誠一郎はためらいなく男性のそこを伸ばしていい。そのために、わたしというおかずがいる」

叩かれた手を痛がりもせず、立ち上がっている誠一郎を上目遣いに見つめる。

「あ、藍子、お前は俺のオカズには――」

「そういえば聞くのを忘れていましたが、本日の起床時、誠一郎君は……夜間陰莖勃起現象をされましたか？」

和臣の声が誠一郎の言葉尻をかすめ取る。

「そのいかにも正式名称っぽいものが朝立ちのことを指していると
するなら、残念ながら答えはノーだ。……俺はまだ独り立ちできな
いでいる。色々な意味で俺は自立できない子供なのさ」

「なにやらシニカルな雰囲気ですね」

「……独り立ちできない誠一郎、かわいそう。……おっばいおっば
い」

「頭を撫でるのは構わないが、よしよし、の代わりにおっばいとい
う言葉を使うんじゃない」

「誠一郎が、元気になると思って」

「マンネリは駄目ということですね、勉強になりました」

「分かった。次は、足でやってみる」

椅子に座ったまま足を立てて、黒いニーソックスをいそいそと脱
ぎ始める。椅子の上に足を立てたせいで、短いスカートは、重力に
堪えられずにすんと太ももの付け根に向かって落ちていく。

それが意味するところは……。

透き通るような白いふくらはぎから、柔らかそうな太ももから、
お尻の丸さから、純白の下着から全てが誠一郎から丸見えと言うこ
とだ。反則的に色っぽい仕草。ニーソックスはするりとつま先から
解き放たれ、整えられた足の爪までも一般公開される。

藍子は、その神の造形とも呼べる美しい足を、そのまま誠一郎に
向かってそっと伸ばしてみせた。

「足で……する」

その神々しい光景に気が付いた生徒は、口をあんぐりと開けたま
ま、あるいは雑談のキャッチボールを受け取ることも出来ずに後方

に逸らしたまま、視線だけで藍子をロックオンする。

教室の喧噪が一気に静まっていく。

集中力の限りを尽くし、記憶に藍子の光景をインプット。類い希なる協調性だった。

「あ、足を下ろすんだ、藍子。クラスメイトの心がみだりに揺さぶられている」

「……分かった。誠一郎が言うなら、下ろす」

教室中の男子からため息がついてで、元の喧噪に戻りかけ――

「椅子の上で足を立ててニーソックスを履くのも禁止だ！」

即座に藍子へとロックオン。

「さすがは藍子さんです。どのような振る舞いをしてもお美しい。脱ぐときと、着るとき、どちらにも様式美がありますね。往々にして、男は脱がせる方に意識をしがちですが、着させる方にも美しさがあると僕は思います」

最上級のオペラにスタンディングオーベーションをする観客のように拍手する和臣。

「和臣、お前がそうやって甘やかすから藍子は調子に乗ると思わないのか」

「そうでしょうか。僕は誠一郎君が甘やかさないから、藍子さんが頑張るのだと思うのですが」

「そ……それは違う」

和臣の言葉に、喉元まで出かかった言葉が声になることを拒否す

る。

「そう言うことにしておきましょう」

ドスンと椅子に腰を落とし、ふてくされたように口を一文字に引き結ぶ誠一郎であった。藍子は言われたとおり椅子に足を立てるのをやめて、ゆっくりとニーソックスを履いている。

「ねえねえ、藍子」

三人の会話が一段落したと見たのか、藍子の前の女子生徒が藍子に話しかけていた。

「今日の身体測定のことだけど、体操着に着替えて午後一から保健室だったよね？」

「……うん、そう」

「了解、サンキュ。あゝあ、これじゃ、お昼は抜かないと駄目じゃん……」

簡単に用件だけを済ませた女性生徒が前に向き直ると同時に、誠一郎の脳内フィラメントに電流が流れる。

「身体、測定……？」

「ええ、確か、本日の午後に予定されていますね。それが何か？」

「……これはチャンスだ」

凶悪な微笑。

「ふふ、ふふふ……決めた、俺は決めたぞ。今ここに勃起部の最初の活動を宣言する」

「ええと、声高らかに宣言するのは控えてくださいね、もうすぐ先生も来ますし、何となく内容が内容だと思いますので」

バッテリーに落ち付けの仕草をする監督のように、両手でトーンダウンを指示する。それにこくりとうなずいて、誠一郎は後方の誠一郎に顔を近付ける。

「ああ、興奮を抑えきれないとは俺らしくもない。……和臣、俺は――のぞきをする」

「のぞき……。それが誠一郎君の最初の餌食――もとい、オカズになるのですね」

「そうだ。記念すべき勃起のための最初のオカズだ……。いや、男の尊厳を再構築するための地盤確保と言い直してもいい！」

「言い直す前と後では、なんだか壮大な違いがありますね」

「……わたしは、どうすればいいの」

「藍子、すまないがお前が出る幕はない。待機だ」

「……」

頭ごなしに却下され、藍子は押し黙る。

誠一郎にとっては最高の協力者である和臣との作戦に全戦力を傾けているので、仕方がないといえば仕方がなかった。ピッチャーマウンド上に集まった選手のように口元を隠して、誠一郎が会話を続行する。

「和臣、早速だが協力して欲しい。昼休みに部室へ緊急集合だ。そこで作戦を練る」

「誠一郎、わたしは……」

「だから今回は待機だと――そうだ、身体測定の場合は保健室だったな……。詳細な見取り図を作成しておいてくれないか」

「拝承です。薬品の配置から、ベッドの下まで分かるものを作成し

て見せますよ」

笑顔で困難な依頼を承諾する。

「それでこそ、和臣だ……！」

武者震いを隠しきれない。

これほどまでに興奮する行為が世の中にあっただろうか。いや、ない。

今ならば全国の犯罪者達がなぜそんな無謀な濃いに熱中できるのか、少しだけだが分かるような気がする。アダルトビデオや、エロ本、エッチなサイト、ゲーム……氾濫し、浸透した性を取ることで確かに性欲は満たされるかも知れない。

しかし、それはあくまで仮のものでしかない。偽物でしかない。

本物は、そこにはない。

本物は戦場にのみあるのだ。

戦場の風、それが人間を大人にする。

リスクのないものに何の意味がある。リスクを押して得た宝の価値に人は興奮し、歓喜する。ハイリスク、ハイリターン。

そうだ、どうして今までそれに気がつけなかったんだ、誠一郎！俺はやる。勃起部の栄えある第一回目の活動として！

わなわなと震える誠一郎。血で汚れているわけでもない両手を見下ろす。

「これが、生きているという実感なのか……！」

「誠——」

「うるさい、待機だ。お前はしっかり身体測定を受けろ」

「……。分かった……。待機する。でもその代りお願いがある。うまくいったら……。誠一郎がわたしを身体測定して」

「ん……？ あ？ ああ、いいぞ、わかった」

自らの意思で犯す禁忌。その興奮に打ち震えていたせいで、誠一郎は藍子の妥協案を聞き逃してしまう。

「！ 全力で、待機する……！」

「や、安請け合ひしてよろしいのですか？」

慌てたように誠一郎をうかがうが、狂気に染まった誠一郎には無駄なことであった。

「どうせ簡単なことだろ、知ったことか。それより今は作戦開始が楽しみで仕方がない……っ！」

映画には、最初は調子よく暗躍していたが、最後に追い詰められて見苦しい命乞いをするボスがよく登場する。

誠一郎の笑いは、それに似ていたと某クラスメイトは後に証言する。

第十話・「おっばいおっばい」(後書き)

セクハラのようなこの話も話数が十話になりました。蛇足ですが、各話の題名は、その回の台詞によって決めるのが、私のささやかなポリシーです。

第十一話・「ぺろぺろ」

「誠一郎君、藍子さん、これをご覧下さい。最新のものです」

お昼休みまったただ中、勃起部の三人が部室の中央に寄せた机の周りに集まる。

肩に担いでいたくると丸められているA1用紙を、和臣が机いっぱい広げる。中身は保健室の詳細な見取り図であった。

用紙のすみには、西暦と十一時五十分と言う時間が印刷されている。

学園の昼休みが十二時ちょうどからであることを考えると、あり得ない時間帯である。誠一郎の隣で同じように授業を受けていた和臣がどうやってこの最新の見取り図を作成し、出力することが出来たのか……誠一郎は、和臣が我が友であることに安堵する。

「誠一郎君は、この昼休みの間にこの地図を全て頭にたたき込んで下さい」

誠一郎が無言でうなづく。頬を滑り落ちる汗を袖で拭いながら、かつて無いほどの集中力で見取り図とにらめっこを開始する。

「お二人とも、これは極秘任務です。極秘任務と言えば情報の漏洩は大敵。……ということで、作戦説明の前に簡単などころから決めておきましょうか」

「何を決めるんだ？」

「いわゆるひとつのコールサインですよ」

和臣が得意げに指を立てる。誠一郎は、コールサインと聞いた瞬間、隣にいる藍子と顔を見合わせる。藍子は淡く頬を染めて目をつ

ぶり、くいと顎を上げた。無防備に突き出された口唇。長いまつげがまぶたの下に影を作り出している。

どうやら、何か壮大な勘違いしているらしかった。

「コールサインだと……！」

誠一郎は藍子の唇を無下に手のひらでさえぎる。ふぎゅっ……という音が聞こえたかは定かではないが、小顔の藍子は簡単に誠一郎の手のひらに覆われてしまった。

「ふふ、コールサインか、なんだか格好良いな。アルファーとか、ベータとか、映画でよく見るアレのことか」

「そうです。まあ、大概アルファーチームがいたら、真っ先に敵にやられてしまうんですけれど」

「たしかに、先遣隊や、先攻するチームがあったら、映画的な演出上、敵の強大さを煽る目的でも見せしめにやられてしまうからな。もはや、『アルファーチームが全滅だと……！』みたいな台詞や、通信途絶する直前のアルファーチームの叫び声はテンプレートの感すら漂って……って何してる藍子」

「……ぺろぺろ」

手のひらに感じる、ちろちろとしたくすぐったい感触。

誠一郎は温かく、かつ柔らかい舌使いに背筋をゾクリとさせられる。

「……藍子」

「ぺろぺろ……。……ん。誠一郎、どうしたの」

「おいしいか？」

「ん……。おいしい。……。ぺろ」

「それは良かった——な！」

握り拳一つはあろうかという巨大なたんこぶが、藍子の頭上に出
来上がった。

「お前は少し常識をわきまえろ」

「……………誠一郎が、私を無視する。嫌い」

「俺は嫌いで結構」

「あ……………」

誠一郎が藍子から顔を背けると、藍子の顔が寂しさに染まる。それが和臣の角度からははっきりと見えた。藍子の平行線をたどる感情の波形を、こうも簡単に乱れさせることのできる誠一郎に、和臣は少しだけ羨ましくなる。

「まあ、藍子さんらしいではないですか。ところで、特に異議がなければ、誠一郎君が先程言ったコールサインをそのまま採用しようとおもうのですが」

「ああ、それで問題無——」

「異議あり」

藍子の手が音もなく上げられる。最速で上がった挙手に音はない。まるでかの時代に暗躍した女忍者……………くの一を彷彿とさせる所作であつた。

誠一郎がそのあまりの速さに隣でびくりと身体を震わせた。

「私に決めさせて」

「よろしいですか、誠一郎君？」

「……………まあ、いいだろ」

「ありがとう、誠一郎。大好き」

告白された。

「嫌いじゃなかったのか？」

「嫌いが好きになった」

誠一郎はあからさまにやれやれといった表情で、手を振る。

「なんでも良いからさっさと決めろ、時間がもったいない」

「……」

いい加減に振られた手を視線で律儀に追う藍子。無表情がなにやら不満げな色に染まったのを和臣は感じていが、あえて言葉には出さなかった。

「じゃ、決める。コールサインは、たった今から私がアルファー」

「ああ、お前がアルファーな」

「和臣が、ベータ」

「ベータ了解です」

「誠一郎が、ふにゃちん」

「ふにゃちん了か——オイ」

「どうしましたか、ふにゃちん？」

「どうしたの、ふにゃちん？」

「今、何かおかしかっただろ」

「おかしくない、ただコールサインを決めただけ」

「明確なる悪意を感じる。しかも味方からだ」

「心外。私たちはふにゃちんのために全力を尽くしている。ふにゃちんが何に対して怒っているのか私には分からない。……確かに、この任務は危険。ふにゃちんがこれから危険な任務に赴くのは知っているし、それによってふにゃちんに多大な危険が迫ることも知っている。でも、ふにゃちんにはふにゃちんである矜持を取り戻した

めにふにゃちゃんには——」

「お前等は俺を傷つけたいのか！」

ばんばんと見取り図ごと机を叩く。

「そんな！ これは任務です！ 任務がなければ僕だってふにゃちゃんなんて……」

「そうこれは任務。だから、ふにゃちゃんはふにゃちゃんじゃなくちゃいけないの」

「いいだろう、お前がそう来るのなら俺にも考えがあるぞ。……藍子」

誠一郎が真剣な声で藍子——アルファーを見つめる。

「私はアルファー、藍子じゃない」

「そうか、残念だ。実は、俺はずっと前から藍子のことを——」

「……！ 私が藍子。アルファー何それ美味しいの」

「おやおや、アルファーが任務を放棄してしまいました。さすがは自称、誠一郎君の性奴隷だけありますね。すでに調教済ということですか」

拍手と共に誠一郎を称える和臣。

「誠一郎、私のことずっと前から……。その先は」

「あ？ ああ……友達だと思っていたぞ」

さも当然の如く言っただけの誠一郎に、藍子の背景には木枯らしが吹き荒ぶのが見えたという。

「……友達」

「ああ、友達だ」

「……フレンド」

「フレンドだ」

「ガールフレンド」

「まあ、ガールなフレンドではある」

「セック―」

「その手にはのらん」

「だ、そうですよ、藍子さん。今はまだそのときではないということとで」

「うん、今回は引き下がる」

こくりと藍子が素直にうなずいた。

「藍子さんがアルファ―。ベータが僕。誠一郎君がガンマ、ということ」

「最初からこうなっていれば、俺の心に傷はなかった」

胸を押さえてわざとらしい苦い顔をする。

「ははは、それについてはすみません。つい、藍子さんの味方をしたくなってしまいました。……さて、時間も有限ですし、作戦前のレクリエーションはここまでにしましよう」

和臣はポケットからチェスの駒を取り出すと、それを地図の上に並べ始めた。

第十一話・「ぺろぺろ」(後書き)

お久しぶりです。またこれから頑張り出します。

第十二話・「……私、壊れる」

黒と白のチェスの駒のうち、黒のクイーンを取ると地図上の保健室の上にとんと置く。

「保険医である高木奈緒美先生は、普段はおっとりしていますが、仕事には厳しい先生です。時間に遅れることや、予定外の行動をする先生ではありません」

「そうだな、奈緒美先生はそういう人だ。ふんわりしていてすごく優しくて頼りになって、何より女性らしい包容力に溢れた先生だ。そして、いざというときには厳しく叱ってくれる……理想の大人だな」

保険医らしく私服の上から白衣を纏った姿。長い髪をお団子状に頭の上に纏めているせいか、ほんわかした顔が快活さを増し、より小顔が強調されている。お団子先生などと馬鹿にした輩が夜道で何者かに襲撃されたとか。

「……大きい胸がいいの？」

「俺の発言と回想のどこに、その単語を引き出す要素があったか教えてもらおうか」

「発言と回想にはなくても、誠一郎のいやらしい顔で——」

「男ってこれだからっ！」

がくりとくずおれる誠一郎。どうやら藍子に凶星を突かれたらしい。

「誠一郎、ドンマイ。大きいものよりも小さいもののほうがいいってことを、私が誠一郎に教えてあげる。フロントホックとか、スポ

「ツブラとか……他にも色々」

「何で下着の話なんだ？ 俺はてっきり直接的な手段で来るのかと思っただぞ」

「それもそれでいい。誠一郎が望むならすぐそうしてあげる。でも、今はもっと別の角度で魅力を訴える」

「誠一郎君、藍子さんはこう言いたいんですよ。バリエーション豊かな下着を楽しめるのは胸が小さい方だと。後ろに手を回すのではなく、前から外す……それがフロントホックのもたらす冒険であり、情熱なのです。そして、またあるときはスポーツツブラを無理矢理ずり下げ、あるいはずり上げる荒々しさに興奮し……と、誠一郎君には伝わっていただけたようですね」

誠一郎を見る和臣がにっこりと嬉しそうに微笑む。

「誠一郎、ハンカチ」

「あ、ああ、すまない。俺はまだまだ下着のなんたるかを分かっていなかったんだな。くそ、戦場でもないのに出血してしまうとは情けない」

「でも懸念もありますよ。最近日本人の食文化が欧米化しておりますから、日本人の平均のバストサイズは増加傾向にありますので、胸の大きな人達向けの下着も充実しております。つまり、前述した行為は今や普遍的なもので、胸の大きさに左右されるということとは……和臣が敵になるのなら容赦しない」

藍子は無表情だが、その背後には黒いオーラを静かに纏った死神が立っている。

「めっそうもない！ 僕はいつだって藍子さんの味方ですよ！」

「……。ならいい」

「じゃ、俺は和臣の味方をしようかな」

意地悪な思考が誠一郎に軽口を言わせる。

「……っ！」

藍子が何かに気が付いたようにびくりと肩を震わせる。誠一郎は和臣に視線を向けているために、斜め後ろに控えている藍子は死角になっている。

誠一郎には見えないものを、和臣は見ていた。

肩を震わせて、手で顔面を覆う藍子を視界に捕らえていた。

部室の中の停滞した風が、ひとりでに藍子を中心として黒い渦を巻き始める錯覚。頭痛でも隠すような仕草ではあるが、様子が尋常ではなかった。美しい黒髪が逆立つほどの狂わしい感情と、冷や汗と、定まらない視線……。藍子の口は、浜辺に打ち上げられた死に損ないの魚のようにぱくぱくと、文章にならない出来損ないの無言を紡いでいる。

和臣がそれを読唇することには。

……和臣が私の敵……誠一郎は和臣の味方……誠一郎は私の味方じゃない……私の敵……誠一郎は私を……私を……――

複雑怪奇な方程式の結論が、最後にはたった一つの答えを導き出すように、藍子の言葉はある一つの結論に集束していつているように和臣には感じられた。その結論に藍子が達したときに迎える終末は、きつと光景として酷くおぞましい。そんな論拠もない答えが、泡立つように人の穴という穴から吹き出し、和臣に警鐘を鳴らした。

「誠一郎君」

「ん？」

「今のは冗談だと言ってください」

和臣のにこやかな表情。しかし、誠一郎にはそれが焦っているよ

うにも見えた。それが一体何を意味するのか、誠一郎にはとっさに分かりかねた。

「ん？　なんでだ？」

「どうか冗談であると言ってください。お願いします」

「……分かった。……冗談だ」

「良くできました」

和臣が安心したように笑ってみせる。教え子の成長を見守る教師のような笑みだった。

「藍子さん、ということですので心配はご無用ですよ」

「……」

「藍子はどうした？」

後ろに控えていた藍子を振り返る誠一郎。

「……藍子？」

藍子は右手で顔を覆ったまま、静止している。極度に怯えたような風体は脱したもの、いましがた自分自身に訪れた台風が一体何であったのかを分からないような、呆けたような顔をしていた。渦巻いた風は台風一過を思わせるように、綺麗さっぱり無くなっていた。錯覚で良かったと和臣は内心ほっと胸をなで下ろす。

「どうした、気分でも悪いのか？」

誠一郎が心配そうに、藍子の額に手のひらを押しつける。額は低血圧の藍子にしては珍しく熱く火照っていた。医者ならば間違いない相対を言い渡す体温である。

「……誠一郎、冷たい」

「それだと俺の性格のことに聞こえるぞ」

「誠一郎、冷たい」

薫香がふわりと揺れた。

「お、おい！」

「おやおや」

藍子がまるで誠一郎の隙間に入り込むように、するりと身体を密着させる。誠一郎の存在を感じ取るように。人が人に触れられる最大の表面積を藍子は求めていた。夏服であることもそうだが、薄着はあつと言う間に体温を肌から肌へ伝達する。藍子から誠一郎へ体温は逃げていく。

甘い匂いと、柔らかい肌、透き通るような髪感触。藍子を構成するその要素は、どれもとびきり過ぎて誠一郎は男女を感じる以上に緊張してしまう。

「誠一郎で、私の熱、冷ますの」

誠一郎の身体に触れた小さな言葉は、吐息と共に誠一郎の制服に吸い込まれていく。

「誠一郎と、私の間には、真空さえあればいい」

さらにぴったりと身体を密着させる。藍子と誠一郎を隔てるわずかな空氣の隙間さえうらめしいのだろうか。ベストポジションを探すように身体をもぞもぞと動かしてくつつこうとする。無いとはいえどほのかにふくらんだ藍子の胸は、下着ごと誠一郎のみぞおちの

あたりでぐにやりと潰れている。下着のわずかに硬質な繊維の感触、その内側には、確実に人の身体で一番柔らかいなものが二つ並んでいて、それは否応なく誠一郎の神経をかき乱す。

「も、もういいだろ、藍子。離れてくれ」

「……誠一郎」

うずめた誠一郎の胸から上目遣い。凶悪すぎる角度で見上げられ、誠一郎はたじろいだ。

「……なんだ」

顔を真っ赤にしながらそっぽを向く誠一郎に、藍子がとどめの一言。こともあろうに太ももを誠一郎の股の間にすり入れてくるおまけ付きであった。

「——ここ、固くした？」

「このビッチがつ！」

態勢を入れ替えると、背後から藍子の左足に自分の左足をからめるようにフックさせる。神速で藍子の右腕の下を経由して、左腕を藍子の首の後ろに巻きつける誠一郎。

最後に背筋を伸ばすように伸び上がらせる。藍子身体が例えようのない悲鳴を上げた。

「……誠一郎……私、壊れる」

「いいからこのまま壊れとけ。お前の思考回路同様にな！」

ぎりぎりぎり。

「恐ろしい！ これは恐ろしい！ 誠一郎君、見事なまでのコブラツイストです。往年のアントニオ猪木を彷彿とさせるだけでなく、女性に対して容赦なく繰り出すその姿勢に、僕は驚きを通り越して感嘆の意さえ感じます。特に、両手をクラッチさせることで威力を増そうとしているところに、一層の容赦のなさが感じられますね」

なぜかしきりにうなづく和臣であった。

「ところで……作戦の説明はいつさせてもらえるのでしょうか、誠一郎君？ 藍子さん？」

なぜかしきりに冷や汗を流す誠一郎であった。

第十三話・「冒頭からクライマックス」

「保健医である高木奈緒美先生が仕事に厳しい真面目な先生であることは、先程誠一郎君がおっしゃっていたとおりです。気まぐれな行動を起こすことはありませんし、言葉で言っただけでどうにかするわけでもありません」

「じゃあ、どうするんだ？」

腕を組んで難しい顔をする。その誠一郎の顔を見て、和臣はうっすらと微笑んだ。

「真面目だからこそ……悪い言い方をすれば、仕事に忠実だからこそ、逆に予測しやすいのですよ。まず、昼休みが終わると同時に、女子生徒は更衣室へ。そこで着替えを済ませ、身体測定のために保健室へと移動を始めます。そうですね、藍子さん？」

「そう」

こくり。

よくよく考えれば誠一郎にのぞかれる側の女子生徒である藍子だが、彼女にとってそれは問題ではなかった。理由は、考えるまでもない。

……のぞかれる相手が誠一郎だからだ。

女子生徒達にとっては、獅子身中の虫……とんだ内通者なのである。

「女子生徒が更衣室から保健室へ移動をする時間、まさにそこを突きます」

うなづく藍子を見て、和臣は地図上の保健室に置かれた黒のクイ

ーンの駒を再び手に取った。

「昼休みが終わる直前、僕が高木先生を呼び出します。理由は、まあ、どうしてもなるでしょう。僕は存外、他人からの信頼があるようですから。普段からの行いのたまものですね」

にっこりと笑う。照れも、自慢も、意地悪さもない、知っているという気持ちのいい笑い。雨上がりの晴れ間を思わせるほどのすがすがしささえある。これが誠一郎や、他の生徒であれば雷雨前の曇天の如くに嫌味にも聞こえただろうが、そこが和臣のすごいところであった。ただの面が良いだけのイケメンではない、真にどこまでも、それこそ怖いくらいにイケてるメンズなのだ。

「保健室に常駐している高木先生が僕に呼び出され、保健室は当然無人。今日に限っては保健室のベッドは身体測定のために空にされていますから、闖入者の心配ありません」

黒のクイーンが保健室から外に出される。保健室はもぬけの空だ。次に和臣は、白のポーンをいくつか手に取ると、保健室から離れた部分に並べ始める。

「その頃、僕たち男子生徒は視聴覚室にて社会倫理学のビデオ学習です。上映開始と同時に室内は暗闇に閉ざされ、滅多なことがない限りは教室から出てはばれることはないでしょう」

映画館の上映時、背後の観客をしきりにうかがう人間などいない。最奥の座席に座ってさえしまえば、前列の観客達の視界に入り込むことはない。和臣が並べた白のポーンはどうやら男子生徒を意味するらしい。そのうちの一つ——おそらくそれが誠一郎なのだろう——が、白のポーン達から離れたところに移動させられる。移動場所

は、無人の保健室。

「ただ一つ、注意していただきたいのは、誠一郎君は必ず視聴覚室には上映開始まではいていただかなければならないことです。これを怠るといざというときにアリバイをつくる事が出来ませんからね」

誠一郎の頬を汗が流れる。気温がそうさせたのではない。ミッシェンの難易度が自然と誠一郎の頬を強ばらせる。汗は頬の筋肉の上を、まるで堀に水を流すように次々と同じ筋をたどって流れていく。誠一郎は先程から、藍子から借りっぱなしになっているハンカチで頬の汗を拭う。

血と汗がにじんだハンカチは、さながら戦場を生きる戦士のそれだ。

「分かった。俺はチャイムと同時に視聴覚室の一番後ろの座席に座って、上映開始になったら、抜け出して保健室へ向かうんだな」

「はい、その通りです。女子生徒が保健室に向かうまでに」

「かつ、高木先生が保健室へ戻るまで」

和臣の跡を継いで、藍子が条件を追加する。完全なる時間との勝負。

「誠一郎君には申し訳ありませんが、冒頭からクライマックスですよ。保健室に侵入できなければそこでジ・エンドです」

「ふふ……分かってるさ、映画にありがちなパターンだ」

引きつった笑みを浮かべる誠一郎。言葉とは裏腹に余裕はない。それでも、誠一郎はおのが崇高な目的のため、挑まざるを得ない。無茶でも、無謀でも、やるしかないのだ。

保健室に置かれた自分の化身とも言える一つの白いポーンを凝視する。

そそり立て。勃起しろ。起つんだ、起つんだ誠一郎。あの角度を取り戻すんだ。

誠一郎の心の中では、圧政に苦しむ民衆達が武器を持って蜂起していた。

——勃起！ 勃起！ 勃起！

民衆達の咆哮が誠一郎の逸物を奮い立たせようとする。

「『アルマゲドン』だったら、ニューヨークに隕石が落ちてくるところかな」

「はい。『ザ・ロック』なら、ハメル將軍の決意のシーンです」

「……『トランスフォーマー2』。冒頭の巨大なデイセプティコンとの死闘」

共通するのは全てマイケル・ベイ監督。エンターテイメントの巨匠だった。三人の息がぴったりとかみ合わなければ、作戦の成功はない。

第十四話・「オペレーション・スクール・ナース・オフィス」

時計の針が、作戦開始の十分前を刻む。

和臣は時計にちらりと目を向けた後、誠一郎、藍子と視線を交わして得意げに口を開いた。

「本作戦は、これよりオペレーション・スクール・ナース・オフィスと呼称します」

「く、おおっ……！」

誠一郎は自分の力を確かめるように手のひらを閉じたり開いたりを繰り返す。やがて迷いを握りつぶすように握り拳を作ると、ふふふ、と不気味な笑いをこぼした。

「作戦名を決めた途端、俄然やる気が増してくるのは何でだろうなっ！」

「……。……誠一郎が、雰囲気当てられてる」

「オペレーション・スクール・ナース・オフィス。略称はO・S・

N・O・……オスノ……雄の作戦か……！ まさにこの日のために与えたもうたようなイケてる作戦名ッ！」

わなわなと震え出す誠一郎。

「冒頭からクライマックス……苛烈な戦線……次々と倒れていく仲間達……なんということだ！」

誠一郎が妄想へダイブ。

「悲劇が、運命が俺という勃起不全者をもてあそぶというのかっ！

うおおおおっ！」

「……誠一郎が燃えてる。すでに戦闘モード」

「誠一郎君だけではありませんよ、藍子さん。何を隠そう、僕もやる気です。最上級のマンマンやる気で誠一郎君をここからバックアップさせていただきます。ここはいわゆるH^{ヘッドクォーター}Q、中央司令部ってやつですからね。保健の高木先生を保健室から引き離れたあとはここで作戦指揮を執らせていただきます。これはその秘密兵器です」

隠す所などないはずの和臣の背後から、黒い物体が現れた。

和臣の手のひらには棒状のマイクが付属されているヘッドホン。にこやかに髪をかきあげながら、瞳の奥に自信をうかがわせる和臣がみせたそれは。

「……ヘッドセット」

「はい、その通りです。1945年にフリッツ・ゼンハイザー博士によって設立された、かの有名なゼンハイザー製ですよ。何を隠そう、僕はこのブランドのヘッドホンが好きで、最近HD800というフラグシップヘッドホンを購入させていただきました。まるでコンサートホールに投げ込まれたような、音場の広さと繊細な音色に目から……いえ、耳から鱗が落ちました。さすがにフラグシップ——旗艦というだけあって値段も張りますが、僕はそれだけの勝ちがあると思わせていただきます。先代フラグシップであったHD650も捨てがたい魅力に溢れていてですね——」

ぺちん。

「——っ!？ あ、藍子さん？ 僕は一体……?」

軽い暗転の後、頭に軽い衝撃を受けたらしい和臣が目をぱちくりさせると、目の前で手刀を挙げて無表情を決め込む藍子に出会う。

どうやら、藍子にチョップをたたき込まれたらしかった。起きている間のほとんどが誠一郎を追いかけている藍子にとってはとても珍しい他者への介入であった。

「話が進まない」

とはいえ、それは回り回って誠一郎を想うことから来る介入であり、特段珍しいことでもない……が、和臣にとってはそれがとても嬉しかったらしい。驚きに頭を押さえたまま、頬だけがほんのりと赤くなっていく。

「ぼ、僕としたことが、恥ずかしい限りです。藍子さんにこのような醜態を……」

切り替えるように咳払い。

「……コホン、では藍子さんにはこれを進呈致します。一見耳栓のようですが、高性能無線インナーイヤホンです。通話することは不可能ですが、こちらの指示を受け取ることは出来ます。今回の藍子さんの任務上、指示は受け取るのみとなっております」

「わかった」

「僕は、この開放型無線タイプのヘッドセットで指示を致します。誠一郎君にはこの小型の耳かけ用でマイクと一体になっている小型のものを。もちろん、使用は単独行動時に限られます。授業中にこんなものをしていたら明らかにおかしいですから。ちなみにどのヘッドホンも電波干渉や障害物に強い2・4GHz帯デジタル無線伝送方式を採用しておりますので安心してください」

ヘッドホンを装着しマイクの集音部を口元に近付けると、テスト、マイクテスト、本日は晴天なり、と流暢な英語混じりで発声練習

習する。

「ちなみに、藍子さん。本日は晴天なのですが、なぜ本日は晴天な
りか分かりますか？」

「……知ってるナリ」

「……。藍子さんが言うのと唐突にかわいいですね、それ。少しどき
つとしてしまいました」

「……！ 誠一郎にやってみる」

無表情の上に感嘆符が飛び出す。

「誠——」

「藍子！ 藍子おおおお——っ！ くそ、こんなところでお前
を失うなんて、俺は一体どうすれば良いんだっ！」

ただ一人、いつまでも妄想に没頭している馬鹿一人。

「……和臣。今、私、誠一郎の中で殉職した」

藍子が自分を指差す。

「二階級特進ですね」

「かずおみいいいい——っ！」

「……二階級特進」

藍子に指を差される和臣。

「は、ははは……僕もですね」

「藍子は自爆だからいいとして。和臣、お前は、お、俺をかばって
……くそおおおっ！」

「あ、藍子さん……？ 苦しいので首を絞めるのは止めていただけませんか……？ さすがにこれ以上の二階級特進は遠慮願いたいたいところですが……」

「……わたしも誠一郎をかばいたかった」

和臣を解放すると、自分を抱きしめるように手を回す藍子。

「で……でしたら、クレームの矛先が間違っているような……ゴホ……
……気もしないではないのですが……ゴホ、ゴホ……」

無言の圧力によって息も絶え絶えな和臣であった。

「お前等は、馬鹿野郎だ！ さっさと俺より偉くなっていきやがって……」

主役のはずの誠一郎はなぜかいまだにトリップを続けていた。

藍子は少しでも哀しそうに目を細めて、窓の外に向き直る。

「英語の発声試験語である「It is fine today」が由来。英語の It is fine today. には、英語の発声法のあらゆる要素が含まれていて、声が明瞭に伝わるか否かという試験には最適の言葉だった。これを直訳して日本で取り入れてしまったために、奇妙な形で定着したのが始まり」

窓の外は青々とした蒼穹。

「正解です、藍子さん」

本日は晴天なり。

第十五話・「お椀型」

そんなこんなで、作戦開始時刻はあつと言う間に訪れてしまった。軽い打ち合わせ程度の説明はあつたものの、畢竟するところ、論理的な戦術や、特殊部隊らしい打ち合わせも戦略も詳しく打ち合わせないままで――その雰囲気はあつたが――決行の時を迎えてしまったのであつた。

その責任の所在がどこにあるかというのは、改めて問うまでもない。

「では、オペレーション・スクール・ナース・オフィス……スタートです」

無言のまま三人が視線を合わせる。まばたき一回の間でアイコンタクトは解除され、各自の持ち場に向かう。

静かなる作戦開始であつた。

毎日が特殊部隊であるような無表情の藍子は、音もなく間教室へ入っていく。それに数秒遅れる形で誠一郎も口笛をふきながら、そわそわきよろきよると何とも不自然極まりない入室をした。普段吹かない口笛を吹いてまで入室したのは訳がある。

……ただ単に、いざとなったら緊張して普段の自分を忘れてしまっただけだった。

この世の中、普通のことをいかなる時も普通に出来る人間というのは、実のところ数少ない。一流アスリートですら、本番に普段の自分の力を出そうとして失敗している。練習で出せないものを本番では出せないように、意識して普通を演じることは難易度が高いのだった。

「あー、藍子きたー」

けだるげな声の主は、藍子のクラスメイト中村絵里なかむらえりである。茶髪の先をくるくると指に絡めながらため息を吐く。藍子が無表情のまま絵里を見つめていると、絵里はなにやら怪しい笑みを浮かべて藍子に近付く。

「ねえねえ、マジ今日の身体測定鬱なんですけどー、藍子はそう思わない？」

早速、自然にこの後の身体測定の話題に捕まっている藍子である。

「思わない」

藍子は後ずさることもなく、にじり寄ってくる絵里に答えを返す。

「アタシなんか特にこの胸の辺がき、気になるのよねー……っ！」

むにゅ、という音がしたかは定かではないが、少なくとも藍子の胸は無造作に絵里の手のひらに収まっていた。

そして、わきわきと指をいやらしく動かすと、むー、とか、うー、とか、ふむふむ、とか考え込む声を出しながらしきりに頷いていた。

「ぬっふふ、この感触……藍子、今回もアタシが勝ちをもらうよ」

茶髪で派手目めな女の子に無抵抗のまま胸を揉まれている構図に、教室中の視線が釘付けだ。

教室の男子を見れば、次々に男子が近くの席に着席していく。

自分の席でもないのに、だ。

視線は釘付けのまま、腰だけを下ろす。もしくは不自然な中腰で、腰が痛い振りを始める男子生徒まで複数人数いた。

誠一郎だけが所在なげにそのやりとりを眺めていた。

「しかし、あれだよー」

むにむにむにむに。

男子の悩みどころなど知らぬとばかりに、絵里は指を動かしたまま話を続ける。まるで流れ作業中の店員のようである。

「藍子のってさー、ちっさいんだけど形が良いんだよねー、お椀型って言うかさ、アレも上向いてるし、こちとらさ、ブラして寄せてあげて頑張って形整えるってのにー」

アレ。アレって何だ。藍子さんのアレってなんだ。

ま、まさか、ちくー……クラス中の男子の中でアイコンタクトが成立する。

ごそごそと、なにやら局部で変異するあるもののポジションを気にし出す者まで続出し始めた。

「ニシシ、やっぱり彼氏に揉まれてると違うんかねえ……」

絵里のことさらいやらしい笑を受け、ちらと藍子が誠一郎を見る。

「……最近は、ご無沙汰」

「おい！？ あらぬ妄言を！？」

藍子の背後で、佇立したままどうしようか考えていた誠一郎が盛大に前足をすべらせる。

「えー、ちょっと葉山ってば、藍子はべらしてるくせに何贅沢いっ

てんのよ、藍子みたいないい女、アタシをのぞいて他にいないよ？
自分の立場わかってんの？　ねー？」

襟首を捕まれて誠一郎がぐいっと引き寄せられる。きつい香水の匂いが首元から漂ってくる。自分の立場が分かっていないのは実は言い出した本人では……という素直な疑問が誠一郎の頭に湧いたが、何とか押しとどめる。

「分かってる、分かってるって」

「ホントー？」

「ホントだ、うん、ホント」

強気の瞳に気圧される誠一郎だが、そこは男子たる矜持が働いてか、言葉を震わせたりはしなかった。そして、捕まれた襟の手を無下に払ったりしなかったのも、この絵里という少女が見かけとは裏腹に自分の自己満足のためにそうしているのではなく、藍子を考えてそうしているのが分かったためだった。

絵里は審美眼を光らせる職人のようにじろりと誠一郎を見る。

「ふーん……ま、これ以上は藍子に殺されるから止めとくけどさー」

語尾を上げる口調はさすがに女子高生といった風情であった。

それが一変、絵里はその特徴的な口調の声音を極端に下げる。誠一郎だけに聞こえる低い声で睨みと共に声をぶつける。

「藍子泣かせたら、アタシ許さないかね。いくら藍子が誠一郎至上主義だからって、シていいことってのがあるんだからさ。ま、アタシが何言ったってこんな見てくれだから、説得力無いけどね」

言うだけ言っつつかんだ襟首を解放する。

絵里からは解放された誠一郎だが、絵里の香水の匂いからは解放されなかった。停滞したまま誠一郎の鼻先を停滞する。

誠一郎はその香水の匂いにむせかえりそうになりながらも、何とか言葉を紡ぐ。

「そ、そんなことないぞ。俺はな、忠告は真面目に受けることにしてるんだ」

襟を正しながら、藍子を指差す。

「第一、見てくれなんか関係ないだろうが。藍子を見てみる、見てくれは……見てくれは、まあ……さ、最高かも知れないが、中身は一線を越えてる一級品の変態だ。多少見てくれはダメでも中身が最高ってんなら、もしも、その二つの選択なら、俺なら迷わずその逆を取る」

「ふーん……。……あつそ。それにさ、誠一郎、アンタ……。フォロ―してるつもりかも知れないけど、アタシのこと馬鹿にしてるでしょ。いきなり熱くなってキモイ、引くわ」

「お前が先だろが！」

「知らない」

「ぬ、ぐ……。…」

背を向けて席に戻ろうとする絵里に齒がみする誠一郎。齒ぎしりしながら先程の言動を思い返す。

脳内アナウンサー曰く。

——今のシーンリプレイでもう一度。

サッカーのゴールシーンのように他角度からリプレイされる音と映像。確かに自分でも恥ずかしいことを熱く語ってしまったことに

気が付き、顔が真っ赤になる。もがき苦しむ誠一郎。

その光景を肩越しにちらりと絵里が振り返る。真っ赤になる誠一郎に半ば呆れつつも、

「ったく、馬鹿じゃないの。……。ちよつと……。格好良いじゃん」

「なんだ？」

語尾が消えてしまつて聞き取れない誠一郎が、眉を訝しげにたわめる。

「胸の形がいい藍子が羨ましいっていつてんのよ。絡んで悪かったわね」

手をひらひらと振る絵里の前に、散々胸を揉まれていた藍子が立ちふさがる。

闇夜に暗躍する暗殺者のような音もない動き。

「……誠一郎は誰にも渡さない」

声にならないつぶやきだったはず。

「いやいや、誰もこんな産廃いらないから！」

ぎくりとした絵里が反射的に言い放つ。

「産廃とは酷いな！」

「そんな誠一郎を私がプルサーマル」

「使用済核燃料だどっ!？」

「意味不明だし。付き合ってらんない。ていうか、そろそろ更衣室

行かなきゃだし」

一瞬跳ね上がった心臓を落ち着けるように、絵里はジャージの袋を持つ。

第十六話・「わたしの身体好き？」

「藍子ー、行こー」

無言のままこくりとうなづく藍子。その絵里の声に触発されてか、藍子を含めた女子生徒達が教室から着替えの体操着を持ってぞろぞろと出て行く。その女子生徒の合間を縫うように、絵里に呼ばれた藍子がなぜか戻ってくる。

誠一郎の袖を指でつまんでくいくいと引いた。

「ん、なんだ、藍子？」

「誠一郎はわたしの裸好き？ わたしの身体好き？」

撫でて欲しくてすり寄ってくる子猫のような、愛らしい瞳。無表情な分、藍子は瞳で語りかけてくる。そして、俺はなぜかそれが少しだけ分かってしまう。これが絆なんだろうか。

「……お前の裸見て嫌う奴なんか、俺が奈落の底に落として……いや」

そこまで言いかけて、俺の心は勝手に否定を口にした。

「前提がおかしい。そもそもお前の裸を嫌う以前の問題だな」

藍子の頭をぐりぐりと乱暴に撫でる。

「お前の裸を見ようとする奴は、俺が奈落の底に落としてやるよ」

藍子は頬を少しだけ淡く染めるとぼそり。

「……うん。必ず落として」

袖をつまんでいた手を放し、絵里に付いていく。藍子の芸術品のような身体を見たくない人間なんかこの世にいるはずがない。男女関係なく、美しいものは皆好きはずだ。では、誠一郎にはそれを見る資格があるのかと言えば、誠一郎にはとてもそれがあるように思えないのだった。ポケットに手を突っ込んで少し物思いにふける。

と、指先にふわりとした感触。

「ハンカチ返すの忘れてた。……ま、洗って返してやるか」

作戦説明の際に鼻血が出た時に、藍子が貸してくれたものだ。

「——と、女子は全員行ったみたいだな」

教室を見回せば男子以外誰もいない。男子もちらほらと視聴覚室に向かっていているようだった。誠一郎は最後部の座席を確保するために慌てて教室を出る。

最初の段階から手間取ってはいられない。

決して走らず、足早にクラスメイトを追い抜く誠一郎。最後方の座席は往々にして人気がある。席替えや自由席の集会、席の移動が自由な大学の講義などでは、まずやる気の無い生徒達が多い場合、後ろの座席から埋まっていくものだ。真面目な生徒は前の席、そうでない生徒は後ろの席といった具合に。

女子が身体測定の時にもうけられた特別授業は、やる気の無い生徒が非常に多い。

誰が好きこのんで教育ビデオなんて見るだろうか。

……そうなれば、一分一秒と無駄には出来ない。

和臣が部室にいるときにオペレーション・スクール・ナース・オフィスの開始を宣言したのもあながち早すぎではない。すでに座席取りから始まっているのだ。走りたくなる衝動をこらえてずんずんと廊下を歩いていく。

もうすぐ。もうすぐだ。

「あ、誠一郎」

追い抜いたクラスメイトを置き去りにしようとしたところに声をかけられる。歩みに急ブレーキをかけられ、顔を強ばらせたまま後ろを振り返る。

「そういえば、今日の朝、六條さんに絡まれてたろ？ 全く何したんだよ？」

「な、何もした覚えはないぞ！」

それだけ言って去ろうとする。

「いつも一緒の和臣はどうしたんだ？ いないようだけど」

再度進もうとした足にブレーキを余儀なくされる。

「和臣は……あー、えー、後から来るんじゃないか？ じゃ、俺は先に行くから」

手を挙げて慌てて去ろうとする。

「……？ 何を急いでるんだ？ どうせ次の授業はほとんど寝て終わりみたいなものなのに」

「せ、席がだな」

「席なんか、どこに座ったって同じだろ？ 暗くなれば前も後ろも関係ないさ。それよりも、藍子さんの話、少し聞かせろよ」

誠一郎の肩に手を回してくる。いつもはそれほど親しくしていない生徒なのだが、藍子が近くにいないとばかりに話しかけてくる。藍子は誠一郎至上主義が故に、男女問わず誠一郎へのスキンシップに対し過剰な反応を見せる。クラスメイト達もそれを知っているから、藍子がいるときは誠一郎に対してあまり話しかけたりしないのだ。

今は……その藍子はいない。

「藍子さんとはやっぱり付き合ってるんだろ？ 付き合わないわけ無いよなー、あんなにかわいい……いや、綺麗……ちがうなその両方を併せ持った至高の存在なんだし」

「そ、そうだな……」

肩を組まれて歩いているうちに抜かしたはずの男子生徒に抜き返されてしまう。一人、また一人と誠一郎を追い抜いていく。

すでにクラスの男子の半分は視聴覚室に着いてしまっているだろう。

一番後ろの席を確保するのは絶望的と言えた。それでも可能性はある。その芥子粒のような可能性を拾い上げるために、クラスメイトの腕を乱暴承知で振り払って行く……もはやそれしかない。

誠一郎は覚悟を決めた。

怪しまれるかも知れないが、最初からつまづくのだけは避けたかった。

「すまん！ 間に合わなくなるから先に行くわ！」

「お、おい！」

腕から首を抜き、廊下を疾走する。

「なんだ、あいつ……」

後ろで首をひねるクラスメイトに肩越しで謝って、視聴覚室に飛び込んだ。肩で息をする誠一郎に視聴覚室の男子の視線が注がれる。誠一郎は気にせずに最後部の席を確認する。

(……空いてない……！)

最後部の席はすでに満席。その一列前の席ですら残り一席という状況だった。誠一郎は、何もしないよりはと、最後部から一列前の席に腰を落とした。

(こ……これはさすがに不味いぞ)

冒頭からクライマックスだった。それがいきなりの頓挫。こんな作業員で大丈夫なのだろうか。

誠一郎は自分自身の実行力に肩をがっくりと落とす。

昔プレイしたゲームに、武器が現地調達ばかりの作業員が登場するものがあつた。誠一郎はそのゲームが不得意で、スニークミッションというよりは、敵に次々に見つかってはランボアの如く敵兵を次々となぎ倒してゲームを進めたものだった。ゲームオーバーも数知れず。それでも何とか最後はクリアできた。敵の配置を覚えて、やられては身体で覚えて、繰り返しプレイ。そうしてクリアした。

しかし、今実行しているミッションにはリセットはない。

一回きりのミッションだ。失敗は許されないはずだった。

「よし、席付いてるな。ビデオかけるぞ」

昼休み終了の鐘が鳴る。社会倫理学のビデオを持った教師が現れ、窓を閉め、黒い暗幕をかけていく。……間もなく、ピンポンパンポンと放送が鳴る。

——高木奈緒美先生、お電話が入っております、至急職員室までお越し下さい。繰り返します……高木奈緒美先生、お電話が入っております、至急職員室までお越し下さい。

和臣はきちんと作戦を遂行している。

藍子だってきつとのぞかれるのを分かっている行動しているに違いない。

照明の落とされた視聴覚室の中で、誠一郎は強く下唇をかんだ。

第十七話・「もう一度、勃起したいんだ……！」

化石とかしつつある旧世代のメディアを再生器機に挿入したあと、教師が思い出したようにぽんと手を叩く。頭をボリボリとかきながら話す様は何ともけだるげで、教師というよりは出不精な研究者の風体である。

「あー、そうだ。田中和臣は急な用事で一次的に早退するそうだ。ま、財閥の三男坊ってのも大変だよな」

独り言のようにぶつぶつと言って、教師は教卓に腰掛けた。

おそらく、それは和臣による偽りの情報だ。和臣が周囲から信頼されているからこそ、実行できる嘘だ。嘘は、たくさんの信頼を積み重ねた上で一番効力を発揮する。露見すれば全ての信頼を失う諸刃の剣ではあるが、ここ一番では真っ先に人々の信を取ることが出来る。さすがは和臣と言ったところだった。

「俺は何をやっているんだ……！」

真っ暗になった視聴覚室で拳を握りしめる、最後尾の席を確保できなかった悔しさをもてあます。歯ぎしりし、席に座ったまま身震いする。準備は万端だった。保健室の見取り図は頭の中に入っている。棚の配置から、ベッドの構造、花瓶の配置まで頭にたたき込んだ。なのに初めからつまずいた。単純なことですみずいてしまった。和臣が、藍子が、協力してくれているのに。

「……このまま」

やめれば何のリスクもない。もちろんリターンもない。何事もな

いまま、また普通に戻るだけだ。やろうとしたけどやめた、計画したけどやめた、色々準備したけどやめた、最初でつまずいたからやめた。それでいいじゃないか。また普通に戻るのだから。いつもの三人で馬鹿話をする日常に戻るのだから、途中でやめたって――

「――……いいわけあるかよ」

誠一郎の中で叫ぶ声がある。

「リスクがないなんて嘘っぱちだ。日常に戻るなんて嘘っぱちだ。このままやめたら、俺はあいつ等をつかりさせることになる。勃起部部长としてそんなのは許されない。許されるもんか。それになにより、このままやめたら俺は、ただの童貞野郎だ……！ インポ野郎じゃないか……！ 嫌だ。嫌だね。俺は起ちたいんだ。もう一度、勃起したいんだ……！」

誰よりも心強い仲間、頼もしい仲間……。その信頼を裏切れるわけがない。

信頼は裏切るためにあるのではない、応えるためにあるのだ。

「いつか、あいつ等に俺の最高の勃起を見せてやるんだから……！」

暗幕の中、テレビの画面の光が唯一の光源。けだるそうにビデオを眺める生徒達の青白い顔、顔、顔。その中で異彩を放つ一つの表情。

ひととき生き生きとした顔が照らし出されていた。

それが誠一郎の顔だった。

誠一郎はこっそり背後の座席に座る生徒達の様子をうかがう。誠一郎側の生徒は机に突っ伏して寝息を立て始めていた。誠一郎はチ

ヤンスとばかりに素早く机の下に身体を滑り込ませる。そのまま、一番右の座席であることを利用して座席を抜け出した。あとははいはいを覚え立ての赤ん坊のようにこっそりと動いていく。

背後の座席に座っている生徒を起こさぬよう、視聴覚室を抜け出す。

「よし……やれた。次は……」

保健室に移動しながらポケットをまさぐる。藍子のハンカチに重なるようにして硬質な感触があった。手のひらにすっぽりと収まるそれは、和臣が渡してくれた小型のヘッドセット。片耳専用で、マイク機能も兼ね備えている。

誠一郎が早速耳に突っ込むと、まるで計ったのかのようにヘッドセットから声が飛び出した。

「誠一郎君、僕の声が聞こえますか？」

安心が声から伝わってくるようだった。穏やかで明瞭な和臣の声は、焦りに支配されつつある誠一郎にとって、まさに救いであった。少し視界がにじんだのは言わなければ隠し通せるだろう。

誠一郎は気持ちを落ち着けるようにゆっくりと声を発した。

「……ああ、聞こえる。良く聞こえるよ」

「それは何よりです、ところで誠一郎君」

部室で話しかけてくると同じトーン。

「実は、僕にはヘッドセットをして一度やってみたかったことがあったのです。ちょうど今のよう背もたれ付きの椅子に座ってですね、キーボードをすごい速度でカタカタとやっていて、こう……突然で

すね」

すごい勢いで背後を振り返る音。どうやらキャスター付きの椅子に座っているらしい。摩擦音がイヤホンから聞こえた。

「ダメです！ 制御できません！ ――ってやつです。どうです？ 懂れるでしょう？」

「やばいな、それ。すげえ懂れる。俺もなんかこう……最終防衛ラインが突破されたことを大声で司令官に伝えたいぞ」
「同感です」

いつもの調子が戻ってくる。緊張がほぐれていく。

和臣は俺が緊張しているのを見越して、あえてこんな話を振ってきたのかも知れない。だとすれば、なんて気の利いた友人だろう。

誠一郎は胸が熱くなった。

第十八話・「好きです」

「ところで、誠一郎君に一つお願いが」

胸の熱が冷静に冷やされた頃合いに、再び和臣の声がヘッドセットから響いた。

「先程の冗談は、二度と言わないと誓っていただけますか？」

保健室へと向かう誠一郎の耳に、和臣の柔らかな声が滑り込む。冗談の内容を思い出せないでいる誠一郎の無言を感じ取ったのか、和臣は繰り返す。

「藍子さんが冗談で私を敵と言ったときのことです」

——僕はいつだって藍子さんの味方ですよ！

——……。ならいい。

——じゃ、俺は和臣の味方をしようかな。

——……っ！

——どうか冗談であると言ってください。お願いします。

——……分かった。……冗談だ。

——良くなりました。

部室で今回の作戦会議をしていた一連の風景を思い出す。

「あ、ああ……あの時か」

今回の作戦説明の合間、いつもの閑話休題。別名、横道に逸れたとも言える。ただ、それは本当にいつものことで、和臣が作戦遂行の

途中であえて取り立てるほどの重要性があったとは到底思えない。しかし、和臣はそんな誠一郎の樂觀を踏みとどまらせるように、声のトーンを一段階落とした。

「はい。そして、誠一郎君が冗談でも僕の味方をしようとしたことです」

「その何が悪かったんだ？ たかが冗談だろ？」

「そうですね。たかが冗談です。誠一郎君と私にとっては。しかし、誠一郎君、藍子さんにとっては違うのですよ」

藍子のことを分かっている。

言外の意味を持っているかのように、そう言葉が勝手に誠一郎の脳内で変換される。誠一郎の胸に、線香花火が明滅するときのような、チリリとした焼け付くような音を発生させた。

「藍子は冗談の通じないような奴じゃないぞ」

少し強い声で言い返してしまった自分に嫌気が差してしまい、誠一郎は首を振る。

他の奴ならばまだしも、和臣に限ってそんな回りくどい言い方はしない。和臣はいつだって和臣にとって大切と思うことに笑顔で応えてくれたのだから……。

和臣はそんな誠一郎の逡巡を飛び越えて言葉の橋をかける。

「その通りです。しかし、ある一点……誠一郎君に関しては例外なのです」

二人の一呼吸が、廊下に落ちた。

「誠一郎君は僕のことを好きですか？」

「好きだ」

「……」

まるでマイクを切ったように和臣の声が無くなった。

「ん？ どうした？」

「あ……いえ、なんと言いますか。まさか即答していただけたとは」
「お前は即答してくれないのかよ。俺が、好きだって」

少しすねたような声が出てしまう。誠一郎は自分が格好悪いことをしているなど少し顔が熱くなるのを感じた。

「自分から言い出しておいて、逆の立場になった瞬間この醜態。面目次第ありませんね。改めて言い直す機会をいただけないでしょうか」

「よし、許す。テイクツーな」

「コホン。では……」

しんと静まりかえった耳元と、廊下を急ぐ誠一郎の足音、息切れ。空間と空間、声と声を結ぶ2・4GHz帯には何者も立ち入ることとは出来ない。

「誠一郎君は僕のが好きですか？」

「好きだ」

「和臣は俺のこと好きか？」

「好きです」

言い終わった後に、心地よくも熱い静寂が訪れる。
恥ずかしくて口元が自然とにやけてしまった。

もしかしたら和臣もそうなのかも知れない。いや、きっとそうだ

ろう。

手に取るように友人の姿が目には浮かんでしまうのが楽しくて恥ずかしくて仕方がない。

繋がっている、そんな気がした。

第十九話・「アイツはいつも白と黒だ」

「好きだ。俺達は友達だ」

「はい。僕たちは友達です」

好きを繰り返して分かる確かな気持ち。和臣はやはり応えてくれる。言葉や態度、寄せられた期待。それは勃起部だったり、部員である自分や藍子だったり……。

だから、俺もそんな和臣に応えたい。もらった分ぐらいはきちんと返したい。もらったから返すと聞けば、打算的な友情にも聞こえるかも知れない。

誠一郎は前を向く。

純粹に和臣と台頭でありたいのだ。前を歩くでも、後ろを付いて行くでもない。横に並んで同じ方向を向いて、同じ速度で歩きたいのだ。

友情は、無償で対価なく助け施すもの……無粋なものすら入り込まない美しい言葉に、一聴すれば聞こえる。

しかし、それは違うのではないかと誠一郎には思えた。肩を並べるために、余計な施しは受けない。友の期待に応えたい。友に期待を寄せたい。

そんな互いを支え合う信頼と信頼の結びつきが、友情ではないか。俺達なのではないか。

そんな風に誠一郎には思えてならなかった。

「……。はい、じゃない。ちゃんと好きだと言え」

「むむ、どうしてもですか？」

「どうしてもだ」

「す……す……駄目です、恥ずかしいのでこれ以上は却下させていただきます」

やはり恥ずかしかったようだ。誠一郎は少し嬉しくなる。

「全く……誠一郎君は僕にこんなに好きと言わせてどうしたいんですか？ さすがにもう好意の安売り投げ売りはしたくないですよ」
「どんなに投げ打ったって、安売りしたっていいさ。俺が全部買い占める」

ヘッドセットの奥、和臣のマイクの向こうで息をのむ音。

「……誠一郎君、僕は今、自分が男であることを少し呪わしく思えました」

「ん？ 俺はお前が男で良かったと思ってるぞ」

「そう言うことではないのですが……まあ、いいでしょう」

困ったような苦笑いがマイクを震わせた。

「誠一郎君が僕を好きでいてくれるように、藍子さんも誠一郎君を好きです」

「偏執的だけどな……」

「だからこそ、藍子さんを混乱させたくないのです。先程の冗談のくだりを分かりやすく説明します。藍子さんにとって僕が敵になる。誠一郎君が僕の味方になる。それはすなわち、誠一郎君が藍子さんの敵になってしまうということです。守りたいのに守れない。好きなのに好きになれない……」

落ち着いた声音で早口に説明する。まるで用意された原稿を読むキャスターのように。

「そういう矛盾は、藍子さんのすべてを否定してしまいます。藍子

さんは誠一郎君が全てです。誠一郎君が藍子さんを矛盾に追い込んだりすることは、彼女自身の崩壊を招きます。どんな些細なことでも……いえ、物事というのは得てして些細なところから崩壊というのは始まってゆくのです。難しいのはそれが目に見えないということ」

事実、気が付くことが出来なかった。和臣という周囲に人一倍気を配れる人間がいなかったら、その偶発的に藍子を陥れた矛盾にすら、誠一郎は気が付くことが出来なかったのだ。

「そう……だな。アイツはそう言う奴なんだよな。世の中には白と黒で区別がつけられないグレーな部分もたくさんあるのに、アイツはいつも白と黒だ」

藍子の澄んだ黒い双眸は、母親を盲目的に信じる赤子のようで。見つめられていると自分がまるで神にでもなってしまうような変な気分になってしまいそうになる。

「善と悪。敵、味方。戦争で言うところの正義は、両者に存在します。そんな矛盾や欺瞞だらけの世界で、藍子さんだけは純粹なまでに誠一郎君至上主義なのです。世界をただそれだけの理由で二つに大別できてしまう藍子さんを僕は羨ましくあります。そんな藍子さんの目で世界を見れば、きっと色が付いているのは誠一郎君だけで、その他全ては灰色の世界なんでしょうか」

右と言えば右を向き、左と言えば左を向く。

藍子という人間をこうも簡単に左右できてしまうこと。

だからこそ、誠一郎には強い思いが宿っている。

「……藍子には、いつかそれだけじゃないってことを、俺とお前で

教えてあげられたらいいな」

「誠一郎君、それはひどく遠回りをしているように感じます。誰にでも分かる一番の近道をあえて避けているように思えます。誠一郎君だけが出来る一番の近道を……」

「さて、そこを曲がれば保健室だぞ」

会話はそこで終了となり、誠一郎は緊張の度合いを調整するように、ゴクリとつばを飲込んだ。

第十九話・「アイツはいつも白と黒だ」(後書き)

珍しいこともあるものですね。二日連続で更新です。

第二十話・「……ほら、触ってみろよ」

保健室は校舎の隅にある。

廊下を曲がり、さらに十メートルほど行けば、スライド式の扉がある。ドアの上には、当然の如く保健室と明朝体がかかげられている。平常ならば何の変哲もないその扉も、これから行う冒険の前では、虎児を手に入れるために飛び込む虎穴にしか感じられなかった。

「ついに来ましたね」

声に出さずうなづく誠一郎の姿は和臣には見えない。それでも誠一郎は無意識のうちにうなずいていた。扉を開けようと手を伸ばした誠一郎の頬が強ばる。

「……鍵だ。和臣、指示をくれ」

扉には南京錠ががっちりとかけられていた。構造としては単純なものである。扉の取っ手の上に輪、壁に掛け金があり、スライド式の扉を閉めたときに掛け金を輪に通す。掛け金に輪を通した状態で南京錠を掛けることによって、扉の開閉を不可にさせる……というものだ。

「流石は真面目で通る高木奈緒美先生ですね、少しの時間保健室を離れるだけでも鍵をきちんと閉める。管理者の鏡です。朝遅刻しそうなとき、三割の確率でズボンのチャックを開けたままの誠一郎君とは大違いです」

「本人すら気が付いていなかった驚愕の事実を、今ここでカミングアウトされた……だと!？」

三割という確率を導くには最低三回の過ちを要するわけで……。脳が自動的に算出した結果に、保健室の前でがくりとくずおれる誠一郎。

「あれ、気が付いてなかったのですか？ 僕はてっきり誠一郎君が、僕と藍子さんに気が付いて欲しくてわざとしているのかと思っておりました。そのうち一回は、その……中からワイシャツすらまろび出っていて、誠一郎君が右の足を踏み出せば左に、左の足を踏み出せば右に揺れて……。まるで黒雲立ちこめる中を颯爽と駆け抜けていく白馬のたてがみのように雄々しく凛々しい様子でした」

「やめてっ……！ そんな比喻をされればされるほど俺は惨めになっ……っ！」

「一体どんな挑戦的なご褒美なのかと藍子さんと二人で興奮してしまいました。餌を目の前にぶら下げられた馬の心境がよく分かりました。ぶらぶら……そう、ぶらぶらなのです。まるで……ほら、触ってみろよ、と挑発するように。右に左に誘惑するのです！ 好奇心をいかに刺激してくるのです！ そして、私と藍子さんは……ついに耐えきれずに……始めてしまったのです」

「……一応聞いておこうか」

誠一郎は羞恥心に息も絶え絶えである。

「あれは思い出すだけで大変刺激的なゲームでした。……どちらが早くワイシャツにタッチできるかを競い合ったのです。あれほどの世紀の一戦でありましたから……行き交う生徒達の羨望の的でした」
「心が犯された……っ！ どうしようもなく……胸が……痛いから……」

「それはそうと、南京錠ですが」
「その切り替えの速さに突っ込まなければいけないんだな、俺は！」

思わず小声で怒鳴ってしまおう。

「はやくしないと高木先生が来てしまいますよ？」

「ぐう……なあ、和臣」

「なんですか？」

少しだけ楽しそうな和臣の声に誠一郎は当たりを付けた。

「さっきの仕返しかな？」

「ええ、そうです」

すんなりと認める。

「……悪趣味だぞ」

「僕に何度も恥ずかしい言葉を言わせたのです、おあいこです」
「オーケー、悪かった。仕切り直しにしよう。それでいいかな？」
「悪いですね」

重苦しい声に遮られた。

「……」

「あ！ 違います！ おあいこにはもちろん同意です！」

「……。なら、何が悪いんだよ」

すねるような誠一郎に、沈痛な謝罪が飛び込んでくる。

「……………すみません。どうやら話し込んだつけが、文字通り回ってきてしまったようです」

「だから、何が——」

「もう、嫌になっちゃう。至急の電話というから出てみれば切れて

しまし。勧誘の電話だったのかしら。だとしたら質が悪いわね」

心臓が跳ね上がった。

廊下の先から聞こえてくる足音と独り言。いつもの落ち着いた声が苛立ちにトーンを上げている。足音も比例するようにトーンを跳ね上げていた。上履きの音ではない、ヒールのようなかたのある靴が鳴らす独特の音……ナースサンダルの音だ。

間違いない。保健室の主、高木奈緒美先生その人だ。

それは誠一郎と和臣にとって敵の襲来を告げる音。

敵が本能寺にあるのならば、高木先生の足音はまるで本能寺の変で織田信長を討とうと武士達が境内を駆けつけた音。織田信長が誠一郎であるならば、森蘭丸は和臣で、明智光秀は高木先生ということになるだろうか。

声は迫る。距離はあるが確実に迫る。

聞こえる。高木先生が角を曲がった瞬間に全てが終わる。

見つかったら即ジ・エンドだ。

「誠一郎君……！」

「分かってる……！」

話し込んだのは誰のせいとか、会話に付き合ってしまったのが悪いとか。

そんな追求は消えていた。

些細な責任の所在などどこかへ吹き飛ぶほどの戦慄。

噴き出してくる汗を拭う暇もなく、誠一郎は南京錠に取りかかる。

第二十話・「……ほら、触ってみろよ」(後書き)

吾輩は猫である。サザエでございます。僕ドラえもん。これらは全部英語で言くと、「I'm ○○○」です。本当に日本人で良かったと思います。

第二十一話・「抱き締めたいです」

ただの足音なのに、爆音ではないメトロノームのような規則正しい音なのに、その連続は寸分違わず耳孔に入り込む。

音速は弾丸のように鼓膜を叩き、誠一郎は知らずに顔をしかめる。心臓の加速度が、足音のボリュームに引っ張られ、否応なしに跳ね上がっていく。

まるでライブ会場。熱気さめやらぬ観客がアーティストに求めるアンコール。再登場をせかす手拍子のように、心拍数が早くなっていく。

「誠一郎君！」

南京錠を手にとって何とかならないかと力ずくで試してみる。

もちろん、大きな音を立ててはいけなから、慎重に力を入れる。それでも焦りが生み出す発汗作用で南京錠は誠一郎の手から何度もこぼれ落ちる。

のれんに腕を押そうとも、ぬかに釘を打とうとも、焼け石に水を掛けようとも、一歩たりとも前に進めない。錠が解ける気配はない。

しかし、着実に終わりは迫る。

流れる背景音楽は、巨匠ジョン・ウィリアムズが作曲した映画『ジョーズ』のメインテーマ。異形の怪物が徐々に迫る恐怖が、音楽の大きさで体現される。

見えない恐怖が、終わりが連れてくる絶望が背中を焼いていく。

背後を振り返れば、巨大な魔物が口腔を開けていて。鋭利な歯と歯の間にはぬるりとした唾液が糸を引く。

「……開けよ開けよ開いてくれ……っ！」

「聞いていますか、誠一郎君！」

「焦るな俺、焦るな焦るな……俺っ！」

左耳が足音を過敏に捕らえすぎて、右耳のヘッドセットから聞こえる和臣の声に意識を傾けることが出来ない。

焦るな焦るなと自分に言い聞かせてみても、それは意味を理解してつぶやいているわけではない。

南無阿弥陀仏……と現代の若者が意味も分からずに仏に向かって拝んでいるのと変わらない。

ただ、言っているだけ。

焦っている。分かっている。震えている。分かっている。

開けるしかない。分かっている。丁寧。分かっている。

冷静に。分かっている！ 時間がない。分かっている！

ここで終われない。そんなこと、そんなこと！

「誠一郎君！」

「——分かっている！」

歯を食いしばって声を絞り込んだ。

南京錠が滑り、誠一郎の手からこぼれる。

ドアにぶら下がる南京錠が揺れていた。まるで誠一郎をあざ笑うかのように。諦めろとさとするように。思わず力が抜けそうになる。

張り詰めた最後の糸が切れそうになる。背後を振り向いてしまいたくなる。

恐怖に飲込まれそうになる。

「……もう、駄——」

「できます」

汗が頬を伝う感触。汗をかいていたことを思い出させる静かな声だった。

「出来ます、誠一郎君と僕なら」

「でも、和臣……！」

「出来ます、誠一郎君と僕なら」

繰り返された声は、落胆やあきらめなど微塵もなかった。

ここにはいない和臣の声が染みこんでいく。音は瞬く間に心臓、その動力部とも言える左心室に辿り着き、全身へと動脈を通じて送り出される。血液の一部であるかのように誠一郎と一体になっていく。

「僕は、誠一郎君とだったら何でも出来るんです。あなたとなら不可能はありません。馬鹿みたいにそう思えるんです。だから……！」

和臣の懇願と熱意と友情。三位一体が熱波の打ち付ける砂漠を、涼しげな大平原へ変えてみせた。

和臣の言葉には力が宿る。それが伝わる。流れ込む。言葉が停滞し淀んだ空気を動かす。吹く。言葉の生み出す風が。頼もしい。風が吹く。力強い。向かい風ではない、強烈な追い風。諦めない。

——風は、背後に迫る暗闇を吹き飛ばす。

「……どうすればいい？」

「それでこそ、誠一郎君です」

和臣が微笑んだ気がした。

「いいですか、単純な話です。南京錠を外すものではありません。南京錠の掛け金を外して下さい。事前の調査では立て付けが悪いことが分かっています。本日取れたて情報ですので、修理している暇は

ないでしょう。ですから、取れます」

「……壁に付いている方のやつだな？」

鍵を開けるのではない。鍵を構成する金具を金具ごと外してしま
う。

先程までは焦りがその思考を奪っていた。誠一郎は頬をしたたる
汗を下でぺろりとなめ取る。塩辛い味がした。

足跡は間もなく廊下を曲がる。残り十秒あるかどうか。冷静に。
慎重に。確かに南京錠はびくともしなかったが掛け金自体はネジが
浮いていてぐらぐらしている。爪を隙間に差し込む。

「――取れた！」

「急いで中へ！」

扉を引き、身体を忍者の如く滑り込ませる。

「よし、このまま閉め――」

「まだです！ ポケットにハンカチがありますね、それで南京錠を
拭いてからです！」

速攻で藍子からもらったハンカチを取り出す。音を立てるな。音
を立てるな。

汗のべったりと付いた南京錠を包む、拭く。音を立てるな。音を
立てるな。

拭き終り、慌ててポケットにハンカチをねじ込もうとした刹那。
黒いナースサンダルが視界に現れる。

廊下を曲がった。ラスト、保健室への直線十メートル。

高木先生の視界が直線を映す。

見られたら、終わりだ。

「今です！」

和臣の発声と同時に、白衣がひるがえった。

「閉めて！」

静かに扉が閉まり、俺は侵入に成功する。続けざまに、這うようにして保健室のベッドの下へと急ぐ。確かに扉は閉まった。だがそれは時間稼ぎに過ぎない。保健室までの直線十メートルなど五秒とからないだろう。開けてびっくり玉手箱。そこに侵入者がいたら意味がない。

侵入者は侵入者らしく隠れなければいけない。

「グッジョブです」

「ああ、次だ」

誠一郎は保健室にある二つのベッドのうち、奥のベッドに滑り込む。

「この鍵……やっぱり壊れちゃったわ。さっき慌てて閉めたときに外れちゃったのかしらね……早く直してもらわないと」

困ったわとつぶやいて、高木先生が保健室に入ってきた。

私服の上から白衣を纏ったいつもの姿。団子状に髪の毛が頭の上に纏められているのがトレードマーク。小顔でほんわかした顔に不釣り合いな大きな胸が、私服を押し上げ、さらに上に羽織っている白衣すらも押し上げている。

それはそれとして、高木先生が忙しそうにちょこちょこ動き回り、身体測定の準備を始めた。

「……とりあえずはファーストミッション、コンプリートってころか」

どうやら、高木先生がこちらに気が付く気配はないようだ。

「ええ、一時はどうなることかと」

「全部、和臣のおかげだ」

「いえいえ、僕たち二人のおかげですよ」

「意味が分からないが……でも、何となく分かるニュアンスだ」

「僕は今、この達成ごと無性に誠一郎君を抱き締めたいです」

和臣の安堵の息がマイクにかかり雑音を発声させる。

確かに山は越えたが、安心するには未だ早い。

……だが、和臣の言うこともよく分かった。

「ああ、俺も——」

誠一郎は息を殺して高木先生の動向をうかがおうとして——目を見開いた。

心臓が止まるかと思った。正確には心臓が爆発するかと思った。

……藍子のハンカチが、扉の近くに落ちていた。

第二十二話・「イツツ・ア・ミラクル」

「俺も、どうしたのです？ 誠一郎君？」

一度は乗り越えた危機は、最後の最後で自らのミスという形で次なる危機を連れてきた。誠一郎の位置は、保健室の器械配置から見ると、扉とは正反対にある。将棋の駒でいうのならば、自側の右の香車と、向かって敵側の左の香車の位置。対角線上だ。

幸い、高木先生は気が付いていない。

取りに行けるだろうか……？

誠一郎は自らの失敗を自らの手でなかったことにするべく、試行錯誤する。身体測定の準備に忙しい高木先生は、保険室内をちょこちょこという擬音がふさわしいくらいに右に左に動き回っている。

たまたま誠一郎に背を向けることがあったとして、その間にハンカチを回収してベッドの下に戻れるだろうか……。

無理だ。そんなリスクは背負えない。あまりにも軽率すぎる。

「和臣……」

親友の名前を呼び、ぐっと歯ぎしりする。

「ハンカチを扉付近に落とした。取りに行けそうにない……」

「……仕方がありません。目的のための小さなリスクと思ひましょう。たとえそのハンカチを高木先生に拾われたとして、持主を突き止めるにはヒントがあまりにも少なすぎます。事後策として、本作戦の完全終了後、藍子さんに口裏を合わせるようにしましょう。あのハンカチは藍子さんのものではないと。そして、二人で一緒に藍子さんにごめんなさいをしましょう。藍子さんなら当然のように許してくれますよ」

「……悪い。俺のミスなのに」

腹ばいで隠れたまま、床に額をこすりつける

「運命共同体ですよ。誰一人欠けることは許されません。仲間はずれは許されません。もしされたら……僕は泣きますからね」

「か、和臣が泣くのか……!？」

「心外です。確かに僕はイケメンで完璧ですが、人の子です。母のお腹から生まれてきた赤い血の流れる人間です。れっきとした日本男児ですよ。嬉しいときには笑いますし、悲しいときには泣くのです」

「そうだな。そうだよな……泣くよな、笑うよな、うん」

「だから誠一郎君、この作戦が終わったら、見事に男性自身を天に向かってそり立たせることが出来たなら、一緒に笑いましょう。」

藍子さんも一緒に三人で」

「響きがフラグっぽいが……そうだな、笑うぞ。最高の勃起をしてみせる……!」

股間を勃起させたまま大笑いする構図は、周囲から変人扱いされるかも知れない。

しかし、得てして達成感とはそういうものではないかと思えた。

万人が共有できる達成感なんていうのはまれじゃないか。プロ野球のペナントレースで覇権にしたチームが優勝したわけでもない。ければ、ワールドカップで日本が優勝したわけでもない。

ただ、起たなくなったものを起たせたいだけ。萎えているものを滾らせたいだけだ。

その人自身しか得られない達成感が世の中にはごろごろしている。小学校の帰り道、学校で見つけた石ころを家まで蹴って帰れたら百万円……なんて挑戦をした思い出がよぎる。

達成しても百万円はもらえない。けれど百万円なのだ。途中で石

ころが側溝に落ちても、自分ルールで石ころは何度でも復活する。例えば、あの時の百万円は、適当に作った報酬ではなく、石ころを家まで蹴って帰れたという達成感が、百万円に相当するという無意識の条件付けなのかも知れない。

そういうニツチな達成感。

でも、一つだけ言えるのは、俺の勃起で達成感を味わってくれる仲間が二人もいてくれると言うこと。

ただの勃起じゃない。

俺の勃起はみんなの勃起なのだ。

アルプスに暮らす少女だって応援してくれている。まるで生まれした瞬間の山羊のようによりよろになりながらも、俺の下半身はこの苦難を克服する。雄々しく猛々しく空を仰ぐように起ち上がる。

もうガッチガチだ。バッキバキとも言い換えられるだろう。

それを見た少女は感動のあまりこう叫ぶのだ。

——起った！ クラ……誠一郎が、起った！

感動のフィナーレだ。

そして俺は、みんなの力で勃起した俺というシンボルを使い……皆という最高のおかずを得て……最高の、最高の達成感を得るだろう。

俺は慣れ親しんだ右手をじっと見つめ、さらに開いたり閉じたりしながら、そのときの達成感を想像して打ち震える。

「さあ、時間です。藍子さん達が来たようですよ、廊下が騒がしくなってきました」

「ああ……」

上履きの音がさざ波のように保健室に寄せてくる。

ワクワクとドキドキとソワソワがない交ぜになった女子達の声が扉越しに騒がしい。同時に診察するのは二クラス。藍子を含めた自分たちのクラスと、もう一クラス。男子生徒にどのクラスが測定す

るかなどを教えておいても意味はないから、誠一郎にはもう一つのクラスがどこになったかなど分らない。もしかしたら、和臣は知っているのかも知れないが、遅かれ早かれ知ることになるのだから誠一郎は聞かなかった。

「最終確認しましょう、保健室の間取りや測定位置は頭に入っていますね？」

「もちろんだ。相加相乗平均が忘れてしまうくらいに完璧に暗記した」

「 $(a+b)$ $(a-b)$ $\parallel$ $a-b$ ？ですね。これが終わったらまた暗記した方が良いでしょう。最初は使いどころがなかなか判別しにくいですが、慣れれば簡単ですし、使えば便利ですから」

「……しかし、今は関係ない」

「逃げましたね」

「しかし、今は関係ない」

「……」

「……」

沈黙。

「さて、みんなー、入ってきなさい！ 始めるわよー！」

高木先生の声で静かに禁断の扉が開かれる。

体操服姿の女子達がぞろぞろざわざわと、数人ずつ入ってくる。空氣的にはブルマであれば良かったのかも知れないが、女子達は学校共通の紺色のハーフパンツ姿である。上着は白のジャージという出で立ち。

しかしながらここで注目なのが、ジャージの上は薄手でかつ白のため、柄物、色物の下着が透けて見えてしまうという所。

(……すごいなこれは。……ゴクリ……)

つまり！ 今保健室にいる女子のほとんどのブラがうっすらと透けているという事実だ。

また、白の下着の場合、透けはしないものの、白の下着なら白の下着で、透けないから白……などとブラの判断ができる。それはそれで想像力が刺激されるいいものだ。

このジャージの仕様は男子にとっては両手を挙げての嬉しい誤算と言えた。もちろん、女子達からすればそれは批判的的で、大抵は夏場暑いのを我慢して、女子は全員紺色の長袖ジャージを着てしまう。この学校だけの特殊な校風の誕生である。

それ故に、半袖白ジャージを見られるのは身体測定時のみ。当然、男子がお目にかかることは無い。

つまり、誠一郎にとってこれは、かなりのレアな体験。はぐれメタルに遭遇するだけでなく、仲間にするような奇跡体験。

「……アンビリーバブル。イツツ・ア・ミラクル。エレクトリカル・パレード！（意味不明）」

なぜ身体測定時のみ半袖ジャージの着用を義務づけられているのかは分からないが、誠一郎は心の中でその規則を作った想像上の人物とがっちりと握手を交わしていた。

第二十三話・「びくんびくん」

保健室に広がっているかすかな医療品臭さが、女子の割合が圧倒的に増えたことよって一気に変化する。

軽めのフレグランスを纏っている女子生徒の甘く主張する匂い。あるいは綺麗にとかされた髪の毛から漂う清涼な柑橘系の匂い。あるいはそのどちらでもない、女性だけが元来持つ大人への成長をうかがわせる蠱惑的な匂い……。

その全てが濃密に混ざり合って、保健室を独特の空間へと変貌させる。その独特の空気が隙を作るのか、あるいは男がいないという前提条件がそうさせるのか、無防備でありながら大胆に女子生徒達は色っぽい花を咲かせる。

その空気の袂、誠一郎はもはや息をのむことも忘れ、ただ見る機械になり果てる。

「へー、こんな下着付けてるんだー、やらしー」

誠一郎のクラスの女子が前に立っていた友人のジャージを大胆にもめくり上げる。

「きゃっ、なにすんのよ、このヘンタイ！」

可愛いおへそが露わになり、赤いフロントホックが午後の淡い光の下にさらけ出される。

小振りだが柔らかそうな胸を赤が情熱で彩る。

「いいじゃん、減るもんじゃなし。第一さ、そんな大胆な下着付けてるってことは、見せるつもりあるってことでしょ？ あれ、でもおかしいなー、そんな相手いたっけ？」

「……い、いないけど。……別に何着けようが勝手じゃんさ。赤好きなんだもん」

「ふーん、コケティッシュ！」

「へ？ ……ありがとう」

「デリシヤス・コケティッシュ！」

「意味分かって使ってる？」

赤い下着の女子が、胸を隠すように腕を抱いて、ジト目を向ける。

「……。コケティッシュ！ イエイ！ ぷちよへんざ！」（Put your hands up! と言いたらしい）

「イエイって……。なんかノリでそのまま押し通そうとしてるけど、もしかして雑誌のコメント見て、なんか専門用語みたくて格好良くて早速使ってみたくなった系？」

「マニッシュ！ コケティッシュ！ ポケットティッシュ！」

「はいはい……。それは駅前でバイトの人からもらおうねー」

「む……。なんだー、ノリ悪いなー、もしかして太ったからかあ？」

悪戯な瞳で下からのぞき込む。

「……ッ！ ……いーわよ、私もやるわよ」

凶星を疲れたのか、顔を引きつらせた赤い下着の女子は、挑戦的な顔で好戦的な発言。形も大きさも異なる互いの胸を付き合わせるように対峙した。

「いくわよ……マニッシュ！ コケティッシュ！ エッグバーグデ
イッシュ！ レギュラーバーグデティッシュ！ 四川風マーボバーグ
デティッシュ！」

「ちょ、ちよっとおっ！ それ卑怯だよ！ 超お腹減ってきたし！

今日朝抜いてるからめっちゃめっちゃ腹ぺこなんだよお……っ！」

こうかはばつぐんだ！

「ふーん……、チーズバーグディッシュ、チーズカリーバーグディッシュ、フォンデュ風チーズバーグディイ……ッッシュ！」

「ぎゃああ！ 止めて許して殺さないで！ うう……なんという空きっ腹にチーズの高カロリー三連発……いいもん、今日終わったらドンキー行くもん……ぐすん」

ついには、涙声で敗北宣言。

「あ、私も一緒に行く」

「ねね、アタシもびくドン一緒にいい？」

「その話ウチものったわ」

周りで話を聞いていた女子達が二人、三人と肩を寄せ合うように話に混ざってくる。

うっすらと化粧した女の子は、ジャージを押し上げる豊満な胸を女の子の腕に無意識のうちに押しつけている。そのせいか、下着かつジャージ越しだというのに、むにゅっという擬音が聞こえてきそうなばかりか、影の作り出す陰影によって、たわわに実った果実が大胆に歪むのが見て取れる。

「いいよ、みんなでドンキー行こっ！」

「……っていうかさ、何でこんな話になったんだっけ？」

きっかけになった赤い下着の女子とその友達が頭をひねる。

「ううー……わかんない。ま、それもいいんじゃない？ あー、

早く終わって食べたいなコケティッシュ」

「いや、だからそれ食べ物じゃないから」

「ていうか、びくドンって何？　びくんびくンドクン？」

「なにそれすげえエロイ響き……って、びくドンはびくドンでしょ、びくくりドンキーの略じゃん」

「ええ！？　初めて聞いたんだけど！？」

「あたしもー」

一方で一番胸の大きな女の子に目移りすれば、腕を組んで神妙にうなずいている。

胸の大きな女の子が腕を組む際、大きさからどうしても胸の上で腕を組めず、腕で持ち上げるように腕を組む……いうことを誠一郎は鼻血を出しながら学んだ。

「ちょっと待ってよ、みんな使ってるよね！？」

「使わないよー」

「うんうん、使わんわー」

加えて、美術のデッサンも、林檎とか花瓶とか胸像ではなくて、女の子の胸にすれば、本気で濃淡を詳細に描くのに……ということ。を誠一郎はしみじみと冷静と情熱の間で考えていた。

「誰にも使われない……かわいいそうなびくドン」

「怪獣かよ」

「なんてマイノリティ！　ぎゃおー！」

「それはちゃんと使えるんだ……」

スタイルもボリウムも表情も全てが異なる女の子達のバラエティ豊かな共演に、誠一郎は喉がカラカラになる。

今後彼女たちがどのように身体測定を受けていくのか、それを少

しでも想像するだけで、熱い何かが身体に流れ込んでくる気がした。

第二十四話・「今世紀最高の桃源郷」

熱は体中を駆け巡る。

かの浮世絵師、歌川広重が描いた鳴門海峡の渦潮のようにぐるぐると熱は身体を回り、やがて身体を中心に吸い込まれる。

機能を失った男性自身。男が男であるために固くそそり立たなければいけないモノ。

その硬度を自由自在に変えられる一本の器官へ流れ込む力。

まるで周囲の熱を糧にするように熱はどくんどくと血液を脈打たせ、沸騰させていく。

誠一郎が連想したのは初日の出だった。

男性のシンボルが海の中から、ゆつくりと神々しく、赤黒く染まりながら上っていく。その先端を徐々に天に向かってそそり立たせる……。

行く年来る年、ならぬ、イク勃起フル勃起。

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います。ます。

声が上がる。海岸線で日の出と共に次々とシャッターをきる人々、恋人同士肩を寄せ合い眺める人々、彼らから大きな拍手が巻き起こる。さあ、一年の始まり……朝立ちの始まりだ。

こちらこそ、今年もよろしく願います。優しく扱ってくださいね。

もはや意味不明。思考回路はショート寸前。

保健室は誠一郎にとって興奮のるつぽ。

そして、誠一郎は感じていた。興奮が一点に集中していくような気がする。

「さて、もういいですね。保健室の間取りの話に戻りましょう。敵を知り己を知れば百戦危うからずという故事の通り、自らのおかれ

た環境、情報を知れば……」

見慣れた姿が保健室に入ってくる。

「これから繰り広げられる真のメインディッシュ、今世紀最高の桃源郷も、最高の状態で受け入れられるというものです」

少女は入ってきた瞬間、俺の位置を知っていたのか、すぐさま目があつた。

誰にも分からない表情筋の変化。うっすらと頬を染め、かすかに微笑む。きめ細やかな白い肌と、均整の取れた体つき。相変わらず胸はぺったんこの一言だが、女性としての頭身と曲線のバランスはさすがに群を抜いていた。文句の付け所がない。

誉めるのが悔しいが……圧倒的な美。

……藍子。

国方藍子だけが持つ、少女らしさと女らしさの絶妙なブレンド。

ちらと見れば冷たいと感じられる表情が、大人びた雰囲気。艶やかな口唇が、女らしさを。

触れるのさえためらわれるシルクのような繊細な首筋も、うなじも、その他多くの要素も……。何が少女で何が女か分からなくなる。

光の加減や、天候、季節ですら、藍子をサポートする撮影クルーでしか無くなる。

見る角度で美の造形が多彩に変化する。それが藍子だった。

そして、特筆すべきはジャージのちょうど胸の位置だ。

つんと尖っている二つのぽっち。うっすらと桃色の彩りが……オイ。

露骨すぎるだろう……馬鹿……。

見ていられなくなる。

興奮していた何かが、藍子の出現で少しずつ別の物に変わっていく。

興奮ではない。胸の中でじんわりと染みこんで、ズキンズキンと
うづく何か。言葉にはとても出来そうにない、それを語る語彙力が
ないのが恨めしいが……とにかく何か別の物に変わっていく。

誠一郎は胸の奥を手探りで探そうとするが、伸ばした手のひらは、
虚しく何もない場所をつかみ取った。

やっぱり駄目だ、藍子……。俺はお前じゃ……。

「藍子、まさかアナタと合同だなんて……奇遇ね、最悪」

ためらいのない怨嗟が時を止めた。

誠一郎の思考すら電源ボタンをためらいなく押すように強制停止。
女子生徒達の喧噪も、保健室ごと静寂にたたき込む。

誠一郎の心臓のフロントラインで火線が走る。心臓が爆発し、叫
声が肋骨を叩く。その跳ね上がりたるや、そのまま骨折してしまう
かとさえ思えるほど。

抜けていきかけた興奮が一気に戻ってきて、それどころかかつて
無い興奮を呼び覚まそうとする。

強気の声。

自負の声。

彼女の声。

……六條七海。

第二十四話・「今世紀最高の桃源郷」(後書き)

誕生日おめでとございます、自分！

第二十五話・「これから測定始めます！」

ビーチフラッグのスタートの姿勢のまま、誠一郎は顔を上げることもできず、和臣に問うた。

「し……知ってたのか？　和臣……？　俺のクラスと合同なのが、彼女のクラスだってこと」

誠一郎は見たいのに見ることが出来ない。二律背反が誠一郎を熱くする。

「……真のメインディッシュのことですか？　ええ、知っていました」

床に腹ばいになったまま暴走する心臓を臨界まで放って置くところしかできない。

「今世紀最高、人類史上最高かも知れませんか。僕も……本当は喉から手が出るどころか、内臓物全てが吐き出されて皮が裏返ってしまふほど見たいくらいですよ。ああ、藍子さん。僕は常々考えるのです。願わくはあなたがこの世に二人いてくれれば、僕の淡い苦しみも解消されるのではないかと……！　でも、藍子さんは唯一無二であって欲しい。手の届かないところにいるからこそ、藍子さんは万物の中で頂点に君臨し続けていられるのだと。セーレン・オービエ・キエルケゴールは申しました、不安はそれ自体としては美しいものではない。不安を感じるのと同時に、不安を克服するエネルギーが見られるときに限り、不安は美しいのだ、と。誠一郎君の求めるであろう美しさに沿うために誠一郎君に対して常に美しくあろうとする。自らの追求してきた、積み上げてきた美しさ、そして、

そうして得てきた数々の美……常人には届かない美をこうも持っているのに……その美しさを受け入れてもらえない不安、絶望……。そうです、それはまさに死に至る病と同じ……！ それでも、それを克服し誠一郎君のおかずになるうとする藍子さんの心が身体が、その全てが、不安や落胆や絶望ですら、美しいのです……。ですから、藍子さんが二人いたらなどというみもふたもない僕の空想など……奈落に落ちてしまえばいいのです。藍子さんは唯一無二、どこまでも誠一郎君のために存在しているからこそ、その姿に僕はこうも心を揺さぶられて……ふふ……僕はおかしくなってしまうそうです」

和臣が陶醉するように言葉を続けるが、誠一郎には届いていない。和臣は和臣、誠一郎は誠一郎で熱にうなされている。

「見ろ。見ろ。見ろ。見るんだ、俺……！」

バレていないので遠慮の必要はない。もともと目的が勃起なのだ。手段はそこら中に転がっている。あとは、人生で一番稀有な幸運を目に焼き付け、脳の海馬だかシナプスだか普段サボってばかりの機能をフルに使って記憶として繋ぎ止めるだけ。

顔を上げて、瞳の焦点を合わせるんだ。

そして、見る。見る……見、見、見る、見る、見れ、見よ！ 視姦するぐらい見るんだ！ そうしなければ俺は起てない。

マ行上二段活用を祈るようにつぶやく。

「フツ……少々悪酔いをしてしまったようですね。僕としたことが、いけませんね。藍子さんのことを考えすぎると、どうも平常を保つのが難しくなります。さて、誠一郎君先程のお話ですが……」

勃起。勃起するんだ。起て、起つんだ！ 俺！

そのためにリスクを冒した。勃起できる。

彼女の姿を、薄手のジャージ一枚で下着ですら透けてしまうような、あられもない彼女の姿を見るんだ。目に焼き付けるんだ。今後十年、一人の夜を現役で戦える彼女の姿を。

下着の色は何色だ？ 胸の大きさは？ 首筋は？

髪の毛は？ 唇は？ 鎖骨は？ うなじは？

くびれは？ 二の腕は？ 足首は？ 指先は？

ああもう、何でもいい。彼女のどんな些細な情報ですらも欲しくて欲しくて仕方がなくなる。

……ああ、参った。本当に参った。

どうしようもない、とてつもない変態だぞ、俺。

……今更のことか。

「せ、い、い、ち、ろ、う、く、ん……？」

「ふなあっ！？ あ、ああ……！ ああ、何だった？ 何の話だった？ ああ……配置だな、保健室の！ 頭に入ってるぞ、ばっちりだ！」

ベッドに後頭部をぶつけそうになりながら瞳の動きだけで周囲の状況を確認する。

「机の配置ベッドの配置、花瓶の位置、キャビネットの中身まで完璧に暗記をして――」

その瞳がある一点で止まる。

「……和臣」

「なんです？」

その一点を見つめれば見つめるほど、有頂天になっていた興奮と

共に、誠一郎の声のトーンが落ちていく。

「キャビネットの中の配置が……違う」

「高木先生が触れたのでは？」

誠一郎のトーンにあわせるように、訝しげに和臣が問い返す。

「いや、見ていた限り高木先生は触れていない。医学書とか医療書とか……専門書の類しかない棚だったはずだよな？ 身体測定の際に、本を開いてまでわざわざ確認する項目は——」

「ないですね」

言葉尻を繋ぐ和臣。

ふむ……と、思慮深い声を出して一度マイクの位置を正す。ごそごそという音。誠一郎もいざというときのために耳元のヘッドセットを付け直す。

興奮しっぱなしだったのもあって、顔中汗だくだ。横隔膜を上下させて肺の空気を吐き出す。熱い空気から新鮮な空気へ。酸素を供給して次なる思考に備える。汗ばんだ耳の穴を指で拭き取り、ヘッドセットを耳の奥へ押し込んだ。

「事態は把握しました。誠一郎君の位置からだ……こここの棚ですね」

地図と誠一郎の位置関係を見直しているらしい。配置図の上を指でとんとんと叩く音がする。

「確かに、誠一郎君の仰るとおり、参考書の類しかありませんが……具体的にはどのように違うんです？」

目を細め。

「一冊違う本がある。黒い背表紙のが混じっている……?」

目をこすり。

「う……嘘だろ……? おい……おいおいっ!?!」

そして、目を疑う。

「誠一郎君? どうしました!?!」

「間違いない。間違いない……そうだ、あれは——レンズだ。……カメラがあるんだ。ちょうど黒い背表紙の文字と文字の間に丸い穴が開いていて……巧妙に判別しにくく細工してあって、その中にレンズのようなものがある……!」

「信じてください、誓って僕ではありま——」

「最初から疑ってなんかない! お前を疑うくらいなら俺は自分を疑ってる!」

頭ごなしに質問を両断する。

「すみません。馬鹿な質問を……」

「どうする!?! これじゃ……!」

……藍子。

……六條さん。

「じゃあ、これから測定始めます! 急がず騒がず出席番号順に並んでください。身長、体重の次に胸囲……と順番に測定します。注意点は……測定結果に一喜一憂しないこと! いいですね!」

『はい！』

高木先生の明るい声と、女子生徒達の悲喜こもごもな応答。

不測の事態が起っているのは知るよしもない。

水面下で怒っている凶悪な事件。知るのは同じ犯罪を犯している
誠一郎と、共犯者の和臣だけ。

……始まる。身体測定が。始まってしまう。

緊張が走る。二人の緊迫した空気が、2・4GHzの電波周波数
に乗って行き来する。

第二十六話・「一番に見て欲しいから」

俺が思考の行き先を錯綜させている間にも、事態は徐々に引き返せないポイントへと移行しつつある。高木先生が測定を始めるといふ一言に、生徒達は同意し、身長を測るべく数名が歩を進めている。各クラスにいるクラスの委員長、副委員長が先生の測定を手伝うべく記入用紙と、測定器機の使い方を教示されていた。

時間はない。こくこくと過ぎていく。

考える時間すら残り少ない。阻止限界点は、確実に迫りつつある。……測定が始まるまでだ。測定が始まるまでに何とかしなければいけない。

測定が始まり、体重を量る頃には彼女たちは下着だけになる。そして、最後の測定である胸囲は……ブラジャーを取る。

ホックの位置が前だろうと後ろだろうとなかろうと関係ない。

素材が綿だろうとサテンだろうとナイロンであろうと関係ない。そんな表現すら関係なく、この学園では外されなければいけないのだ。普通の学校ならば身体測定時、特に胸囲の測定では女子はブラジャーを外さずに行うものだ。あるいはカーテンで四方を囲い、測定時のみカーテンの中に入るとか、そういったプライバシーを反映した測定を行う。しかし、前述したとおりこの学園は違う。上半身は包み隠さずに晒されなければいけない。まるで女子の胸囲には詰め物は御法度と言わんばかりに。

のぞく側としては最高の条件と言えるだろう。俺にとってもそれは好都合となり得るのだが、今の状況では素直にそれを……。

そこまで考えて、俺は自分を嘲った。

犯罪者がなぜ犯罪者を嫌悪している？ 加えて、なぜここまで来て誠実さや、正義感を振りかざそうとしている？ もしも、のぞきを素直に楽しめる状況だとしたらどうするのか。もちろん、素直に楽しんでるはずだ。言い訳の余地無くただの変態だ。それ以上で

も、それ以下でもない。

「けど……けどな……！」

何がしたいのか分からない。勃起したいという決意すらも揺らぎ始める。

防ぐ方法がないわけではない。むしろ簡単だ。カメラを取り除くか、カメラの前に遮蔽物を置けばいい。しかしながら、カメラを取り除くにはベッドを出、姿をさらさなければいけないし、カメラの前には残念ながら女子の姿を遮る物は何もない。つまり、俺は移動を許されない。

——最悪が思考を勝手に変更しようとする。

もしも、カメラが最新式の物ならば、女子達の姿はおろか、服の皺から、下着の色だって分かってしまう。高解像度で測定結果ですら読み取れるだろう。体重測定時には上半身も裸になるから、乳房の先端にある隠されざる秘宝すら、惜しみなく記録されてしまうはず。最新式ならデータ化も容易。複製も容易。もしもそれがネットに流れれば……。

ネガティブばかり書き込み出す思考を、俺は慌てて閉じようとする。

——思考の内容は変更されています。変更を保存しますか？ はい／いいえ

いいえに決まってんだろ！

「誠一郎君はとりあえずそのままです。僕が全力で探ります」

混乱する頭に冷静を呼び起こさせる声。

「時間がないんだ、俺にも何か……！」

「誠一郎君には誠一郎君の目的があります。僕はその達成のために

全力で誠一郎君の期待に応えます。それに……藍子さんもいますから。清廉な彼女を汚そうとする輩を僕は許せません。どこまで逃げても追い詰めて制裁を与えます。決して殺さず、殺さずとも生かさず……あまりの苦痛に死を求めるほどの制裁を与えます」

「和臣、何をする気だ……？」

「探します、犯人を。知っていますか？ 地球というのは案外狭いのですよ、僕にとってはね」

「……。……頼む」

「拝承です」

和臣が気合いを入れ直すように、凜々しい声で承諾する。同時に、ヘッドホンから聞こえる忙しい音。まるで某名人が連射パッドの連打世界記録を打ち立てたような音を立ててコンソールが打鍵されている。それを一本の指ではなく十指全てで。まるで引くことの知らないさざ波が浜辺に押し寄せているようだった。

「じゃあ、ウチの組みから始めるね、出席番号順だから……」

「委員長、お願いがある」

藍子が女子達の列から出てきて、無表情のまま委員長の前に立つ。委員長はその美人が形成する無言の迫力に気圧されるように、口の端をヒクヒクとさせている。

「く、国方さん？ どうしたの？」

「私が最初に計る。計りたいの。どうしても」

白魚のような手を、ピンク色に透けるジャージの上着にあてがつて、なぜかベッドの下で俺にちらりと視線を向ける。

あ、藍子！？ 何を言ってる！？

俺は刮目することしかできない。

和臣はお前が盗撮されることを嫌がっているというのに、真っ先に測定されたいだと……！？

今の俺達にとっては血迷っているとしたか思えない発言。

葉山誠一郎の驚愕……をどう受け取ったかは容易に想像できる。

感動しているだけでも妄想したのだろう。しかし、そうじゃない、そうじゃないんだ藍子！

「私の成長。一番に見て欲しいから」

凜とした口調で宣言した。

「は、はは……何を言っているのか分からないけれど、とりあえず誰にとってツツコンでおくわね」

「私つつこまれた」

また俺をちらりと見てくる。頭痛メーターなるものがあつたなら、きっとメーターは振り切れているに違いない。

「こらこら、そういう言い方は止めなさい」

委員長も少し困ったような顔をして、藍子の頭のとっぺんに軽く空手チョップをお見舞いした。

「相変わらず……下品な牝豚。養豚所の匂いがするわ」

その声の意思の強さに胸を締め付けられる。

矛先が自分ではないのに、それでいいのか、と詰問された気がした。

「養豚場の匂いが判別できるのは、七海も豚だから。早く測定を終

わらせて風紀委員室改め豚小屋に帰って」

列の中程からわざと聞こえるように六條さんが挑発すると、間髪入れずに挑発を跳ね返す。肩越しに六條さんを見つめる目は絶対零度。迎え撃つ六條さんの目も煉獄灼熱。保健室の湿気が急激な冷気と熱気に蒸気化し、プレッシャーが風となって女子達の間を吹き荒ぶ……そんな感覚だった。

「あ、あはは……（誰か助けてよ!）」

委員長が板挟みになって泣いていた。

第二十七話・「誠一郎!」

「全くもう、仕方がないわね、国方さんが最初って言うのなら最初にやりましょう」

腕を組んでため息一つ。委員長が仕方なくといった感じで、藍子の意見を受け入れてしまう。

渋々とはいえ、もっと抵抗して欲しかった。出席番号順でも、五十音順でもいい、測定したい者順でもなんでもいい、規則だとか何とか最もらしい理由を付けて藍子を引き留めて欲しかった。一分でも、一秒でも、身体測定が始まるのが遅れてしまえばいい。それが本音だった。学校に犬が紛れ込んだとき、生徒達が犬に気を取られて一時中断になってしまうように。

「……この展開は最悪ですね、僕にとっても誠一郎君にとっても」

苦々しい口調が和臣の苦戦を物語る。

「この微弱なノイズ……やはり、デジタルビデオカメラのようです。最悪なことに録画も開始されています」

言葉を発することがためられる。催促する言葉なんか出せるわけがなかった。和臣は全力を尽くしている。何もせず、自らのおかずのためにベッドの下でのうのうと待つだけの俺とは違う。

「どうやらカメラは無線で制御されているようです。その無線の発信源を特定します。問題はその候補となる数。学園内に小規模のノイズや電波、果ては携帯電話、スマートフォン等も発信源となりますから、それを手当たり次第にピックアップするしかありません。」

それをしらみつぶしにしていき……明らかに電波の発信源として不適当な場所があれば、そこが犯人のいる場所と見て間違いないでしょう。問題は、それがどのくらいあって、何個目でたぐり寄せられるか……！」

状況を伝えながらもキーボードを打鍵する速度に陰りは無い。むしろ加速しているくらいであった。迷いのない速度は和臣の本気をうかがわせるし、それだけ和臣の守ろうとしているものの大きさを思わせた。

「数が出ました！ 数は……」

ベッドの下、悔しさに拳を握る。爪が手のひらに食い込む痛み。痛み。痛み。

大切なのは俺だって同じだ。しかし、何も出来ないでいる。待つしかない自分自身が情けない。

「――八十八カ所……！？ 僕に遍路でもしろというのですか……！ あいにくと靈山寺から大窪寺まで一つ一つ回るつもりはありません！」

……藍子は大切な友達だ。親友と言ってもいい。

和臣と藍子を天秤に掛けろと言われたら、俺は迷い無く自決する。そんな選択肢迫られるくらいなら、そしてその選択肢を選ぶほどの余裕があるのなら、俺は自分で自分の首を絞めてその選択肢なんか無かったことにしてやる。

……そうだ。そうなんだよ。

命と絆があって、俺は当たり前のように絆を選ぶ人間。

命はどんなに無為でもただそこに存在すること出来る。だが、絆はそうじゃない。一人では作り上げることの出来ない強いつながり。

命と命が互いに切磋琢磨して輝き、魂と魂を紡ぎあった者だけが得られる至上の関係。気持ちの良い関係。信じあえる関係。遠慮のない関係。それが絆なんだ。

打算も、画策も、利害もない。純粹な一体感。

俺が好きなの……俺達が好きなの関係。築いてきた関係。

それが俺と、和臣と、藍子なんだ。

和臣が部室で大仰に語った三人で一つの物語を思い出す。

和臣も言っていたじゃないか。たしか共有結合がどうか……。

——互いに放出し合う愛情という電子を互いが共有し、それが三人の心身を深々と強く結びつけるのです！　そうして結合された僕たちはダイヤモンドのように強固に結ばれているのです！　結合は英語で言うところのBond、Bondにはまたこういう意味もあります。

分かってるんだ。和臣も。

——……絆です。

だろ。やっぱり絆なんだ。

「じゃ、身長から。国方さん、靴下を脱いで身長計に背中を向けて立って下さい」

身長を計り終えるまでが阻止限界点。その次が体重測定、上着を脱がなくてはいけない。藍子は下着を着ていないから、そこで終わりだ。

数分なんて猶予はすでない。秒単位で刻んだ方が分かりやすい距離。レースでいうなら最終コーナー。ホームストレート。最大加速で駆け抜けるだけの単純な一直線。どんでん返しの期待できない冷酷な最終局面。

藍子がゆつくりと身長計に脚をのせる。すらりと伸びた背中が美しい。

委員長と身長計に背中を向けた。

「わ、国方さん、髪すごく綺麗……さらさら……（ゴクリ）」

「委員長、顔だらしくなってるよ」

「ええっと！ えっと、えっと……し、身長は」

慌てて測定バーを藍子の頂点に合わせる。

「ちょうど百六十センチ……と」

勃起したい。

勃起部は文字通り俺の自慰行為で始めた部活だ。勃起することが至上命題。そのために部員である和臣と藍子は協力してくれた。だから俺は苦戦しながらも保健室のベッドの下にいるし、このままいれば勃起できるかも知れないという最終段階まで辿り着くことが出来た。やっていることは、ビデオカメラを設置した奴と変わらない。同じだ。

下心から来る恥をかえりみない行為。最低の行為だ。

だったら、毒を食らわば皿までも、ビデオカメラなど知ったことか。最後までのでき続ければいい。そうすればきつと勃起できる……。

身長を測り終えた藍子を見る。目があった。

降りかかっている厄災に気が付いていない。降りかかる火の粉を払うことが出来ない。知らず足下から燃え上がっている。気が付いたときにはすでに火の手から抜け出せない。消火することも出来ない。画像は消せても、燃え上がってしまった欲望や性欲の心までは消せない。あとは複製されたデータが、まるで油に引火する火が如く、ネットという森林に燃え広がるだけ。ここにいる全ての女子達

の心ごと燃やし尽くすまで……。

「もう少し、もう少しです……藍子さん！ 誠一郎君！」

和臣の必死の叫びのなかで、誠一郎は藍子の声を聞いた。作戦開始後、教室で別れたときの声。

——誠一郎はわたしの裸好き？ わたしの身体好き？

愛らしいつぶらな瞳。人を信じることを厭わない瞳。
あの時も、俺は感じた。藍子もきつと感じたはずだ。

……絆。

分かった。分かっていた。

だからこそ、藍子は俺に対して常に無防備で、身には衣を纏っていても、いつも心は裸だった。心が裸だから、服なんてあってもなくても同じ。恐れることなく俺に手を伸ばしてくる。触れようとしてくる。身体ごと触れ合せようとする。すきま無くくつつこうとする。

「お前の裸を見ようとする奴は……俺が奈落の底に落としてやるよ……か」

きっとそれが、藍子なりの絆なんだ。

心を裸にして、両手を広げて、待っていてくれる。望めばそこに藍子がいる。そこにいてくれる。ずっとそこに。いつだってそこに。そばに。

それが藍子の絆。

藍子の台詞が情景ごとフラッシュバック。

——…うん。必ず落として。

映ったのは頬を淡く染めた藍子だった。

「……そうだな」

結論なんか出ていた。

何回、自問自答した？ わかりきっている答えを反芻した？

「大丈夫です、誠一郎君、あと五十カ所ほどです！ 出来ます！
必ずやって見せます！」

馬鹿だ、俺は。どうしようもなく変態で、愚かで、どうしようもない馬鹿だ。

「さ、次は体重ね。藍子さん上着を脱いで下さい」

委員長の指示に、藍子の指が動く。ジャージをまくり上げようと裾をつかむ。

間に合わない。リミットだ。無理だ。

「もう駄目だ、和臣、あきらめよう」

……悪い、和臣。残念ながら、もう手遅れなんだ。手段はない。

「何を言うんですか！？ 出来ます！ 僕と誠一郎君なら！」

和臣の声と、誠一郎のため息と、藍子の姿。

誠一郎の心が固まって、ほどける。

「もう駄目だ」

俺の口があきらめにも似た言葉を紡ぐ。
和臣が驚きに息をのむのが分かった。

そうだ……もう駄目なんだ。

それはあきらめの言葉。

努力を放棄する言葉。

絶望を受け入れる。

確かに似ている。

確かに同じだ。

同じ意味だ。

もう駄目。

駄目だ。

駄目。

「もう駄目だ……！」

——でも、似ているだけ。

声質も、声量も。

込められた意思も。

意思の向かう先も。

全てが全て異なる。

もう一度繰り返す。

……悪い、和臣。残念ながら、もう手遅れなんだ。手段はない。

「……俺には耐えられない……！」

——ある一つをのぞいてな！

「お願いです、やめて下さい！　考え直して下さい！」

俺の意図に気が付いた和臣が静止を叫ぶ。

「それをしては、誠一郎君は……っ！」

お前達さえいてくれれば俺は何もいらない。

この絆のためなら俺は犠牲になったっていい。

……六條さんには嫌われたくなかったけど。

「悪い、和臣」

「誠一郎君っ！」

「やっぱり俺さ——」

「誠一郎君っ！」

「——お前等が好きなんだ」

笑ってみた。

「誠一郎！」

初めて和臣は誠一郎を呼び捨てた。

丁寧な自分をかなぐり捨ててでも止めたかった。

悲痛な叫び。嘆願。

しかし、誠一郎は親友の願いを振り切った。

命より絆。三人の絆。

一番大切なものを守るため。

顔すら隠さず、なりふり構わず。

誠一郎はベッドの下から飛び出していった。

……直後、保健室は阿鼻叫喚の巷と化した。



「……ああ……誠一郎君……。誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君、誠一郎君……僕は……僕は……っ！」

全身が小刻みに震える。

悲愴と怒気に身体が震えが止まらない。親友の名前を何回も何回も連呼し、親友が下した悲壮な決意を思う。がくりと膝を突くと、頭からヘッドセットがずり落ちて転がった。

足下に転がるヘッドセットからは、女子の悲鳴と怒号が聞こえてくる。絹を裂くような悲鳴が、和臣の冷静をずたずたに切り裂いていく。切り裂かれた冷静はぼろくずとなり、憎しみと怒りによって燃えあがった。合理的、理知的な思考は激情によって飲込まれ、すでに海の藻屑と化した。

ぐちゃぐちゃになった。

友の信頼に応えられなかった自分自身。

引き起こされる偏頭痛。乱れる意識。霞む視界……。

数瞬の後、頭を抱えるようにしてくずおれていた和臣の動きが止まる。

パソコンに点滅する光点。六十個目にしてようやく突き止めた電波の発信源。ビデオカメラを操る犯人の位置が示される。

場所は、体育館裏の倉庫。

「……」

前髪のすきまからからのぞくのは、冷酷非道、残虐無比な獣の眼光。

「――許さない。誠一郎君に仇なすものを僕は許さない」

立ち上がり、右手で顔を覆ったまま歩き出す。

「僕は、絶対に」

その姿は幽鬼そのものだった。

第二十八話・「これが僕の贖罪です」

床にヘッドセットを転がしたまま、和臣は誰もいない廊下を歩く。立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花……とは佳人の例えであるが、和臣の歩く姿は通常ならば男性でもそれに当てはまる。歩いている姿を見かける度に学園内の女子生徒は黄色い声を上げるし、風で髪がなびく様を見ては頬を染め、楽しそうに微笑む表情を見つければ行動を止めて注視する。

その和臣の姿が、今は全くの別物になっていた。頭痛に耐えるように常に右手を頭に当て、齒は食いしばられ、息も荒い。笑顔などほど遠く、眉間には鋭い険が走り、頬は鋼のように強ばる。

優雅とは無縁の取り憑かれたような姿であった。

「誠一郎君……待っていて下さいね。僕が今、罰を下しますから」

和臣の耳には、誠一郎の最後の言葉が聞こえる。

——やっぱり俺さ、お前等が好きなんだ。

「僕も好きです、誠一郎君。誠一郎君……」

その直後にヘッドホンから聞こえたのは、誠一郎の周囲で起きた大絶叫。女子達の悲鳴。想像を絶する阿鼻叫喚。当然のことだ。

誠一郎は、男子が禁制されて然るべき身体測定のと真ん中に、自殺同然の態で躍り出たのだから。その後どうなったのかは分からない。分からない……が、誠一郎に下される断罪は、想像するだに筆舌に尽くしがたいものがある。

クラスの女子生徒全員から嫌われるぐらいならばまだいい。

問題は、そこに学園で自治及び規律に対して多大なる権力をもつ風紀委員がいたことだ。

彼ら風紀委員はいわば学園を守る警察。学年を越えて生徒を裁くことの出来る生徒の集団。とびきりの模範生、各分野の優秀生を集めた生粋のエリート集団……いわば、超・生徒の集まりだ。

学園の生徒であれば風紀委員の腕章をした人間を廊下で見かければ、私語を止め、廊下の左右に避けて道をあける。セシル・B・デミル監督の撮った映画『十戒』のクライマックスを見ているような風景。学園のモーセ、それが風紀委員。

……その中でもとびきり恐れられているのが、冷血な一匹狼こと六條七海なのであった。争い沙汰になることも厭わない単独行動、男女の隔てなく規律に違反することを積極的に排除し、冷徹なまでに裁き続ける……。

その彼女が身体測定の現場にいたのだ。

あの騒ぎの中で気が付かれないわけがない。とすれば、誠一郎に課せられる罪は最高に重大なものとなる。

――退学。

学園生活で最も重大な罪だ。

繰り返し繰り返し、まるで悪夢に悩まされるように和臣の頭の中では誠一郎の最後の言葉が再生される。その一つ一つの言葉に和臣は律儀に答える。

好きです。好きです。好きです。

恋人同士が身を寄せ合い、口づけした後に互いの愛を確認する行為に近いものがあった。

和臣が纏うのは漆黒の、どす黒いオーラ。何者も寄せ付けない刺々しい雰囲気。途中、学園を見回っていた教師とすれ違うが、教師は和臣に何も言わなかった。口を開きかけて、和臣の様子が尋常で

はないことに気が付くと、何も言わずに口を閉ざした。そのまま、チラチラとその場で振り返っては和臣を確認していたが、やがてそそくさと廊下を歩き出す。

……そして、和臣は体育館の裏へ辿り着く。

渡り廊下を通り過ぎ、体育館の正面玄関へ。体育館の正面玄関を、校舎から死角になるように曲がると体育館の裏、目的の体育倉庫がある。

そこは、色々な意味で裏側となる場所だった。

「オイ、お前」

角を曲がろうとした瞬間、吐き出された煙に出迎えられた。和臣はそれを無視して、体育倉庫へ行こうとする。

「待てよ」

肩を強烈な力でがしりと捕まれる。

無骨で野蛮な手。特に拳は、擦り傷や切り傷を経験したことが一目で分かるぐらいに斑だった。ちょうど素振りをし過ぎた野球部員の手のひらがまめで破け、破けた部分が治って皮膚が再生し、以前より固くなる……その流れに準拠したような手だった。

和臣はその手をチラリとも見ずに、肩を揺すって振り払うと、ずんずんと先を指す。

「待てって言ってンだろうが！」

昼過ぎの体育館裏には不釣り合いな声。

「おい、どうしたよ」

「……誰か来たのか？」

「おい、他に誰か呼んだのか」

「いや、呼んでない。あれ、コイツ……？」

「確か、二年の田中……和臣だったか？」

「お、知ってるのか？」

「女子がイケメンイケメンうるせーんだよ、んで覚えちゃった」

まるで獲物にたかるハイエナのように、ぞろぞろと和臣を中心に集まってくる。ピアスに煙草、乱れた服装、挑戦的な言葉づかい……不良の模範と言わなければならない。

「六條さん……これだからあなた方風紀委員は無能と言わざるを得ないのですよ……。このような生徒を好き勝手にさせるほど野放しにする……とても協力できたものではありませんね……」

和臣はざっと全員を一瞥したところで、頭痛を抑えていた手を下ろす。

「……これで無粋なのぞき魔は全員ですか？」

和臣を囲んだ六人はその言葉には答えずに、互いに短い視線のやりとりをする。

「何のことだか分からないな」

「俺達はただサボってただけだぜ？」

半笑いで煙草を吹かした。煙草の煙同様、和臣の質問を煙に巻こうとする。

「そうですか、ところで、少し僕とボール遊びしませんか？」

「なんだと？」

意味が分からんとばかりに、互いに顔を合せて和臣の意図を計ろうとする。

「その体育倉庫に入っているボールで、です。僕が準備しましう」

歩いて包囲網を抜けようとする。和臣の歩みの先に、割り込む影。

「もし分かっているなら、冗談はそこまでにしとけよ、田中」

一番図体の大きな男が和臣の前に立ちはだかる。
それが事実上の犯行を認める発言となった。

「――誠一郎君、これが僕の贖罪です」

知らない名前の登場に男が眉をぴくりと上げたその刹那――男の鼻は潰れた。

第二十九話・「いいですよ……すごくいい」

男の鼻骨が和臣の掌底で粉碎される。

骨の折れる感覚が和臣の手のひらに残り、それは肘を伝う衝撃に重なって男の身体を吹き飛ばした。地面に倒れ伏した男の身体を、あっけにとられた様子で見つめる周囲の男達。

しかし、それは数秒の思考で結論に至る。

平熱で保たれていた男達の温度が一気に沸点へと達し、雄叫びにも似た怒号を発する。

やあやあ我こそは、などという自己紹介もなく、互いに戦闘状態に突入する。

弘安四年、弘安の役で武将達がしたそれは現代の世にはナンセンス。身分など一介の人間の喧嘩には関係ない。拳と拳だけで語り合う場に身分の上下など関係ないからだ。

ただ、この喧嘩には拳で語り合うなどという青春じみた景色はない。

復讐と怒りと償いが和臣の行動を駆り立てる。

もしも、弘安の役と、和臣と男達の喧嘩に唯一の接点を見出すとすれば……田中和臣が蒙古襲来のように、男達の根城を襲撃したところくらいであろう。

こうしらんしょう
嚆矢濫觴。

和臣の先制攻撃が戦闘開始の合図となった。初撃で倒れ伏していた男が痛みに身体を起こせば、すでにそこは激しい動きと、苦痛が交互に繰り返される現場となり果てている。

和臣の髪の毛が振り乱れ、その髪の毛をかすめるように拳が通り抜ける。和臣はかすめた拳のすれ違いざまに膝をたたき込むと、くの字に折れ曲がった男の背中に追撃のエルボーをめり込ませる。強烈な威力に、男は口から言葉にならない苦悶を吐き出し、地面に顔をこすりつける。

そこに隙ありと断じたのか、背後から金髪の男が襲いかかってくる。

地面を蹴る男の気配を音で感じ取ると、回し蹴りの要領で敵を見ずに足を払う。目と目が合っていないと戦えないのは、三流の証拠である。

その意味で金髪の男は和臣の敵でなかった。

踏み出した足を簡単に払われる。金髪はうつぶせに転がり、辛酸と地面を同時に舐めた。つぶされた蛙のような悲鳴を上げると、防御も忘れ、焦って身体を起こそうとする。

敵が見ないと不安に陥り、平静でいられないようでは、すでに二流、三流……という判断すら必要がない。ただの素人。

慌てた金髪は片膝を付いて立ち上がろうとする。狙いすましたように、金髪が立ち上がるタイミングで地面を蹴る。金髪の表情が和臣の影で闇に落ちた。地面に付いた片膝を踏み台にして、もう片方の脚で膝蹴りをたたき込む。

膝が狙うは顔面。潰す。

悲鳴はない。上げられなかった。

骨と骨がぶつかる生々しい音が悲鳴を代弁した。

金髪の意識が刈り取られ、意識の失った身体はゴム鞠のように転がり、体育館の裏口の扉に激突。大音量が和臣の耳を叩いた。

一変の容赦のないシャイニング・ウィザード。まばたきすら許されない閃光魔術。

「これで三人……いや二人、ですね」

初撃で倒したはずの男がすでに立ち上がっているのを見、カウン
トから除外する。

体育館裏。戦場。

体育館裏に一陣の風が吹き、和臣の身体が空気を避けるように低い体勢で地面を流れる。

横様から跳び蹴りを放ってきた男を視界に収めると同時に、反対側から向かってくる別の男。二つの攻撃に反応しなければならない。和臣はとっさの判断で、身体を縦にする。跳び蹴りを最小動作で回避すると、もう一方の男の攻撃に備える。

敵の体格は一回り小さい。しかし、攻撃は素早い。

軽いステップの動作から繰り出される右の拳。

鋭い。

風切り音が頬をかすめる。続く左の拳が和臣の腹部を捕らえた。

歯を食いしばる和臣。

反撃とばかりに手を出す、スウェーして避けられると、次の瞬間には立て続けに二発の拳を身体にねじ込まれた。

リズム良くステップする動きを見て、和臣は敵がボクシングをかじっていることを知る。

一撃一撃に必殺の重さはないものの、確実に当ててくる。

「いいですよ……すごくいい」

和臣の頬が狂気につり上がった。

「変態が……！」

前へプレッシャーを掛けてくる小柄な男。首に付けたシルバーのネックレスがステップと共に上下する。小柄な男が和臣の意味不明な笑みに悪態をつく。不安を打ち消すための悪態に、ジャブを加える。和臣は頬とボディにパンチをもらってしまう。

男は半ばサンドバッグ状態になっている和臣に気をよくしたのだろう。さらに一歩踏み込んで和臣の懐に潜り込む。脇を締めた鋭い拳が、地面から和臣の顎めがけて襲いかかった。

決めにかかったアッパー。勢いは十分。

男は顎を逸らして仰向けに倒れる和臣を想像した。

けれど、それは腕に走った衝撃で夢幻と化す。拳が顎に到達する直前、和臣の交差させた両肘が男の二の腕を押さえた。届かない拳を震わせ、露呈してしまった隙の大きさに和臣の顔を見る。

驚愕、絶望。

そう、夢幻は必ず覚める。

しかし、何度でも思い描くことが出来る。

男の視界には和臣の額が大写しになる。

頭突き一閃。間もなくブラックアウト。

男は夢幻の続きを、失った意識の底で見ることになるのだった。ボクシング経験者がやられたことで男達に多少のたじろぎが見られるものの、戦意の喪失はない。初撃で倒された大柄な男も鼻を押さえて起ち上がっていた。シルバーのウォレットチェーンを財布から外すと、それをぐるぐると拳に巻き付けている。

何が一番効果的か、それを知っているような動きだ。

男の顔面に頭突きをたたき込んだ和臣が、不敵に笑う。

「もっと僕を痛めつけてくれませんか？」

「……あアン？」

「僕に痛みがなかったら、それは贖罪にはありませんから」

「ブツ殺してやる」

鼻血を垂らしながら拳にウォレットチェーンを巻き終える。

大柄の男の殺気が極限に達し、前傾姿勢になった。ラグビーで言うところのスクラムを組むような姿勢。正面から受けるには迫力がありすぎる。大柄の男に比べ身長と体重が下回っている和臣にとっては、動きを止められた瞬間に勝敗が決してもおかしくない危険な相手であった。

最も危険な相手と判断し、初撃で地面に沈めたかったのだが……それは失敗。

和臣は男の体重移動に意識を置きながら、周囲の男達にも気を配

る。

多勢に無勢は承知の上。逃げの選択肢はない。やるかやられるか。単純で明解な結果だけでいい。それがきつと贖罪になるから。自分が傷つくことで、贖罪になるなら。

罪には罰を。失敗には報いを。自分自信を含むこの男達にそれ相応の制裁を。

「誠一郎君……それでいいですよね……？」

空を仰ぎ見るように、まるでそこに誠一郎がいるかのようにひとりごちる。

「……おい、うるさいぞ！ 何してる！」

がらりと体育倉庫の開く音がして、そこから茶髪の男がのそりと顔を出す。耳や唇には金色のピアスが複数。制服は着ておらず、完全な私服であった。おそらく……卒業生だろう。

「コージさん！ コイツが急に手を出してきやがッ！」

よそ見をしていた男に、待ったなしの回し蹴りをお見舞いする。後頭部にきれいに入った蹴りが、男を吹き飛ばす。コージと呼ばれた男の足下にひざまずくように倒れ込む。茶髪の男は面倒臭そうにボリボリと頭をかくと、

「クソが……クソクソクソ……！」

倒れ込んでいる男を助け起こそうともせず、舌打ちをしながら和臣にガンを飛ばす。

「せっかくの撮影はクソみたいな男のせいで失敗するわ、こつちじやクソみたいな奴が乱入してくるわ、ツぎけんなよクソが」

クソクソクソと馬鹿の一つ覚えのように繰り返す。

危険な目をした男。

町中でたむろする不良とは少し異なる雰囲気。

暴力の中で生きるような狂気が、その半眼から放たれていた。

第二十九話・「いいですよ……すごくいい」(後書き)

戦闘描写は個人的にはいくらでも書きたいですが、やっぱり読む側
ってきつと退屈なんですよね……。はあ……。

第三十話・「わんわんお」

「で、お前何なの？」

頭をかきながら和臣を見る。

「風紀委員？ クソ六條の犬？ わんわんお？ 俺が今やってるゲームの……あれ、11キルストリークで出てくる犬か？ どーっぐいんかみんぐか？ だとしたら、お前等敵にキルを献上しすぎだ。チームデスマッチだったら戦犯決定」

湿気が多い体育館裏のべったりとした気持ちの悪い雰囲気肌を舐める。和臣を囲む男達とは異質の不気味な感覚。和臣は男の空気をつかむような無気力な発言に口をつぐんだまま。

「あー、ま、ゲームの話はおいといて……クソみたいに邪魔してくれてるのは分かるわ。それによく見ればイケメンだな、お前。俺と同じでさ。クソだけどそこは分かるわ」

ドスの利いた口調を変えてうんうんとうなずく。

「コ、コージさん……？」

驚愕にコージを見上げる仲間。コージは和臣の回し蹴りで地面に倒れている仲間のそばに座り込むと、その肩を叩く。まるで窓際社員をリストラするような。

「お前等もさ、こいつ一人なんだから負けんなよ。な？ だから、クソみたいに頑張れ」

通称うんこ座りの態勢のまま、仲間に説教をする。そのまま胸ポケットからタバコを取り出し、ソフトパッケージを片手で振って、出てきた煙草を口にくわえる。手慣れた仕草だ。

「死ぬ気でやるんだよ。人間死ぬ気になりゃ、ある程度のことは出来る。じゃなかったら、お前等みたいな役立たずのクソは俺が殺してやるよ。……ま、しねーけど。面倒くせーし。ゲームのマルチの仲間減るし。でもよ、考えれば同じだろ？ このイケメンにボコボコにされるのと、俺にされるの違いだけだ。オーバーキルの度合いはだいぶ違うだろうけどな」

コージは自らの胸やポケットなどあちこちに手を当て、自身の身体検査をしている。

煙草を口にくわえて、身体を触診する仕草と言えば、十中八九探しているものは誰にでも想像が付く。

「火、くれ」

説教されていた男が、異質な空間に困惑しながらオイルライターを差し出す。発火石とやすりドラムがこすれる独特の音が数回。両手で作った風よけの中にぼうつと揺らめく灯火。タバコの先端が蛍のように明滅する。

「……サンキュ。ふー」

大きく一息、空に向かって煙を吐き出して、よっこらしよ、という古くさいかけ声と共に起ち上がる。

「にしても、今回はちょっと想定外だったな。クソ六條に痛い目見

てもらう予定だったんだが、国方までいたんだ。うーん、あの身体、胸はまあ……だが、最高に目の保養だったわ。こりゃ、エロゲならCG回収ものだな。できれば、空気読んでクソが乱入してこなければ、差分も回収できて楽だったんだけどな。選択肢でも間違えたか」

吐き出された煙のように、和臣の身体が霞む。

まるでキーワードに反応するように動いていた。前進する力と身体を回転させる力。二つの力を融合させた裏拳がコージの顔面を襲った。

「お、いらついでるのか、イケメン」

コージは煙草の煙を吐き出しながら、攻撃を左手で軽々と受け止めてみせる。手の中のオイルライターはユニットを覆うケース部分がへこんでしまっている。放った力の程度がうかがい知れる。

加えて、それを軽々受け止めたコージの力も。

……そして、ライターの持主は足下でがっかりと肩を落としていた。

「ん……もしかして、お前か？ 乱入者手引きしたの。ここがバレルのは、まあ鼻の利くクソ六條なら仕方がないとして、少し早いんだよな俺の予想より。もうあれっしょ、風紀委員のわんわんおじやないとすれば同じ穴のムジナ？ それでイラついでるのか？ ……んー、どうでもいいか、そんなこと」

力と力の拮抗が和臣の拳を震わせる。

和臣の手を受け止めたまま、右手で煙草の灰を落とし再び加え直す。

「お前等、周り見張ってろ。あと、一応メディアの回収忘れんな」

歯でフィルターを噛んだまま、指示を飛ばす。

周囲で動向をうかがっていた男達は、蜘蛛の子を散らすように体育倉庫や、体育館の曲がり角に走る。指揮系統がしっかりされていると言うことは、コージという人間の実力が身に染みて分かっている証拠だ。

歯の隙間から煙を吐き出し、コージが左手を押し返す。零距离だったコージと和臣の間には七十センチほどの距離が開く。相撲で言うところの仕切りの距離。全ての攻撃が可能な絶好の距離。

「来いよ、イケメン。面倒くせーけど、腹いせにやってやっから。あ、連コインはなしな。時間ねーから」

映画マトリックスでキアヌ・リーブス扮するネオがした挑発行為さながらに、クイクイと指を曲げる。

和臣に返事はなく、拳が代わりに返事を請け負った。

第三十一話・「獅子戦吼！」

和臣の一撃はコージの頬にクリーンヒット。

上体が後方に倒れそうになるが、のけぞったままで踏みとどまる。伸びをした状態で止まった身体を振り子の要領で元に戻すと、ニヤリと笑って和臣の頬に全く同じ角度の拳を見舞う。

鏡を見るような攻撃だった。

頬から突き抜ける痛みが和臣の脳を揺らす。目の前が明滅し、危うく意思が身体から飛びかける。確かに線対称を見るように同じような攻撃ではあったが、拳に込められている威力には大きな差が存在した。体重の乗った強烈な一撃。拳の中に鉛でも詰まっているのではと疑いたくなる硬質な衝撃。

和臣はもらったダメージを如実に反映しようとする身体を気力でねじ伏せる。

背中を付いて倒れることを何とか堪えると、口から細く息を吐き水平に蹴りをたたき込む。放たれた攻撃は風を切り、流れてきた木の葉を巻き込んで、コージの脇腹にたたき込まれた。

体育館裏に鈍い音が響く。

女子ならば耳を押さえてその場にしゃがみ込んでしまうような暴力の音。肉と肉……あるいはその内側の骨と骨が双方を壊し合う音。まるで、硬質なものを膜の内側で叩き壊したかのような。音が膜にぶつかることで、音はくぐもったものに変異する。

先に表情を崩したのはコージではなく、和臣の方だった。コージは脇腹を襲った脚を痛みが伴うのも構わずに甘んじて受け、くわえ煙草のまま、すかさずその脚を抱える。

煙草の先端が煌々と輝くのは空気を吸い込んだから。コージは肺に吸い込んだ酸素とニコチンを力に変えようと、和臣の足を素早く払う。片足を抱えられた状態で残りの一本脚を払われ、和臣は自らのコントロールを失った。

重力に引かれて落ちる身体に、コージの右腕が伸びる。
決め台詞とばかりにコージが咆哮する。

「おらよっ、獅子戦吼！」

和臣のシャツをつかみ、重力に手押しで加速をプラスした。

重力、加えることのコージの膂力。台詞と行為が合致しない攻撃で胴体を激しく地面に叩き付けられ、和臣の口から唾液と空気が飛び出す。肺がつぶされたような痛みに呼吸が困難になり、打ち付けられたはずみで耳なりさえも誘発する。

「からの、マウントポジションーおわっ！」

それでも意識はまだ身体に留まっている。

マウントポジションに移行しようとするコージの背中を何とか蹴ることに成功する。

胸元近くにまたがられたのが幸いした。

抜け出した和臣は頭を左右に振る。髪の毛が乱れる中、軽い脳震盪のせいで敵が二重に見えた。

構わず大地を駆ける。激痛を抱えたままスピードを上げ、後ろ回し蹴り。さすがのコージも直撃を受けては立っていられず、後方に吹き飛ぶ。

くわえていた煙草が宙に舞い、灰と共に地面に転がった。

夏の夜の花火のように、極小の火花が四散する。

コージは一回転して、外に放置されていたハードルを巻き込んで仰向けに倒れた。ハードルに激突するすさまじい音が体育館裏に反響する。

そばに生えていた木から小鳥たちが二羽、三羽と慌ただしく逃げていった。

さえずりを邪魔されて不快だったのか、単に驚いただけなのか。

真意は電線の上へと消える。

すさまじい戦いだっただ。

まばたきすら出来ない。指一本すら動かせない。

周囲で見守る不良達が飲んだ固唾の音。

それは、例えるなら、テレビCMがよく謳い文句にする爽快な
どごしの音に似ていた。

ハードルに埋もれたコージは、ゴホゴホと幾度か咳き込みながら
も、ハードルの山から這い出してくる。目の前に落ちていた煙草に
まだ火があるのを見つけると、即座に拾い上げ口にくわえてみせる。
額からは血が滴り、土埃で私服は薄汚れている。

「痛てえ……マジで痛てえ。クソ。俺の必殺獅子戦吼を受けて倒れ
ないとは……やるなクソが！ ああ、クソ……こうなりや俺の秘奥
義、獅吼爆碎陣を使うしかねーか！？ ああんッ！？」

陸上競技のクラウチングスタートよろしく地面に手を付けた状態
からスタート。

地面を駆ける一步一步が、そのままギアのアップそのものだった。

第三十一話・「獅子戦吼！」（後書き）

地の文だらけ。つまんない。……と言われた気がします（汗

第三十二話・「……負けられないんですよ」

短めのエンジニアリングブーツが、スパイク状の靴底が、まるで掘削機のようにして地面を削り、コージの走り去った後方へ削った地面を跳ね上げる。

「さっきので、俺の必殺技ゲージ溜まってンだよ！」

和臣にはそれが自らに襲いかかってくる猛獣のように思えた。前方から押し寄せてくる強風に、コージから発せられる鬼気に、後ずさりしてしまう。地面と靴の底がこすれる、じやり、という音がなければ、和臣は自分が後ずさりをしたということすら気が付かなかっただろう。

「行くぞオラァ！」

咆哮をとどろかせる猛獣は唇を歪める。

獲物を目の前に舌なめずりをするように。実った果実を刈り取る喜び。満たされるように歓喜する。

情熱の国スペインのバレンシア州ブニョールには、農作物の収穫を祝う祭りがある。トマト祭り。それは収穫を祝って赤々と実ったトマトを投げ合う祭り。人々が狂喜乱舞し、空にトマトを投げる。投げられ、地面に落ち、叩き付けられたトマトからは内包していた瑞々しさが飛び散り、地面は惨憺たる有様になる。

和臣に食らいつつこうとするコージはまさに収穫者であり、和臣はその収穫される対象でしかないようにさえ思えた。地面に落ち、ぐちゃぐちゃに潰れたトマトの液は、さながら血液の赤であり、人間の体内が潰れた時のそれと……。

眉間に力を入れて、ふくらみ続ける悪推量と決別する和臣。身体が発する痛みと、第六感が発する警鐘が、ぎりぎりでもコージ

に対して構えさせる。

回復しつつある脳震盪。コージのばやけた姿に輪郭が戻り始めた矢先。

タバコが舞った。

即座に回避する和臣。それが仇となった。

……スローモーションの世界。コンマのたもとで繰り広げられる駆け引き。

コージは走りながらも、ニコチンを惜しむように、一つ大きく煙草を吸った。赤々と煙草の先端が燃え、フィルターに限りなく近くなる。そのまま走ってくるかと思いきや、コージは口元から煙草を取り、指で弾いた。

コージに先んじて向かってきた煙草と、その赤く燃えた先端部。燃えているということは熱いことを意味する。それは誰にでも分かることだし、至極当然。

……その至極当然が、脊髄反射に近い反応を生むことになる。熱いものは触れば痛い。向かってくるものは、避けるべき。お手本通りの反応。

しかし、和臣は避けるべきではなかった。コージの狙いは、一瞬でも和臣の意識を煙草に向けることだったのだから。クラウチングスタートから最高速に至ったコージが和臣の視界から消える。

煙草は和臣の顔面に向かい、自ずと視界は上向きへ。

コージは和臣の視界をくぐるように、飛び込みつつ前転に似た動き。横回転ではない。縦回転に近い。和臣に背面を見せる格好で回転し、右足のかかとを和臣に振り下ろす。背中から体当たりするように、勢いを全てかかとへ集約。乾坤一擲とも言える一撃が和臣に突き刺さる。浴びせ蹴り……または胴回し回転蹴りと言われるモーションの大きな技である。

普通は当たらない。当たればダメージの大きな技であることは分かるが、とてもではないが当たる要素の薄い技だ。

それを当てたのは、ひとえに和臣の疲弊、タバコという小道具……

…その他小さな要素と要素の組み合わせと、それを繋ぎ合わせるものの出来るコージの強さであった。

肩口にエンジニアブーツの厚いかかどが炸裂する。

ビルの屋上から落とした鉄球がたまたま肩にぶつかった。そんなあり得ない空想に匹敵する衝撃が、和臣の身体を破壊する。

肩の破壊される音が身体を伝播して耳に届く。

肩が外れたか、骨を砕かれたか、あるいは両方か。痛みの津波にのみ込まれるような感覚が和臣の表情を歪める。

灼熱。激痛。灼熱。激痛。

二つの言葉が混在したえもいわれぬ痛み。地面に顔の側面を着けるように倒れ込む。それでもなお完全には倒れない。身体を折るのみで、意識ははまだ痛みと罪の意識と共に身体の中にある。

罪をあがなう痛み。贖罪の痛み。誠一郎に見せる誠意。

まだ…まだ、倒れられない、倒れたくない、倒れるわけにはいかない。

「現実では、倒れたって無敵時間は無いんだぜ」

地面に顔をこすりつけたままの和臣に、声と靴底が落ちてくる。

爆発的な痛みを生む肩を狙ってのストンピング。確実に敵の弱点を狙う効率的な追撃。

それを肌で感じた和臣は、肩を押さえたまま、身体を転がして難を逃れる。

その際、地面に肩をこすりつけることになり、さらに顔を歪めた。噴き出してくる汗。

サウナ発祥の地フィンランドもかくやという熱と汗。

サウナストーンに水を掛けた直後から吹き出してくる蒸気を浴びるような熱と汗。

発汗機能が馬鹿になってしまったのではという熱と汗。

「もちろん、ゲームオーバーからのクイックセーブ&ロードも不可能だ」

コージの頭から流れる血と汗が頬で合流。唇に達したところを舌で舐め取る。仲間からは獲物を前にした舌なめずりに見えただろう。

「だが喜べ、俺の経験値にはなる」

右肩は使用不能。視界も痛みで霞む。汗は吹き出すし、手は震える。ロボットアニメならモニタ全てにレッドアラートが表示されているような絶望的な状況。

それでも。

「……負けられないんですよ、僕は」

そのままタックルを敢行。

「クソが！ まだ動くか……！」

牽制のジャブも、身体ごとなぎ払う蹴りも、当てられる気がしなかった。視界に入る情報さえも自分の思い通りにならない以上、再接近して勝負を決める。逃げ場のないところでガチンコの殴り合い。狙いを定める必要のない零距离での勝負。

その方が、いい。その方が痛めつけられる。傷つけられる。

……敵も自分も。

それが――贖罪だ。

猛進。猛然。猛攻。和臣のタックルがコージの腹部に激突する。

「ぐぬ、ぐあが……！」

それを腹に受けたが倒れず、苦悶の声を上げつつも和臣を受け止めてみせるコージ。そして、蛇のように腕が首に絡みついてきたと思えば、コージが大きなうなり声を上げる。

「……ぬうああああアあああッ！」

瞬間、和臣の視界が捕らえたのは、天地が逆転した稀有な光景だった。

空に大地。大地に空。

足が地を離れ、重力はどこかへ消えた。和臣の首を小脇に抱え、もう一方の手はベルトをつかむ。腕の筋肉が膨れあがり、長身の和臣を力任せに持ち上げる。和臣を頭上に抱え上げる怪力。身体の血が逆流する。重力に血液が引かれ、顔に血が上ってくる。地上からゆうに一メートル以上。

そのまま、和臣の脳天を地面にたたき落とす。垂直落下式ブレーンバスター。

地面が加速する。自分が加速する。

地面が向かってくるのか。自分が向かっていくのか。あるいは……。

直後、和臣の視界が暗転。

何かが身体を這い上がり、そして何かを奪っていった。

痛みはなかった。衝撃だけが頭から入り込み、全身の自由を奪った。自身が機械ならば電源をオフにされたような。

暗闇が身体を飲込んでいく感覚。

暗澹たる深淵。底なしの落下。

落ちていく。

身体も、意識も……。

「ようやく終わったぜ……。……おい、お前等、行くぞ」

和臣には、コージの声はまるで別の次元からの声に聞こえていた。

第三十二話・「……負けられないんですよ」(後書き)

もうちょっとだけ、もうちょっとだけ、戦闘書かせて下さい……
汗

第三十三話・「友達」

外界の音が次第に遠ざかっていく。

ナチス親衛隊の執拗な捜査から、床の下で息を潜めて難を逃れるユダヤ人。物音一つ、息すら出来ない追跡の恐怖。親衛隊の足音が遠ざかっていく。大丈夫。殺されなくて済むという安心感。もう辛い思いを、痛い思いをしなくていい。

そんなユダヤ人狩りとその復讐を描いたクエンティン・タランティーン監督の映画、イングリアス・バスターズのような、追われる恐怖、狂気と緊迫が徐々に遠ざかっていく。

痛みから、現実感から意識が離れていく。

黒。

真っ暗闇。漆黒。

黒を表す数多の表現では言い尽くせない黒。

黒に飲込まれれば飲込まれるほど冷たく身体が凍えていく。身体表面を凍らせ、染みこんできた冷気が身体の内から凍らせていく。暗闇。極寒。絶対零度の極地……。

その中に和臣はいた。

闇に凍らされ、力という力がなくなる。首を曲げ、腕を持ち上げることすら出来ない虚脱感が身体に取り憑いていた。黒い霧が立ちこめてそれが身体の中に吸い込まれ、機能をさせなくする。このまま暗闇と氷河の中で過ごすのだろうか、と和臣は思考の闇に囚われる。一秒にも、一時間にも、一日にも感じる闇の中で……。

和臣があきらめの心境に至りそうになった。

……瞳に何かが映る。

その中に、まるでこっちへおいでよと言わんばかりに、ぼうつと灯る光がある。

夏の夜の電灯に鱗粉をちらして寄り添おうとする蛾のように、和臣は本能的に引き寄せられていった。

光りの膜をくぐると場所が一変。光彩が光を絞り切れずに、和臣は目をつぶる。

目が光になれる頃には、淡い輪郭が確かなものとなっていた。明るい場所にいた。

一人、立っていた。

公園だ。

照りつける太陽と、囲む新緑。

まるでゲームの次ステージで、ローディングに遅れて読み込まれたエフェクトのように、嬉々とした子ども達の笑い声が後から加わり、そして溢れていく。

和臣のそばを少年が駆けていき、和臣は慌てて身体を避けようとする。

少年二人は、どうやら鬼ごっこをしているようだった。

和臣の周囲を回るように、鬼から逃げている。やがて、らちがあかないと分かったのか、和臣の周囲で逃げ回るのを止めてブランコの方に騒がしく駆けていった。鬼の駆けていった先では、ブランコをこぐ子供達もいた。

女の子と男の子。

二人は靴飛ばしをしているようだった。二つ並んだブランコを高く、強くこいでいく。半ズボンと短いスカートが行ったり来たりする。そして、舞い上がった二つの靴は、砂場に築かれた手抜き工事の城を越え、けんけんぱのいびつな円の落書きを越えて、和臣の前に転がった。

男の子の小さな靴が和臣のつま先にぶつかって止まる。

女の子の靴は和臣にぶつからなかったせい、男の子の靴よりも遠くに飛んでいた。

ブランコから男の子の不平の声が聞こえてくる。女の子はニコニコしながら、男の子にくっついていく。勝ったことに喜ぶというよりは、ただ男の子のそばにすることが嬉しいような、そんな笑顔の花だった。とても仲の良さそうな様子。

男の子は和臣に二言三言文句を言うと、靴を拾い上げる。

靴のかかとは、油性ペンで名前が書かれていた。

ひらがなで、はやま。

少し離れたところに転がった女の子の靴にも、同じように。

ひらがなで、くにかた。

「……はやま……くにかた……？」

重要なことに気が付いて顔を上げると、子供二人は手を繋いで公園を出て行くところだった。

「待って下さい！ 誠一郎君！ 藍子さん！」

気が付けば和臣は必死に追いかけていた。

今どこにいるか、いつなのか、夢なのか。

冷静ならば簡単に問いかけられる質問すら投げ捨てて、和臣は二人の子供を追いかける。

あぜ道の上、新緑の中、太陽の下。我を忘れて追いかけて、どこまでも緑の続く道を追いかけて、追いかけて、どこまでも必死に追いかけた。死にものぐるいで。追いつけないはずがないのに、ただ無心でひたすらに。まるで、仲間はずれにしないでよ、と泣き叫ぶ子供のように追いかけた。

子供達の背中が消えたのは、草原の真ん中にあった段ボールで出来た秘密基地。

躊躇なく、和臣は秘密基地に飛び込む。

段ボールで出来た屋根を壊さぬようぐり抜け……ようやく自分の知っている場所に辿り着く。

学園近くの土手だった。

遠くには橋が見え、その上を電車が走っていく。川面にはゆらゆらと夕焼けが浮いていて、夕焼けの上をゴムボールが流れていく。

四つん這いになっていた身体を起こし、和臣は視線の先にいる、あの人物を見つける。

黒髪でひよろつとしていて、少し目つきが悪くて付き合いくそな顔つき、今よりも少し幼い顔立ちに一抹の不満をため込んで、ただじっと夕焼けの写り込む水面を見つめていた。

和臣はゆっくりとその人物に近付いていく。同じだった。光に手を伸ばそうと、触れようと、羽根をばたつかせる蛾と。途方に暮れた暗闇の中、温かい光に引き寄せられていった、あの時と。

土手に微風の波が寄せる。髪が揺れ、真似するように草と草がそよぎ、出来上がったアンサンブルが涼しげな音色を奏でる。

知っている。この風景を。

分かる。この後のやりとりを。

「ようやく来たか」

少年が起ち上がり、ズボンに付いた汚れをぱんぱんと払い落とす。その少年に向かって、和臣は用意していたわけでもなく、考えついたわけでもない、かつて経験したありのままの言葉を口に出した。

「遅くなってすみません、葉山君。それと……国方さん」

少女に言葉を向けると、少女はこくりとうなずくだけだった。

肩に掛かるきめ細やかな黒髪が印象的な美しい少女。大人びた雰囲気と少女らしさという、歳を経て手放さなければならぬものを当たり前のように持っている傾国の美少女。

「あー、俺の言いたいことはな、田中」

目をあさっての方向に逃がしながら唇を尖らせる。

田中という、自身の持つごく一般的な名字。

その言葉が少年の口から出るだけで胸がわずかに痛む。

「まわりくどくなるかも知れないけど、黙って聞いてくれよな。出会ってから、色……色々さ、些細……っていったら怒られるかも知れないけど、取りあえず、なんとなく……っていったらまた失礼になるのか？ いや、ならないか？ あー、もう、そういうことじゃないんだっ！ そういうのが言いたいんじゃない……ああっ！」

いらだちと恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら頭をかきむしる少年。身もだえしている横でたたずむ少女。少女は少年の言葉を補足するわけでもなく、そっと半歩後ろに寄り添って言葉が整理されるのを待つ。驚天動地に慌ただしい少年とは対照的に、無表情。

それに見かねた夕陽が、少女の頬にそっと陽光で薄化粧の赤を施す。ほんのりと頬を染める薄紅はまるで少年を温かく見守っているようで。

少しだけ、ほんの少しだけ、少女が微笑んでいるように見えた。

「はーはー……ぜーぜー……もう、やめだ！ 考えるのはやめだ。手順とか、効率とか、スマートさとか、格好良さだとか、そんなのもうどうだっていい……！ とにかくだ、俺の言いたいことは一つだけだったんだよ。一つだけ。そう！ 最初から一つだけだったんだ」

大きく息を吸って吐き出す。深呼吸。真っ赤な顔を平常に戻そうとしたのだろうが、それは徒労に終わり、結局真っ赤な顔のまま少年は告げた。

「俺とお前は、友達だ」

その言葉を理解した瞬間、胸に小さな火が灯る。

「せ、正確には違うぞ。違うって言っても、間違っているわけではなくて、友達なのはもちろん友達だ！　ただ、その、解釈が違うって言うか、とにかくそうじゃないんだ！　分かったか！？　よし分かったことにするぞ、俺は！？」

自分でも何を言っているか分からなくなって、急に完結に持つていこうとする。脱線したまま駅のホームに突っ込んで停車しようとするように見えた。

「誠一郎。それじゃ、分からない」

くいくいと親指と人差し指で袖をつまむ。

「う……わ、分かった」

少女が脱線した列車を元に戻す。

マスターコントローラーを巧みに操る車掌のよう。きちんとした駅へ辿り着かせる役割で、優しくブレーキをかけてあげる。

土手に流れる清涼な風を肺の空気と入れ替えて、少年は自らの胸にそっと手を置いた。

「――俺はここにいます」

太陽が沈んでいく夕方なのに、少年はますます輝いていく。

「お前が、田中がいて欲しいって思うときに、思った場所に、思ったらすでにいるんだよ。ここにさ」

自分の胸に乗せていた手を拳にして、とんとんと心臓をノックす

る。

気持ちを込めるように。

揺り動かすように。

目覚めさせるように。

「語弊があるかも知れないけど、俺はそういう気持ちでいる。田中と四六時中一緒ってわけじゃないけど、気持ちでそばにいる。忘れなければ必ずそこにあるんだ。思う気持ちが心の中に。暗記科目みたいになきゃいけないんじゃないって、自然とそこに、ずっとそこに居座るんだ。だから、俺は一度友達だと思っただけでずっと田中のそばにいる。むしろ、もうとっくにそうなってる！ それでもって場所とか、時間とか、年齢とか、まだるっこしいもの全部飛び越えて、一生そこにいる。お前の気持ちの中に俺は絶対にいる！ お前が思い続ける限り俺は必ずいるんだ！俺もずっとずっとそこにいる。そこにいたいって思う。むしろ、勝手にいるぐらいのつもりでいる。だから……あー……か、和臣！」

夕陽の赤を越えて少年の……和臣の顔が燃え上がる。

「あ、はい、葉……いえ、誠一郎君」

和臣は名前を呼ぶことに初めて緊張した。

「ここにいるよ、俺は。俺はいるんだ、お前のそばに」

注入完了とばかりに、ひととき強く胸をどんと叩いた。

「はい。……はい……！」

返した肯定が震えていた。

目の前が霞む。胸が熱い。とてつもなく熱い。一生残るだろう強く深いものが、心を温かく縛り付けた気がした。闇により凍らされた身中。熱で氷が溶けて、それが体中に溜まって、熱い奔流となって水を押し上げてくる。

そしてそれはついに、堪えきれなくなって溢れ出した。

「嬉しいです、本当に……本当に……」

泣いていた。嬉しかった。

涙は勝手に涙腺から溢れた。

どうしようもなく感動したとき、人はこんなにも涙することが出来るんだな、と和臣は人ごとのように思った。でも、流しているのは自分自身で、流れ落ちてくる涙で頬が熱い。顎を伝ってくる涙がくすぐったい。

「うおおおおおおおおお！ 和臣いいいいいっ！」

顔を真っ赤にしていた誠一郎が、突然耐えきれなくなったように叫び声を上げた。

「は、はは……」

拭っても拭っても溢れてくる涙を、それでも拭いながら、和臣は笑った。

「友達だああああっ！ お前は俺の友達だああああっ！ 和臣は俺の友達だあああ！ 友達は和臣なんだああああっ！」

「和臣」

小さく玲瓏な声。

「は、はい……？ 国……藍子さん？」
「うん」

表情のない少女、藍子はこくりとうなずくと、何をやっているのと叱るように、誠一郎を迷いのない仕草で指差す。

「二人は友達。だから一緒に」

とんと藍子に背中を押さる。

「一緒に叫ぶの。友達だから」

「は、はい、分かりました」

つんのめるようにして和臣は誠一郎の横に出た。

「和臣のおおおっ、和はっ！ 平和の和あああああっ！ 和臣の臣はあああっ！ 大臣の臣いいいいんんだあああっ！ 俺達は、どうしようもなくっ！ どうにかなっちまうぐらいっ！ 友達なんだああああっ！」

隣では手をメガホン状にして、向こう岸、果ては夕陽に向かって叫ぶ友達の姿がある。

格好悪くなんかない。恥ずかしくなんかない。ためらうことなんかない。

なぜなら、友達だから。

格好悪いわけがない。恥ずかしいわけがない。ためらうわけがない。

なぜなら、一緒だから。

友達と一緒だから。

……でも、声が出ない。なぜか声が出せない。

沈みかける夕陽に身体を向ける。

友達が叫んでいるのに。嬉しそうにしているのに。

一緒にしたい。同じことをしたい。共有したい。大きく、高く。叫びたい。

とこまでも届いてしまえばいい。いや、届いて欲しいのはきつと一人だけ。隣にいる友達にだけ届けばいい。

叫びたい衝動に声が答えてくれない。こんなに突き動かされているのに。

声を出せ。腹の底から。どんな声でもいいから。どんなか細い声でもいい。

口を開けて、ほら。言うんだ。呼ぶんだ。叫ぶんだ。

自分自身に従って、声を出せ。

たった一言だ。難しくない。なにも難しいことなんてない。

たった一言。一秒にも満たないその名前を。

友人の名を。

叫べ、和臣——！

「誠……郎……」

絞り出した小さな声は、体育館の裏。

激痛と絶望の中で目を覚ます。

懐かしい夢。

そう、過去の夢……。

「誠一郎君……」

涙でにじんだ空には午後の青と、

「――俺はここにいる」

あの時と同じ言葉。

そこに、友達がいた。

第三十三話・「友達」
(後書き)

長い、ですか。

地の文、ごめんなさい。

作者は、反省してます。

第三十四話・「愛の告白……！」

「もう駄目だ……！ ……俺には耐えられない……！」

ベッドの下で身体が震えた。怖かった。自分がこの後どうなってしまうのか。どんな侮蔑を受けることになるのか。分かっているはずはなかった。ジェットコースターでこれから一気に滑り落ちるというときに、ベルトと安全バーを外したらどうなるか。それを考えれば誰もが身をすくませる。分かっているからやらないし、やるべきでないと分かっている。

「やっぱり俺さ、お前等が好きなんだ」

笑うしかない。

馬鹿なことをしようとしている。それでも、そのベルトを引きちぎってでも、安全バーをぶち壊してでも、好感度やクラスでの位置関係がジェットコースターの落下速度さながらに降下したとしても、実行しなければいけなかった。

守りたい下着があった。見られたくない裸があった。

同級生の、クラスメイトの、藍子の……六條さんの身体。

誰にも見られたく、見せたくなかった。

自分だつてのぞこうとしたくせに何を偽善的なことを……と罵られる覚悟は出来ている。端っから矛盾したことだから。この思考の道筋すら、道のないところに強引に作った道無き道だ。

他人に見せたくない。自分は見たい。自分だけは見ていいことにしたい。

……恋人にでもなった気分か、この独善者が。

正常な意識が釘を刺す。

ああ、そうさ、独善者さ。特別ではない人間が、特別に懂れて何

が悪いんだ。

だったら……これはどうだろう。

自分だって見なければいい。誰かに見られるよりはずっといい。自分が傷つくだけで、他の誰かが救えるなら、そうするべきじゃないか。

きれいな言葉で取り憑くってもゲスはゲス。

もういい。取りあえずはそういうことなんだ。

脳内会議は全会一致で可決された。

「誠一郎君！」

和臣の制止を振り切って、ベッドから飛び出す誠一郎。

メドゥーサに睨まれた冒険者のように石になっていた身体にひびを入れ、突き破る。

藍子の怪訝な顔が見えた。口パクで、悪いな、と告げ起ち上がる。

背中がベッドにぶつかり、ガタンと大きな音がした。

女子の視線が集中してくる予感があった。

だからどうした。構うものか。

棚に隠されたカメラを、陰湿な野望ごとぶっ壊す。

それが俺だけに与えられたラスト・ミッションだ！

俺が逃げられる、逃げられないは関係ない。俺ごと捕まろうが野望は阻止される。

あとは……諸悪の根源はきつと親友がやってくれるはずだ。あいつは……俺の自慢の友達だから。

歯を食いしばり、全身を使って駆け出す。

男子生徒の制服を見た女子達は、声すら上げられずに動転しているようだった。悲鳴は上がっていないが、人間は良くできた生き物。すぐに封鎖された思考回路を回復させて、何をすべきか身体に命令を下すことができる。神様がくれた最高の指揮系統だ。

誠一郎の手が、叫び声の機先を制するように、棚へと伸びる。

もう少しで届く！ ミッション・コンプリート……！

喉からも手が出かけた矢先、カーテンをレールから引きちぎる音が聞こえ、誠一郎の視界が真っ白にふさがれる。

厚手の布を頭からかぶせられ、横合いから体当たりされたばかりか、引き倒されてしまう。

いち早く気が付いた勇敢な女子が、誠一郎という暴漢に対して反撃を試みたのだろう。

白におおわれ、誠一郎は方向感覚を失ってしまう。

目の残ったわずかな残像だけで、這ってでも柵を目指そうとする。しかし残像は、密閉された蠟燭が酸素を使い切って死に向かっているように、思い出の君が時間の経過と共に顔を思い出せなくなっていくように、形を失っていく。

視界が消える。

失敗する――！？

走る戦慄。

直後に上がる女子達の大絶叫。

これが絹だったらきつと何十反にもなるだろう。そんな絹を裂くような悲鳴達がそこかしこから上がる。

悲鳴が上がったと言うことは事実を認めたということだ。気が動転していたときはわけが違う。対処ができる。どうすべきかの検討ができる。逃げるか、それとも立ち向かうか……。後者なら敗北必至。この人数ではいくら男子といえども袋だたきだ。

終わりの認識が誠一郎を奈落へ突き落とそうと背中の手を伸ばした。

（これで周囲からの視線は防げる。……教えて。何があったの）

視界を塞いだカーテンから透ける、細くも凜とした声。藍子の声。

（柵に、隠しカメラが……！）

（了解。あとはわたしがする。だから逃げて。導くから）

カーテン越し、耳元に唇を寄せる。わずかな可能性にすぎるような小声のやりとり。

（……悪い、俺……）

（だから好き、ふにゃちゃん）

（今更のコードネームかよ！）

カーテンも藍子の声をフィルタリングすることは出来なかったようだ。耳元ですんなりと届く澄んだささやきに誠一郎は顔が熱くなると同時に、藍子にしがみつかれたまま起ち上がる。

（起き上がって。右。真っ直ぐ）

耳元で方向を指示する藍子の言う通りに走りだす。

（左に避けて。また真っ直ぐ。しゃがんで。そのまましゃがみ長押しの後、上キーと一緒に強キック）

（サマソかよ！？）

叫ぶ女子生徒を体当たりで跳ねとばしつつ……少々のいざこざはあったものの、保健室の外に転がり出る。

安全な場所まで走り、しがみつく藍子を屋上への踊り場でカーテンごととはぎ取る。

「何とかなったか……。お前じゃなかったらきつと駄目だったな」

「誠一郎が、わたしに、愛の告白……！」

「それは盛大な勘違いだ。けど、ありがとな、藍子」

誠一郎は時間が惜しいのも我慢して藍子の頭を撫でてやる。
感謝しても足りなかったから、せめて態度で。

「う……っん……」

藍子はまるで首を撫でられた子猫のように気持ちよさそうに目をつぶって感じ入っている。頬はほんのりと赤い。それはまるで無防備にキスをねだっているようで、誠一郎は気恥ずかしくなる。

これで無表情じゃなかったら……などと言ったら贅沢だろうか。
誠一郎は首を振って考えを水滴のように飛ばした。

「じゃ、部室……和臣のどこ行ってくる。あとは頼んだぞ」

「……うん。忘れないで、約束」

「……？ 分かった」

思い当たる小節を探し出せなくて、誠一郎は音を声に出すことが出来なかったが、取りあえず感謝の意味で同意しておく。

「約束……？ なんだった……？」

部室に向かって走り出す。背中では見守る藍子の視線が頼もしかった。

第三十四話・「愛の告白……！」（後書き）

「モ、モニターが死ぬ!？」という某劇場版の台詞を入れたかったのですが、止めました。

第三十五話・「親友がいるので」

屋上への階段を駆け下り、藍子に見送られて部室棟へと向かう。そのままノンストップで、廊下を走り抜け、司令室である部室をノックする。

「……和臣？」

返事がない。

訝しげにノブを握ってみると、くると半回転。鍵もかかっておらず、ドアも押せば簡単に開いてしまった。

「和臣……？」

部室の中央にはA1図面が広げられていて、その上にノートパソコンが置かれていた。和臣がいた形跡はあった。

パソコンをのぞいてみると、学校の鳥瞰図が映し出されており、学校中に×印が示してあった。パソコンにはスクリーンセーバーが設定されているようだが、まだ起動していないことを考えると、その時間は経っていないことが分かる。

ヘッドホンから聞こえてきた和臣の実況通り、ノイズの発信源を探っていたようだ。

単純に見る限り、×印がハズレで、ただ一つ体育館裏に示してある○印が……

「犯人のいる場所ってことか！」

体育館裏に和臣はいる。誠一郎に迷いはなかった。部室をあとにし、体育館裏への一番の近道を考える。そうして視線を向けた廊下

の先に、それはあった。

「これは、ヘッドセット……SENNHEISER……せん、へい……さー？」

——1945年にフリッツ・ゼンハイザー博士によって設立された、かの有名なゼンハイザー製ですよ。何を隠そう、僕はこのブランドのヘッドホンが好きで、最近HD800というフラグシップヘッドホンを……。

楽しそうに話していた和臣の笑顔が言葉を伴って浮かんできた。

「せんへいさー……ゼンハイザー！」

頭上部分にゼンハイザーと大きく書かれ、左側に可動式のマイクが付いているヘッドセットを手取る。

「これで分かった。……今行くからな、和臣！」

ヘッドセットを握りしめて廊下を蹴った。

午後の光を浴びた廊下、リノリウムの光沢を踏みつけるようにして誠一郎は疾駆する。バスケットボール時、ブレーキをかけるときのゴムと床のこすれる高い音を纏いながら、和臣の姿を追い求める。そして、上履きのまま体育館裏に回り込もうとして……急ブレーキ。

「おい、またなんか来たぞ」

「チッ、今度こそ風紀委員か？」

「……そうじゃないみたいだな」

煙草を吸っていた男二人が忌々しそうに舌打ちする。

視線が誠一郎の腕を探したのは、風紀委員はもれなくその身分を示す腕章をしているからだ。権力を示す称号。風紀委員が風紀委員たる唯一無二の証。公僕で言うなら警察手帳のようなもの。手放すことを許されないアイデンティティ。

「オイ、お前、ここは通行止めだ」

踏み出そうとしたつま先に身体を入れてくる。江戸時代に甲州街道や青梅街道を旅してきた人たちが必ず通った大木戸検問所。そこに配備された同心のように、ずいと身体で道をせき止める。

「いいえ、通ります、親友がいるので」

それでも誠一郎は無理矢理に一步を踏み出した。

強引に二人の男の真ん中に身体を入れたせいで、両方の男の肩とぶつかることになった。身体に軽い衝撃が走り、男達の目の色が変わる。胸ぐらをつかみ上げられ、衝突したかのようなぐんとした痛みが首に走る。

「通ります、親友がいるので」

それでも、つかみ上げられたまま誠一郎は同じ言葉を繰り返す。

「通ります！ 親友がいるので！」

まるで殴りつけるように声をぶつける。

男はどすを利かせて脅したものの、逆に誠一郎の真摯な迫力に気圧され、二の句を告げないようだ。

数秒間、何かを逡巡した後、誠一郎の瞳をじっと見つめると、突き飛ばすように胸ぐらを解放する。

「……チツ、勝手にしろよ」

胸ぐらを解放された誠一郎は、胸ぐらを整えると無言で二人のわきを通り抜けていった。

「おい！ そんなことしてみろ、コージさんにどやされ——」

「いーよ、知るか」

「いーよってな……お前」

通称うんこ座りをしながら、煙草に火を付ける。

天に向かって狼煙を上げるように煙を盛大に吐き出す。その灰色のふきだしの中に、男が書き込んだ言葉は、なぜか誠一郎に利かせたどすよりも柔らかい。

「なあ、親友って言葉、口に出せるか？」

「……」

うんこ座りする男の言葉が、ひどく悲しく聞こえて、もう一人の男もついには黙り込んでしまった。

わずらわしいことを解決しようとするのではなく、ただ捨ててきてきたこと。絡みついたものを解こうとするのではなく、切り捨てたこと。向き合おうともせず、ただ蹴りつけたこと。

そんな置き去りにしたがらなくなったの群れが、今更になって語りかけてくるようだった。

男が胸にちくりとした痛みを感じて触れる。

心臓のある場所に実はぽっかりと穴が開いていることに気が付く。そこに本当は大事なものを詰め込んでおかなくてはいけなかったのではないか。今、脅しを振り切って目の前を横切っていた、強い瞳を持った漢のように。

「いいよな、親友。本当……いいよな、親友」

寒くもないのにすすり上げた鼻水。

「寒いな、なんか」

肩にぽんと置かれる手。

「……あとで、缶コーヒーおごってやるよ」

「ホットな」

「あったかくいだよ。なみで伸ばすのがミソだ」

「はっは！ ……あったかくいぜ」

「おお、あったかくいだろ」

「あったかくい」

「あったかくい」

特段面白くもないのになぜか繰り返し、ついには面白くなってしまつて二人で笑つた。

第三十五話・「親友がいるので」(後書き)

ゼンハイザーいいですよ、ゼンハイザー……。フラグシップであるHD800もいいですが、HD650がやはり価格から見てもコストパフォーマンス高いです。HD650は稀代の名機です！

第三十六話・「親友」

「気持ちが届いたってことなのか……？」

侵入を阻むはずの男達がすなりと見逃してくれたことに首をひねりながらも、誠一郎は日本大相撲界の力士、仕切り前の高見盛が如く自らの頬を張って気合いを入れた。痛みが覚悟を再認識させる。燃えさかる炎にさらなる薪をくべる。

「……ぬうああああアあああッ！」

耳に飛び込んできたのは、野獣の雄叫びだった。犬や猫のような威嚇するうなり声ではない。獲物の肉を食いちぎる狼や虎のような人には到底敵わない猛獣のそれ。

背筋が凍る。だが、凍ったそれは恐怖の氷山の一角。大気がびりびりと震えるような錯覚に足がすくみそうになる。誠一郎は手にあるものを握りしめた。親友が置いていったゼンハイザー社製のヘッドセット。ヘッド部を握りしめれば、そこから親友の力が流入してくる気がして、誠一郎は心強くなる。

誠一郎は最後の一步を踏み出した。

「ようやく終わったぜ……」

地面に尻餅をついたまま、空に大きく息を吐き出す男。肺活量に換算すると風船一つはゆうにふくらませそうな大きな深呼吸。整髪料がちがちに固めたように茶髪は膨大な汗で束になり、その色を濃くする。東京マラソンを自己ベストで走りきった後のような様相で、重い体を起こして立ち上がる。

「おい、お前等、行くぞ」

髪をオールバックにするようにかきあげかけたところで、動きが止まる。視線が誠一郎を捕まえた。敵か味方かを探るような訝しげな低い声は、まさに威嚇する猟犬を思わせた。

「……今度は誰だ」

唇についた金色のピアスが言葉と動きを共にする。耳朵を突き抜けたピアスが光を放つ。目に突き刺さる二つの金色の下に、誠一郎は最も見たくない惨状を見つけることになる。

「……和……臣……?」

地面に満身創痍で倒れ伏す親友の姿。血を流し、意識を失い、言葉も聞けず、目も開けていない。誠一郎を認識すらしてくれない。まるで人形のように横たわる姿に、誠一郎は頭がどうにかなってしまいそうだった。

後ろから強くハンマーで打ち付けられたような衝撃。

落雷が体を突き抜けたような痺れ。

その二つの激動が誠一郎の体を突き抜けた。

和臣。和臣。和臣……!

握りしめたヘッドホンがミシミシと音を立て始める。

「誰だって、聞いてるんだけどなー」

茶髪をボリボリとかく。

「……ゆ……だ」

念仏のように何事かをつぶやいて、ずかずかとコージに近付いていく。

十メートル。五メートル。三メートル。そして、一メートルを切る。

手を伸ばせば体のどこにでも触れられる位置で停止。

文字通り目と鼻の先。顔と顔をつきあわせる再接近。

パーソナルスペースに土足で入り込もうとする誠一郎に、コージも次第にいらだちを募らせる。

「何だ？ 聞こえねーぞ」

すくみ上がりそうな声。首元のナイフを思わせる。

「し……うだ」

「あア!？」

瞬間、ヘッドセットを握りつぶす。

「俺は——親友だ!」

壊れたプラスチックが手のひらに突き刺さる。血がにじみ、地面に落ちる。ぽたり。ぽたり。砂利を彩る赤。傷ついた手のひらに痛みはない。そんなものは感覚の外に置き去りにしていた。親友の傷ついた姿を見たときから、誠一郎の中で何かがぷつりと音を立てて切れていた。それは痛覚神経か、あるいは堪忍袋の緒か。

ヘッドホンと自らの血潮を握りしめた拳が、コージを殴り飛ばした。

第三十六話・「親友」（後書き）

更新遅れてすみません。

また二日に一回くらいの更新速度に戻れると思います……多分。並行して、次作のプロットを練ってます。プロットは二つあって、どちらも練り込んでいる最中です。うち一つは90%完了しているので、これが終われば書き始められますが……。さて、どうしたのか。とにかく、今は目の前の作品ですね。頑張ります。

第三十七話・「誠一郎」

奇襲。

完全な不意打ち。渾身の一撃でコージが仰向けに倒れ、拳と頬骨のぶつかった反動で、握りしめていた血潮とヘッドホンのプラスチックが舞い上がる。

「クソ不意打ちとは上等だクソ野郎！ 格ゲーで言うところのヒア・カムズ・ア・ニューチャレンジャーってどこか！」

口内を切ったのだろう、つばと一緒に血を吐き出す。血に飢えた野獣の目が誠一郎をロックオン。まるで誠一郎の攻撃がなかったかのようにゆらりと立ち上がると、熱風を纏って飛び込んでくる。

和臣とは違い、誠一郎に格闘の素養はない。ただの凡庸な一平民に過ぎない。反撃の術など持ち合わせていない。

「だからどうした……」

恐怖をにらみ付ける。襲いかかってくるコージの鬼のような形相が、その姿が、炎のように揺らめく。誠一郎は胸に跳び蹴りを受けて地面を転がる。二転、三転。体育倉庫の壁に激しく背中を打つ。体育倉庫の壁がなかったら、地面に倒れたまま起き上がれなかったかも知れなかった。体育倉庫の壁に手を突いて敵を睨む。

誠一郎は痛みに顔を歪めながらも、コージをにらみ付けるのを止めない。

恐怖に白旗を揚げることはしない。

意地だった。プライドだった。

誠一郎は食らいつくように再びコージに拳を打ち込む。連戦であるコージもそれを受けざるを得なかった。

どちらも避けることはしなかった。

殴っては殴られ。殴られては殴る。殴り返されればさらに殴り返し、蹴りを受けても殴り返した。

ヘッドホンと自らの血液を握りしめた右の拳で。

親友を呼ぶ、叫びと共に。

「親友なんだあああああっ！」

ケーブルがちぎれ、マイクが壊れ落ち、イヤードに血が染みこむ。

和臣のヘッドホンに染みこむ、誠一郎の血。

二つが一つになる。

その右の拳は燃えるように熱い。激痛。灼熱。それらを火炎のように拳に纏わせて、誠一郎は目の前の男と殴り合う。

「俺達は……っ！」

もはやその拳は誠一郎だけの拳ではなかった。

二人の拳。何よりも強固で、堅牢で、屈強な拳。

絆という鎖を纏った拳。

相手が倒れるまで、倒れない。そして、倒れるなら前のめりだ。

絶対に後ろへは倒れない。最後まで立ち向かい続ける。後ろへ倒れることは引き下がること。最後まで立ち向かって。最後でも立ち向かって。立ち向かって。立ち向かって。立ち向かう。

「うおおおおおおおおおっ！ かずおみいいいいいっ！」

親友の名を叫び右腕を振り抜く。顔面で受けたコージは伸び上がるが、振り子のように態勢を戻すと、顔面の筋肉全てで笑ってみせ

る。狂気とも言える形相。鬼のような形相。

牙をむき出すコージ。誠一郎は臆さない。

鬼と互いの襟首をつかみ合う。額をこすり合わせる。裂帛する視線の火花。

「クソがああああっ……！」

「親友がなんだ……っ！」

互いに雄叫びを上げる。立つ瀬は同じ。崖っぷち。一步でも下がったら奈落の底。

そして、ぎらぎらさせた視線と視線をぶつけ合うと、互いの額をぶつけ合った。コンクリートに落下したような痛み。明滅する光の芥子粒。飛び散る流星。額が裂け、血が鼻筋を流れ伝う。

「親友なんだっ！俺達は親友なんだだああああっ！」

握りつぶした血潮が飛散し、拳を振り抜く。

ヘッドセットのハウジング部が耐えきれずに空を舞う。

「……ッるせえんだよクソがあああっ！」

倒れない。

がっしりと捕まれた襟元を強引に引き寄せ、コージが頭突きを返してくる。脳が頭蓋骨の内壁にぶつかって、意識が悲鳴を上げる。色が遠のく。足が震える。かかとう宙を踏む。断崖を越えそうになる。

落ちる。終わる。

視界が物語の終わりのブラックアウトを見せようとする。

「俺達は親友なんだ……！」

まだだ。まだ早い。終わりじゃない。

親友という言葉を口にする度、誠一郎は拳に力が戻ってくる気がした。さらなる力がこもった気がした。何者にも負けない力を得られるような気がした。空でも飛べる。星に手が届く。

そんな気がした。

「親友だから。だから俺は！俺はあああっ！」

スタッフロールは、親友の笑顔を見てからだ。

「だから俺は！お前を傷つけるやつが誰であろうと——！」

まるで互いの尾を食らう蛇。痛みの連鎖。そのメビウスの輪のようにはぐるぐると回り続ける反撃と反撃を切り裂く声。

拳の嵐。襟をつかんでいたコージが驚愕に目を見開く。

切れた額の血が目流れ、血涙となる。

コージの真っ赤な視界に映ったのは、一つの大きな拳。否、二つの拳。

「——神であろうと、世界であろうと、俺はそいつをぶん殴る！」

誠一郎と和臣の拳だった。

「……………があッ！」

誠一郎の襟首つかんでいたコージの手が離れる。体が仰向けにどさりと倒れ、砂埃が一陣の風に紛れた。大の字になって地面に倒れたコージの姿に、周囲の仲間達は啞然としていた。近寄ってくる気配はない。

誠一郎はふらふらと体をゆらしながら空を仰ぐ。

体中にみなぎっていた不思議な力が抜けていく。地面に落ちるヘッドセット。壊れている。使い物にならない。

仰いだ空は、突き抜けるような青だった。

蒼穹は知らん顔でそこにある。最後まで背中を支えてくれた懐かしい感慨を、誠一郎は青いキャンバスに思い描く。

涙が出そうになった。

ようやく和臣と友達になった……正確にはすでに友達だったが、正式に互いに友達と認め合ったあの懐かしい過去の川縁が、涙腺をつんつんと刺激してくる。

胸のダムが決壊しかける。ぎゅっと握りしめられ、熱いものが絞り出されそうになる。

心はきつと水の染みこんだスポンジに違いない。ぎゅっと握りつぶせば止めどなく水分が溢れ出てくるのだ。止めどなく、決壊したダムのようにすごい勢いで。

「誠一……郎……」

体育館の裏に響くかすれた声。絞り出すような小さな声。親友の声だった。

「誠一郎君……」

赤い瞳に水分の膜を張りながら、親友はそっと親友の名前を呼んだ。

スポンジをぎゅっと握りしめられた気がした。

にじむ空。心からたくさん溢れてくる想い、記憶。

「――俺はここにいる」

親友はそう応えた。
あの時と何一つ変わらない言葉で。

第三十七話・「誠一郎」(後書き)

キンキンに冷えてやがる……っ！ 言いたかったただけです。ごめんなさい。

第三十八話・「負ける気がしない！」

「誠一郎君が……います」

「ああ、俺はここにいますぞ」

誠一郎も和臣も、目同様に真っ赤に腫れ上がった顔。顔の筋肉を動かすだけでも激痛が走るのに、二人は笑みが勝手にこぼれてしまふ。

今、ここにいるということ。

今、そこにいてくれるということ。

誠一郎に至っては、和臣が目覚ましてくれたことに嬉しさを隠しきれない。不自然に笑みを我慢しようとするから口の端が引きつってしまっている。

夢でつぶやいた言葉と、現実でつぶやいた言葉。

夢で答えてくれた言葉と、現実で答えてくれた言葉。

偶然のような必然の一致に、和臣は運命を感じざるを得なかった。

「誠一郎君なんですな」

「間違いない。俺だ」

「ええ……。ええ、そうですね……」

感激に声が震えていた。

「大丈夫か？」

誠一郎は、周囲の男達などには目もくれず、和臣の横に腰掛ける。まるで付き合い始めて間もないバカッパルのように、二人だけの空間で声を交わす。

「……ええ、大丈夫です」

体を曲げて何とか上体だけを起こした和臣に、誠一郎は疑いの目を向ける。

「……。とてもそんな風には見えないんだが」

「誠一郎君が来る前までは大丈夫ではありませんでした。誠一郎君が来たからには大丈夫です」

「ずいぶん他力本願なヒーローもいたもんだな」

投げたら投げ返す。ただそれだけの会話。休み時間にテストの答え合わせをするような気軽さ。すれ違う友人とおはようと朝の挨拶をする気軽さ。たわいもない会話だった。

「そうですね、僕にとって誠一郎君はヒーローですから。そのヒーローが来てくれたんです、こんなに嬉しいことはありませんよ」

「む、まあ、俺だってお前はヒーローだって思ってるぞ」

首筋をポリポリとかく。

「ふふ、でしたらヒーローが複数……戦隊と言うことになるのでしょうか」

「よし、早速だが俺はブラック」

「誠一郎君はレッドです。異論は認めません。いつも真ん中で号令をかけて下さい、整列も真ん中、ロボット搭乗時も真ん中、レッドですから。武器は当然オーソドックスながら憧れの主人公の証、ソードです。だってレッドですからね。とにかく人一倍悩んで下さい、あなたの結論が戦隊の命運を握ります。レッドですから」

「お、同じヒーローの中でも平等不平等を感じる、世知辛い戦隊だな……。あれだろ、みんなでジャンプして画面が空に揺れたら、次

の瞬間、採掘現場なんだろう？」

「はい。そして怪人による攻撃、その爆発はヒーローに危害が及ばないように少し離れた左右前方からです。もちろん、火薬の量も調節済みです」

「怪人もなかなか気遣いが大変だ」

苦笑いをこぼす。頬の筋肉が痛みを訴えたが、会話が鎮痛剤になった。

「男性は色選択に幅がありますが、その点では、藍子さんは安定のピンクですね」

「女の子はピンク……ジェンダーフリーの世にあって真っ向から対立してしまうな」

「そしてこの僕は、暗い過去を持つ皮肉屋ブラックと」

「ずるい！俺がやりたかったのに！暗い過去とか格好良い！黄昏れながら髪の毛風にゆらしてみたい！でもって、仲間に心配されたところを冷たくあしらってみたかったのに！そして、いざとなったらクールにレッドのピンチを救ってキッズに大人気！ブラック、いいよ、ブラック……」

膝を叩いて悔しさを訴えたり、笑いながら空を仰いだりする。ああでもない、こうでもない、と、妄想と空想のサンドイッチに二人で体を挟み込む。

部室でのやりとり似た、心休まる空間。居心地の良い雰囲気。時の経過を加速させる楽しさ。

「サッカー親善試合、日本対ブラジル。サッカーの記者会見にてインタビューアーがブラジルの選手に聞いたそうです。日本で最も注目すべき選手は誰ですか？ブラジルの選手はこう答えたそうです。……そうだな、イチローだな」

「それはブラック、ジョーク！」

「1993年、ソマリア。米軍を中心とする多国籍軍とゲリラとの市街戦を描いた、後に『モガディシユの戦闘』と呼ばれ――RPG！」

「ブラックホークダウン！ ブラックホークダウン！」

「会議での発言権がなく、残業してももちろん残業代は出ません」

「そんなブラック企業、もう辞めちまえ！」

「……」

「……」

不意に生まれた空白にどちらともなく笑いがこぼれた。

なぜ物語の主人公とその友人達が急に笑い出すのか、誠一郎は分かった気がした。

恋人同士が言葉なく見つめ合えるのか分かった気がした。

居心地の確認。生まれた感覚の共有。そこにいてくれるだけで楽しい。だから、鉛筆が転がっただけでも楽しいし、早口言葉をとちっただけでも大爆笑。もう、なんでもいい。

誠一郎と和臣は笑う。

「ふ……ふふふ」

「ははっ……あー、充電完了だ」

「僕もです、誠一郎君成分補給完了です」

先に立ち上がった誠一郎が、和臣に手を差し伸べる。

和臣は肩をやられているので、利き腕とは逆の腕で誠一郎の手を取る。

体重を支え、体を支え、心を支える。

「やるか」

誠一郎が拳を差し出す。

「はい」

和臣の拳が遅れて差し出される。

「和臣と一緒になら」

「誠一郎君と一緒になら」

二人で拳を軽く触れ合わせる。

「負ける気がしません！」

「負ける気がしない！」

コージとの死闘は、誠一郎と和臣の体をボロボロにした。立っているだけでも体は休養を要求してくる程に。二人とも限界だ。人数でも、残り体力でも、負けている。客観的に見れば絶望の淵に片足を滑らせているような状況。

けれど、誠一郎には感じられた。信じられた。赤子が母の言うことを盲信するように、ただただ純粹無垢に信じることが出来た。親友と一緒になら、何回でも何十回でも何百回でも何千回でも、倒された数だけ立ち上がれる……と。

周囲をじりじりと囲み始めていた男達と真っ向から対立する。

「このくたばり損ないが……！」

満身創痍の二人に良いように言われておとなしく引き下がる男達ではなかった。

小さなプライドを極大の怒りに変えて突撃してくる。

怒号に囲まれる。暴力に阻まれる。

激昂して荒々しい言葉を口々に吐き出し、四方八方から襲いかかってくる。

「――そこまでよ」

切られた火ぶたの火を消したのは、天をつんざくような冷然とした声だった。

第三十九話・「糞をたれるのは尻の穴だけにして欲しいわね」

後ろに纏められた栗色の髪が、風に揺れて光をもてあそぶ。

腕を組む美女は、その場に存在する者全てを見下すような圧倒的な存在感を誇っていた。目に宿る氷の刃は、見下す者全ての喉元に突きつけられ、身動きを封じている。

誠一郎も、和臣も、取り囲む男達も指一本動かさない。まるで五感を制御下に置かれたマリオネットのようだ。右腕には風紀委員と書かれた腕章。シックなはずの腕章なのに、その腕に書かれた文字の意味を理解すれば、大仰なまでに威光を放つ。

女は全員をゆっくりと一瞥して、胸に手を置いた。

「六條七海、風紀委員よ。そのゴミ虫共、今すぐ学園の風紀を乱す愚かな行為を停止しなさい。さもなくば、風紀委員の権限で実力行使に出るわ」

男達は齒ぎしりをするので精一杯であった。

六條の放つ雰囲気は、ただの美女のそれではない。すれ違った美女に目を奪われて振り返ったり、色香にくらりときて凝視するなどというものではない。薔薇に数多くの棘があるように、彼女には凄絶な刃があった。

「よし、クソ六條、久しぶりだな。あー……イテテ……俺のクソ弟は元気か？」

声は誠一郎と和臣のすぐ背後だった。

驚いて二人が振り返れば、コージが畑作業の老人のように腰をとんとんと叩きながら、軽々しく右手を挙げていた。

壮絶な死闘を繰り広げて間もないというのに何という回復力だろ

うか。

誠一郎も和臣もとっさにコージを中心にして飛び退り、各所の動向に気を配る。

六條、コージ、周囲の男達。四面楚歌を実感していた。

「クソが。お前等とは、もうやんねーよ、安心しろ」

人払いでもするように手のひらを振ってアピールする。

「あなたの弟は立派に風紀の意地に務めているわ。墮落しきったあなたとは大違いね」

「ハン、言ってるよ。クソ学園自治会のクソ風紀委員のクソ犬が」

クソクソクソと口癖のように乱暴に吐き捨てるコージ。

風のように受け流す冷徹な美女、六條。

無表情のままの和臣。

両者の会話のキャッチボールを視線だけで追いかけることしかできない誠一郎。

「せめて糞をたれるのは尻の穴だけにして欲しいわね。歩きながら汚物を垂れ流すのは学園の環境破壊よ。まったく……元学園自治会の人間とは思えない腐った発言ね。性根をたたき折ってあげようかしら」

叩き直すではなく、叩き折る……そこに嗜虐の笑みを見て取ることが出来た。それよりも、驚くべきは六條の言葉であった。耳を疑うような言葉。

コージが元学園自治会の人間であったという事実だった。

「……今更蒸し返すな、胸くそ悪い、マルチプレイで回線の差で

負けたときぐらい胸くそ悪りいぜ」

「六條先輩！」

「噂をすれば……ね」

一人の男が体育館裏に飛び込んでくる。

右腕には六條と同じ腕章。長身で細い長方形の眼鏡をかけている。髪は長髪の和臣から比べれば少し短く、清潔感を感じされる優等生然とした出で立ち。目つきが少し鋭いものの、整った鼻筋と、すっきりとした下あごのライン。和臣には劣るかも知れないが、美丈夫の域にあるのは間違いない。

「六條先輩、無茶はやめて下さい」

「無茶？ 何を持って無茶と言うの、まさた蒔田？」

蒔田と呼ばれた男に後れること数秒、ぞろぞろと腕章を付けた人間が現れる。合計で十人はいるだろうか。体格のいい、いかにも武術やスポーツをかじっている人間といった風情だ。

「……いえ、俺は六條先輩が」

「助けなんていらないわ。こんな風紀を乱すミミズの群体なんて、私が踏みつぶしてあげるだけだもの。地べたを這いつくばって、熱さにもだえ苦しんで干からびかけているような奴等は、上から見下ろしてそつと潰してあげるだけ。簡単な作業よ」

凍える雪のような冷たい言葉だ。

「よー、しゅうじ修次。相変わらず、自治会に首輪付けられてわんわんおか？」

「……。黙っていて下さい」

「つれねー弟だな」

コージと修次の会話は、それで終わりだった。

「もういいわ、これ以上ここにいても肺が腐るだけだもの」

六條が、つまらなそうに組んでいた右腕を宙にさ迷わせる。第二次大戦中、ナチスドイツ軍はユダヤ人捕虜を壁に立たせては次々と射撃し、処刑を繰り返した。その最中、かけ声を担当する軍曹の手のひらの仕草……それに似ていた。

「いいわ、やりなさい。抵抗するようなら、威力行為も容認するわ」

撃ち方始め。撃ち方始め、と。

「……お願いします、抵抗しないで下さい。俺は争いたくありません」

一礼して、蒔田はゆっくりと誠一郎達の方へ歩み出す。

第四十話・「感謝」

自治会の人間がわらわらと登場したことで、男達の数的優位が自治会側に傾いていた。

数的優位だけがコージの仲間達の威勢を支える柱だっただけに、あとはあっけないものだった。悪態をつきながらも、自治会の面々に背中を押され連行されていく。まるで歌舞伎町の違法賭博で捕まった暴力団が、虚勢を張りながらも渋々警察に連行されていくニュースを目の前で見せられているようだった。もちろん、コージもその一人である。弟であると言った蒔田修次に指示された自治会員、彼らに付き従うように、コージはふらふらと歩いていく。

「なあ、お前」

遠くなっていく背中が立ち止まる。忘れ物を思い出したかのように声を上げるコージ。

肩越しに振り返り、あごをしゃくって指し示す。

視線がぶつかったのは、誠一郎だった。

「名前だ、名前。お前の名前だよ」

「報復するおつもりならば、私の名前だけで十分のようですが」

視線と視線を結ぶ直線を遮るように和臣が一步前に出る。

「クソが、そんなんじゃないまたこーなっちまうだろうが。そうじゃねーよ」

コージは自分の額を指差す。ぱっくりと横様に割れた額の傷。誠一郎との頭突き合いの傷痕。血が止まってはいるが、まだ生々しい

赤に額が彩られている。

「葉山誠一郎」

和臣を飛び越える自己紹介。誠一郎は胸を張って答えていた。コードは何度かぶつぶつと名前を唱えた後、再び歩き出そうとして、また止まる。

「ああ、それと……」

きびきびしないマイペースな振る舞いに自治会の男が舌打ちを打っていた。

「PSNのオンラインID教えろ。次はそこで対戦だ」

マイペースにも程がある突飛なことを言い出した。

「ジャンルはFPS。有名どころのコール・オブ・デューティシリーズでどうだ。ちなみに、クソワンマン、クソデククロ、クソ対人グレは禁止な」

会話の影では、余った自治会員が体育倉庫の中を改め、機材を押し収めていた。

無線の機器や、ノートパソコン、各種のケーブル、外部バッテリー、秘境を探索する取材クルー顔負けの設備が次々に体育倉庫から運び出されていく。引きずられたケーブルをたぐり寄せようとして、マウスがぼろりと自治会員の手からこぼれた。砂利にでも当たったのか、プラスチックの乾いた音が風に混じる。

「クソが、丁重に扱えよ、クソ高いゲーミングマウスなんだぞ」

ガンを飛ばされた自治会の男が、コージの凄みに後ずさる。

「ビー、エー、シー、ケー、エル、エー、エス、エイチ」

「……りょーかい、クソ楽しみにしてるぜ。後で申請送るからな、ブロックすんなよ」

誠一郎の機械的な発音にニヤリと笑うと、捨て台詞を残す。

コージは自治会員に脇を固められながら連行されていった。

「いいのですか？」

「よくない」

困ったような顔は和臣だった。頬の筋肉を固めたまま、誠一郎はコージの去った風景を眺めている。そこにあった激闘の残滓でもにらみ付けるように。

「よくないし、あの男のやったことも許せない。……でも、それは俺達にも言えることであって、俺が責めるべきことじゃないんだ。俺は裁く側じゃない。俺もあいつ等と一緒に裁かれる側なんだ。でも、裁かれるとしたら、それは首謀者である俺だけ」

和臣が慕ってくれるのを良いことに手引きさせ、藍子を巻き込んだ。そういう筋書き。

「だから、俺は、俺だけは常に責められる側でいい」

さわさわとざわめく木々のじゃれ合いに、和臣のため息がそつと流れる。

「誠一郎君、一つだけ訂正させて下さい」

そよぐ風に前髪をもてあそばれる。

和臣の微笑みはまるで子供のわがままを許す父親のように慈愛と父性に満ちあふれていた。

誠一郎はそんなことをふと考え、それが和臣の大きさなのだと思います。

「責められるのは僕も一緒なのです。藍子さんもそれを望んでいますよ。喜びも、悲しみも、罪も、罰も、痛みも、三人で三倍、あるいは三等分。仲間はずれはいけません。僕たちは誠一郎君を勃起させる。それはもうギンギンにです。たとえそれが世界を、全てを敵に回そうともです。それは永久不変の誓いなのですよ」

二人の間を柔らかい風がながれていく。戦いに火照った体を優しく癒していく。痛みはさざ波のように体に寄せては返すけれども、親友の顔を見ているとそんなこと忘れてしまいうようになる。互いを支え合うこと。抜け出した魂が互いの背中を支え合っているようだった。

「田中先輩、怪我は大丈夫ですか？ それと……葉山先輩も」

自治会の人間がぞろぞろと立ち去っていく中、修次が和臣と誠一郎に対し深々と頭を垂れた。

「兄が見苦しいことをしました。謝罪して済むことではありませんが、兄に代わって謝罪いたします。すみませんでした」

謝罪の順番は、単純に優先順位。その証拠に、修次は誠一郎の名前を思い出すのに数秒を要していた。和臣は学園の生徒ならば誰で

も知る優秀な生徒である。財閥の三男坊というのも知名度に一役買っている。

「終わりね、行くわよ」

「では、失礼します」

「そうだ、忘れるところだったわ」

誠一郎と六條の頬と頬がすれ違う。

流麗で柔らかな髪の毛が、誠一郎の肌を、心をくすぐった。

そして、耳たぶをはむほどに唇を寄せると、六條は小声で耳打ちする。

「……明日の放課後、一人でここに来なさい。もし来なければ……あなたにとつてとても大切なものを失うことになるわ。これは、そうね……感謝よ。彼にはそう言いなさい」

言葉の真意が理解できないまま、六條が離れる。

蠱惑なほどに耳に残る声だった。

強い口調は意識的に作られたもので、その本質は声優も顔負けの甘ったるい声であると分からせられる。小声でもその声質はかすれずに明瞭に耳に入り込み、脳髓を溶かしていく。

もしもこの声で愛をささやかれたら……そんなことを想像した時、誠一郎の知らないところで、自身のある部分がぴくりと反応を示していた。

後ろでひとつに纏めた髪を手のひらでかきあげると、六條は颯爽と去っていった。

六條の残した香りが、本人がいなくなった後も誠一郎の胸の奥をつんと刺激し続ける。まるで治らない傷。そこから血がじくじくとにじみ出すような疼痛。

「誠一郎君、今の耳打ち、六條さんに何を言われたのですか？」

六條を見送る誠一郎と同じ風景を見ながら、怪訝な表情で和臣は並び立つ。

「……感謝された」

「感謝？」

「ああ、感謝だって、そう言ってた」

「そうですか。それならいいのですが」

六條によって用意された言い逃れが、体育館裏に落ちた最後の言葉だった。



「——誠一郎！」

肩を痛めた和臣を気遣いながら、廊下を歩いていたところに珍しい声量で声がかかる。

「おや」

「藍子……。うおっ！」

飼い主の帰りを待ちわびる忠犬の如く、誠一郎の胸に勢いよく飛び込んでくる。そのまま顔を埋め、鼻先ですりすりと胸をくすぐってくる。

頬が少し高揚しているのは、走ってきたからだろうか、それとも感情の高ぶりからだろうか。どちらにせよ、今の藍子はしっぽがあ

つたら左右に激しくフリフリしているのは間違いない。
藍子にしては珍しい感情の発露だった。

「あ……汗臭いし、汚れるぞ」

「臭くない。むしろ……くんかくんか」

「やめいっ!」

顔を手のひらで引きはがそうとするが離れない。

「心配した。すごく、心配したの。痛いどこ? どこが痛い?」

触診のつもりなのだろう。体をぺたぺたと容赦なく触ってくる。

「誠一郎の痛みは、わたしが舐めて治す」

「その治し方には嫌らしさしか感じない……」

「直接的にここを舐めてもいい」

胸元に埋めていた顔が、すすす、と下半身に降りてくる。

「女の子が軽々しく男の神聖を犯そうとするな!」

「触れるなキケン? 取扱注意? 誠一郎の……おっきいマグナム。

でも今は中折れ式のリボルバーで、リロード中のまま。弾が込められていない。タマがあるけど弾がないの」

「すごくセクハラと皮肉の効いた例えですね」

おお、と感心してみせる和臣。

「でも大丈夫。わたしは使用上の注意をよく読んでいるから、用法・容量を守って正しく使える自信がある」

「用法と用量ってなんだ……?」

「知りたい？」

「……いや、別に――」

「誠一郎がわたしを撃ち抜くのは、一日一発」

「まずは俺のハートを撃ち抜いてからにしてくれないか!？」

「私のハートはすでに貫通済。あわよくばもう一つの穴も貫通――」

「さ、そろそろ自重しような、藍子」

藍子のこめかみを、二つの拳で左右からぐりぐりする。

「……………自重……………する」

体を硬直させて痛みに耐えているようだった。無表情はそのまま
で苦しそうな声を漏らす。

「にしても藍子さんは、誠一郎君の心配はしても、僕の心配はして
いただけないのですね。頑張ったのに悲しいです。所詮、僕はおま
けにしか過ぎないのですね」

痛めていない方の手で、和臣が涙を拭う真似をする。

「おまけだけど和臣も心配していた」

「おまけと分かっていて、かつ本人が遠慮がちにそう言っている、
普通は真っ正直におまけとは口に出さないものですよ、藍子さん……
」

ガツクリとうなだれる和臣の姿に、誠一郎は思わず大声で笑って
しまう。

日常の三人。

やりとり。

そんないつもの雰囲気を感じられたから。

第四十話・「感謝」 (後書き)

B A C K L A S Hは、作者が好きなブランドだったり……。r o a
rなんかも大好きです。余談でした。

第四十一話・「ごめんな」

事件の翌日、和臣は肩の治療のために一時入院を余儀なくされた。怪我の原因は表向きには事故扱いとされている。事件当日は財閥の三男坊であり、社会的な事情による用事で一時的に早退する……ということになっていたからだ。風紀委員にとって和臣は利用できる存在ということらしく、箝口令を敷かれたように真実は闇に葬られた。それに伴って、誠一郎もこっそりと授業を抜け出した所を階段から転げ落ちる……などという馬鹿と間抜けを掛け合わせたような理由に落ち着いた。

誠一郎達、勃起部員が実行しようとした作戦は、幸運なことに身体測定盗撮事件の裏に隠れてしまった格好になる。

証拠も残っていない。壊れたヘッドセットも、もれなくコージ達のものだとされた。なぜ誠一郎と和臣があの場合に居合わせたのなんてことは、なんとでも理由が付くし、その疑問すらも箝口令の前には無力でしかなかった。

勃起部全体でかんがみれば、骨折り損のくたびれもうけといったところだった。

そんなこんなで、一応……日常は戻ってきたと言える。

映画研究会改め、勃起部部室では、和臣を除いた部員二人の姿があった。

「わたしはあなたのおかずおになりたい」

青空を音もなく滑っていくちぎれ雲。

その雲と白と黒のコントラストを作りながら鳶が相も変わらずつまらなさそうに飛んでいる。ぴーひよろろ、ぴーひよろろ。テンプレートにも程がある鳴き声は今日も呑気に旋回する。

部室の窓は開けっ放し。黙っているだけでも汗がじんわりとにじ

んでくる季節にそよぐ風は、とても涼しく感じられる。慣れたような仕草で眉間を押さえると、勃起部の部長である葉山誠一郎はため息を……少女の肩に落とした。

堅い髪質のせいで、短い髪の毛は、感情と一緒にツンツンと逆立ったまま。

「分かった。お前の言いたいことは分かった」

一連のやりとりにデジャビュを感じながら、誠一郎は顔を背ける。

「目をそらさないで。誠一郎は、わたしを見るの。わたしを見つめるの」

がつしりと頬を両手で押さえつけられる。顔ごと逃げられないとなると、あとは視線だけで逃げるしかない。人間の視界は百六十度程度。まるで箱庭の中でする無謀な鬼ごっこのようなものに感じられた。

「とは言ってもだな、この体勢は色々と青少年の衛生教育上問題あるぞ」

「本来起つはずのものが起たないことの方が、性少年の衛生教育上問題」

同じ発音なのに意味が違って聞こえる。

「それは、そうだけだな……藍子、膝の上に、こんな風に足を開いてまたがるのは、ちよつと乙女としていただけない、ぞ」

下を見てしまえば、短いスカートからのぞく下着をのぞいてしまうことになる。それこそ藍子の思うつぼである。

「ただけなくない。むしろ、ぺろりとわたしという乙女をいただいて欲しい」

「乙女がぺろりとか言うなっの！」

「……。ぺろんぺろん」

「ぺろんぺろんも駄目だ！」

「ちろちろ」

「ちろちろも駄目だ」

「……」

「……」

「ペー」

「ぺろぺろも駄目だぞ」

「……………」

藍子が少しだけ不満げに唇を尖らせたような気がした。基本無表情ではあるが、顔色の変化やわずかな表情筋の変化はあるのだ。藍子まで三十センチにも満たない至近距離ではそれが手に取るように分かった。もちろん、それ以外の感触的な部分も。

「何でも駄目駄目言っていたら、駄目。小さな子供のうちは失敗して、痛い思いをして覚えることも、大事」

「誰が小さい子供だって……？」

「わたし」

「お前は立派な女だろうが！」

「……！」

藍子の頭の上に特大のびっくりマークが出現し、動きが止まる。

「あ、いや、確かにお前は……立派に……女だが、まあ、嘘は言っていないし、否定はしないぞ。……うぐ」

唐突に藍子を誉めてしまったことに気が付いて誠一郎は顔を赤らめる。それが伝染してしまったのか、藍子もほのかに肌を桃色に色づかせていった。

「誠一郎、ずるい」

「悪い……」

何が悪くて、何が悪くないのかも分からないのに謝罪を口にする誠一郎。もしも、適当に謝罪の理由付けをするとしたら……この状況を引き起こしてしまったこと、だろうか。

藍子の素肌は白磁器のように美しくせに、張り艶がある。パイプ椅子に座る誠一郎と向き合うように、膝の上に無防備に座っている。バラ色の時代のようなピカソでさえ表現をためらうような肌の色。白の中にほのかに流れる赤の色。その息をのむグラデーションに加え、鎖骨をなぞるようにかかるわずかな影。人間国宝級の美女が誠一郎の目の前にいて、さらには大胆に触れ合うことを求めている……この世のものとは思えないその構図。

エロチシズムの巨匠グスタフ・クリムトが発表と同時に政府によって買い取られた接吻という絵画。黄金の絢爛を纏った女性の危うい足下。そこで男性に身を任せる女性の恍惚とした表情。口づけをする直前の男女。愛は死と共にあるという暗喩……。

誠一郎と藍子の置かれている状況が、なぜか符合しているように思えてしまい、誠一郎は戸惑い続ける。頭も同時にくらくらする。甘ったるいミルクのような、懐かしさを感じる藍子の匂いすらも、麻薬のように誠一郎の男を責め立てるのだった。

「誠一郎、約束。これ」

藍子がポケットから何かを取り出す。椅子に腰掛けた誠一郎に向

かい合ってまたがっているせいで、藍子は誠一郎の首に両腕を回している格好だ。手を放したら後ろに倒れてしまう危ういバランス。そんな状態でポケットに手をつまむものだから、危うくバランスを崩しそうになり誠一郎は密かに慌てた。

「これは……メジャー？」

「うん」

「これがどうかしたか？」

「うまくいったら誠一郎が身体測定してくれるって言った」

約束……。

誠一郎は頭から記憶をひねり出す。

——分かった……待機する。でもその代りお願いがある。うまくいったら……誠一郎がわたしを身体測定して。

——ん……？ あ？ ああ、いいぞ、わかった。

確かに。そんなことを作戦会議前に話した気がする。

「……いや、いやいやいや。だとしてもだ。違うぞ藍子。あの約束は、うまくいったら、だぞ？ 結局の所、オペレーション・スクール・ナース・オフィスは失敗だった。俺の不良息子はいまだ引きこもったまま、ぴくりとも勃起できなかったわけだし、藍子にも和臣にも迷惑をかけたし、てんやわんや大変な思いをただけで成功の影もなかったじゃないか。だから、残念ながら約束は無しだ！ いやー、残念だったなー、藍子の身体測定してあげたかったなー」

「アンダーとトップ、どっちを先に」

「聞いてないな！」

「バストトップは、メジャーの目印が、ここ……」

首につかまっていた両手を解いて胸元に持ってくる藍子。

「馬鹿！ 倒れるだろうが！」

仰向けに倒れていきそうになる藍子の体を、腰に右手を回すこと
によって何とか支える。制服の上から腰のくびれを抱くような形に
なり、気恥ずかしさは満点だ。社交ダンスでワルツを踊る際、あ
んなに大胆に女性の腰に手を添えられる世の紳士諸君に敬意を表した
くなる。

「支えてくれると思ってた」

「お、お前じゃなくても普通支えるぞ」

「そこが、優しい。誠一郎の優しい」

「勃起するために身体測定をのぞきに行く奴が優しいかよ」

「優しい、よしよし」

「撫でてくれるのはありがたいが、撫でる場所間違っているからな」

股間のあたりを撫でる藍子をたしなめる。

「……！」

「わざとらしく驚くな！」

藍子を指してクールビューティーと言い始めたのは誰だったか。
誠一郎にとって、藍子がクールビューティーと呼ばれるのは、不
思議で不思議で仕方がない。藍子は誰にでも二度見三度見されるほ
どの美女であることは、皆が皆分かるのに、表情豊かな一面がある
ことにはなかなか気がつかない。二度も三度も……いや、おそらく
何十回と見ているのにだ。藍子は自分に入力される感情を、上手く、
豊かに表情として出力できないだけ。

そうだ。上手くできないだけで、出力はしている。

あとは周囲の誰かが気がついてあげるだけ。

分かってあげるだけ。

「聞いて、誠一郎。大事なこと。バストトップの計測は、メジャーの目印が、ここになる」

藍子は誠一郎の余った左手を握ると、ちょうど谷間の部分に手を添えさせる。残念ながらがらふくよかとは言えない胸なので、その部分に谷間は存在しない。

雪解け水が流れる多くの川、何百万年にもわたって南アルプスから砂利石を運ぶことで形成されたニュージーランドのカンタベリー平原のように、なだらかで起伏の少ない藍子の胸。

それでもそこには女性らしいわずかなふくらみがあった。

ドキドキさせる感触があった。

「乳頭と乳頭の、ちょうど中間。おっぱいの中央に来るようにして、おっぱいのふくらみの一番高いところに通るように測ります。誠一郎、リピートアフターミー」

「ノー、アイ、キャント！」

羞恥心を煽るのにも程がある。

「タッチミー、イフユーキャン」

「マトリックスでローレンス・フィッシュバーン演じるモーフィアスがそんなことを言っていたな……」

誠一郎は、考えるな感じろ、とブルース・リーばりの台詞を言おうとして止める。

藍子が必要以上に一時的な接触を求めてくるときには、それなり

に理由があることを分かっていたからだ。

考えるな感じろ。そんなもの必要ない。

感じるまでもなく、考えるまでもなく、知っている。

「藍子、ごめんな」

頭を撫でてやる。さらさらと指の隙間を抜けていく髪が気持ちいい。

「……」

藍子は誠一郎が何かを感じ取ったことに気が付いたのだろう。ぴたりと動くのを止める。しばらく誠一郎の瞳をのぞき込んだ後、握りしめたままの誠一郎の左手で遊び始める。

第四十一話・「ごめんな」(後書き)

数えてみたら文字数が多かったので二分割します。すみません。

第四十二話・「好き」

「誠一郎の手」

向かい合ったままの二人。

パイプ椅子が二人の体重にぎしりと悲鳴を上げる。藍子は誠一郎の膝にまたがったままで、誠一郎の空いた左手を取り、観察するように両手でむにむにと感触を確かめたり、すりすりとは撫でたりしている。

「誠一郎の親指」

軽く握られたままの誠一郎の手から、親指を起こす。誠一郎の親指の腹の部分を、藍子は自分の指で指紋をなぞるようにくると撫でる。親指の腹の真ん中を何回かついたり、指の関節を曲げたり伸ばしたり。まるで、お気に入りのフィギュアの可動を確かめるような仕草。

藍子から一方的に触られることは日常茶飯事なのに、なぜかまじまじ見られ、じつくりと観察されると、感触も気持ちも、すぐくすぐりたい。

「誠一郎の人差し指」

親指に満足したのか、次に藍子は誠一郎の人差し指を起こすと、親指と同じように動かして感触を確かめる。

「誠一郎の中指」

自分の指の長さと、誠一郎の指の長さを比べて、手のひらをくっ

つけたり。水かきをつまんで伸ばしてみたり。短い生命線をそつと
なぞってみたり。

「誠一郎の薬指」

終われば次。また終われば次。

「誠一郎の小指。……小指だけ指紋が円じゃない」

指紋の形一つ一つに至るまで飽きることなく藍子は確かめ続けて
いた。

気が付いたことを口に出し、記憶するようにフラットな声でつぶ
やく。

「そうなのか、気が付かなかった」

「わたしは気が付いた」

誠一郎という玩具に夢中になっている子供。幼い女の子。

砂場の真ん中で、雨が降れば簡単に崩れ去るような城を作って遊
ぶ。崩しては、崩されては立て直す。子供にしか喜ぶことのできな
い些細な幸せ。二人で作り上げる喜び。確認する喜び。

藍子が誠一郎の手を取って確認する姿は、誠一郎に幼かった頃の
二人を思い出させた。懐かしい公園の情景を想起させた。映写機が
回り、カタカタとフィルムの回る音がして、スクリーンに映し出さ
れるモノクロの映像……。

「小指と薬指を閉じて、親指も閉じる。ちょきができた。じゃんけ
んぽん。わたしの勝ち」

「思いつき後出しじゃねえか……」

藍子のしたいようにさせる誠一郎。

「なら、もう一度じゃんけんする。……じゃんけんぽん。わたしはパーだから、誠一郎の勝ち。一勝一敗。引き分け」

「八百長は問題だぞ」

藍子はまるで人形と一人遊びに興じるように、静かに……でも心なしか楽しそうに誠一郎の手で遊んでいる。誠一郎はうんうんとうなずくように優しい声で藍子に返事をする。

「全部開いて、今度は中指と薬指と、親指をくつつける」

「何が出来た？」

「コンコン。狐ができた」

「……影絵ならまだしも、手だけだと狐の骨に見えるんだがな」

「中指、人差し指、薬指を握る」

「今度は何だ？」

「しまった。ツーアウト」

「しまつていこう、だからな。追い詰められてどうする」

子供の遊びを後ろで見守る親の視線。

泥の団子を作って嬉しそうに持ってくる。よくできたわね、といながら子供の頭を撫でてやること。

泥だらけで返ってきた子供の服を洗うのを億劫に思いながらも、今日も元気でいてくれてありがとうと思いつつ、泣きながら服を脱がせること。皿を割ったことをこっぴどく叱り、泣きながらベッドに潜った我が子に、憎くて怒るわけではないと優しく語りかけること。

「全部の指を閉じる。おにぎり。食べたい。もきゅもきゅ」

「俺のだぞ。食べるなよ」

藍子と誠一郎のやりとりはそんな親子のような、兄妹のような温かさに溢れていた。

「……傷。傷ついてる。誠一郎の手の甲。擦り傷。切り傷」

コージと殴り合ったときに出来た拳の傷を発見する。殴り合った拳には血がにじみ、今は赤黒いかさぶたになっている。

藍子はそっとかさぶたの上に手のひらを重ねた。

「わたしは誠一郎の盾で、矛で、鎧で。わたしは誠一郎の願う全てになりたいの。わたしの目も、耳も、鼻も、唇も、髪も、肌も、胸も、腕も、手も、足も、誠一郎がわたしに触れる全部が全部、細胞の一つ一つが誠一郎のためにあるの」

藍子が魔法使いなら、温かい光で傷を癒してくれるような、そんな呪文のような語り口。

「誠一郎が悲しいことはわたしも悲しい。誠一郎が嬉しいことはわたしも嬉しい。誠一郎が怒ったらわたしも怒る。誠一郎が泣くならわたしも泣く。誠一郎が痛いことは……わたしも痛い」

言葉に抑揚がない分、藍子の感情には抑揚があった。

感情の抑揚は波となり、体を伝って伝播、表出し、それがかすかな震えとなって誠一郎に届く。

「でも、誠一郎がこんなに傷ついているのに、わたしは傷ついてない。誠一郎があんなに頑張ったのにわたしは頑張っていない」

「藍子……」

「わたしも痛くなりたい。誠一郎と同じものが欲しい。誠一郎と同じになりたい」

雪のように白い肌。体温も雪のように冷たい。溶けてしまいたい。溶けてしまいたい。なほどに。

凜と舞い落ちる言の葉が、深々と切々と心に積もっていく。藍子の握る力が強まり、包まれる誠一郎の手が窮屈になる。

思いの丈を、まるで言葉と力で表現しようとするように。

「誠一郎、わたしも痛いのが欲しい。誠一郎が感じた痛い気持ちと、同じ気持ちに欲しい」

藍子の澄んだ瞳の雪原には、誠一郎しか映っていなかった。

雪原にたった一人立つ誠一郎。新雪を踏みしめる。他の誰の足跡もない大雪原を歩いている……。

誠一郎は、一度目を閉じる。

藍子と過ごしたいくつもの季節を巡りながら、その風景から抜け出した。

「そんな必要はないんだ、藍子」

「わたしは誠一郎と同じがいいの」

「藍子まで傷つく必要はないんだ。これは俺がしたくてしたことなんだからさ」

「でも、痛いのが欲しい」

藍子の頭に手を置く。

「……なあ、藍子」

手の向こう、前髪の間から見上げる藍子の瞳。疑うことを知らない、つぶらで無垢な光。

「お前が俺を大事に想ってくれるのはすごく嬉しいんだ。心強いよ。例えばアメリカ軍最大の戦力と規模を誇る第七艦隊が味方に付いたとしても、俺は藍子一人がいてくれた方が心強い。もちろん、和臣だってそうだ。三人が揃えば何物にも負けない気がする。世界中の戦力をかき集めてきたって勝てる気がする。三人ならな。俺はいつだってそう思ってる。今だってそうだし、多分これからもそうだ。藍子はどうだ？　藍子もそう思うか？」

「うん」

こくり。

「だったらさ、痛くないか？」

「……？」

「俺や和臣が傷ついてさ。倒れて、怪我して、血を流して、もしかしたら重傷で出血多量で、打ち所が悪かったりしたら死に至ってしまいかも知れない……」

「誠一郎、それ止めて。聞きたくない。考えたくない」

耳を塞ぐ。想像しただけで嫌な気持ちになるのだろう。いやいやと首を振る。

「聞いてくれ藍子」

耳を塞ぐ藍子の両手を取る。

「もしも……もしもそうなってしまったらって想像したとき、ここが――」

宝物に触れるように、丁寧に藍子の胸に触れる。

藍子の心臓の上、藍子の女性の部分。柔らかな感触。制服の内側

のわずかな柔らかさの中に、指が沈んでいった。かすかな弾力が指を押し返そうとする。

嫌らしい気持ちなどなかった。風邪を引いたとき、額に手を当てて熱を測るように、心の中には思いやる気持ちのみ存在していた。

「――ここが痛くなかったか？　ずきんずきんしなかったか？」

「ずきんずきん……？」

「そうだ。苦しくて、不安で、頭がぐるぐるにならなかったか？」

「ぐるぐる……？」

「ああ、そうだ。ずきんずきんでぐるぐるだ。藍子になったか？　それともならなかったか？」

「……。………なった」

誠一郎の手に自らの手を重ねる。

「なった。誠一郎が傷つくの怖かった。いなくなるの怖かった。ずきんずきんしてぐるぐるした……」

「だったら、そういうことだ。……俺達は繋がってるんだ。俺も藍子も和臣も繋がってるんだ。親友だからな。絆なんだよ」

和臣と叫んだ川辺を思い出す。

掛け違っていたボタンを、長い時間をかけてようやく掛け合わせることが出来たときの記憶。体が爆発してしまいそうな程の興奮に叫ばないではいられなかった。

「だから、傷つきたいなんて言うな。痛い欲しいなんて言うな。俺達は離れていても、体はそばになくても、心ではそばにいるんだよ。思えばその瞬間に互いの痛みを感じるんだよ」

「……うん」

「それでも言うこと聞かない奴にはそうだな……」

ニヤリと笑う誠一郎と、首をかしげる藍子。

「こうだ！」

「……！」

誠一郎と藍子の額が軽くぶつかり、二人の視界に小さな火花が散った。

まるで夏の終わりを感じる線香花火のような。赤い玉がその力を失う寸前に放つ、最後の願いを思わせる火花だった。

痛みに額を赤くしながら、誠一郎はそれでも笑った。

「どうだ痛いかな？」

「うん」

「俺も痛いぞ」

「うん」

「同じ痛みだな」

藍子の唇が広がる。唇と同じく、眉も薄いカーブを描いたままうなずいた。

「うん、分かった」

微笑みだった。

「なら、よし！」

誠一郎は藍子を膝の上から下ろす。ポケットから携帯電話を取り出して時間を確認。授業終了後一時間経過。飲み会ならば宴もたけなわ。放課後としてはいい時間帯である。

誠一郎には……約束があった。

そのまま部室のドアの方に歩いていく。

「俺と和臣が、あんな馬鹿みたいに無茶苦茶して喧嘩したことは謝るよ。身勝手な先走りなんだけど、お前や、六條さんや、クラスメイトみんなを守りたかったんだ。ただの自己満足な正義感……なんだろうな。何でかって言われれば、単純に友達だからだし、単純に大事だからって答える。やっぱり……守りたかったからなんだ。守りたかった。これに尽きるかな……」

ドアのノブを握ったところで藍子を振り返った。

「正直言うと俺だって勃起したかった。最初はそういう目的だったし。起たないのはその……情けないけどさ。いざ、誰かにのぞかれているとか盗撮されているってなったら、もう、自分の勃起とかのぞきとかどうでもよくなっちゃってさ。無性に腹が立って、もう守らなきゃー、で頭がいっぱいになって……駄目なんだよな、思った時には体が勝手にさ」

「誠一郎」

「ん？」

開け放たれた窓から、突風が入り込んでくる。

悪戯な風は藍子の声をもみ消そうと部室を縦横無尽に駆け回ったが、ドラマのように都合良く声をかき消したりは出来なかった。

「――好き」

一言。

「……ああ」

誠一郎はドアのノブを回しながらうなずいた。

「好き」

「うん」

うなずきながら、ドアを開ける。

「好き」

「……分かってる」

体を部室の外へ。

「大好き」

「……ありがとうな。本当にありがとう、藍子」

藍子の顔を見ることなく、誠一郎は部室のドアを閉めた。

第四十二話・「好き」(後書き)

次回で一応、最終回です。ふっふっふ……。

エピローグ・「六條七海」

体育館裏に、激闘の跡はない。

かつて長篠の戦いで織田軍に敗れた武田軍。鉄砲隊によって蹴散らされた騎馬隊。戦場に散っていった武将達。設楽原にて残された馬の死体も、武将達の鎧も、鉄砲隊の火縄銃も、戦場の匂いと共に翌日にはまだそこにあったはずだ。

しかし、体育館裏は信じられないぐらいにいつも通りだった。しんと静まりかえっている。時折吹く微風と、ぺちやくちゃとおしやべりする小鳥たちだけが喧噪を作り出すだけ。人が人を容赦なく殴り、傷つけ、血を流し、怒声と咆哮が飛び交った場所は、あたかも夢の中の出来事だったかのように、平和な時間の中で眠りについていた。

突然、携帯電話からアニメ、カウボーイ・ビバップのオープニングのイントロが流れる。いきなりの大音量に飛び上がる誠一郎。

「か、かか、和臣か？」

ポケットから取り出した携帯電話をお手玉しながらも、なんとか受話部を耳に押し当てて。その慌てようは、まるで子供を人質に取られて身代金を要求された両親の、犯人に対する第一声のようだった。

「そうか……うん、うん。……分かった。また、学校でな」

和臣から簡単な怪我の状態を説明されたところで、手短に通話を終了しようとする。

「……。おい……。早く電話切れよ。は？ 俺から切れって？ 俺は

「お前が先に切ると思って――」

携帯電話から漏れ出る声が喜びに弾んでいる。

「お前は俺の彼女だったの！」

小鳥たちが驚いて電線から飛んでいく。

「彼氏でもない！」

連想ゲームとしては低レベルなやりとりである。

「……じゃあ、切るからな。今度こそ切るからな。待ってたって無駄なんだからな。切るぞ、あと三秒で本当に切るからな。よし……三……二……一……。……。……切れよ！そこは騙されて切ってくれよ！？切らないと思った、じゃない！くそ、このままどちらかの電池切れを待つほかないのか。充電しながら電話しているから大丈夫？はいはい、それじゃあな。え、電話を切る前に一つだけお願いがある？お前がいなくて寂しいか答えろ、だど！？」

静寂が訪れたと思ったのか、小鳥たちが再び電線に戻って来ようとする。

「寂しい。だから早く戻って来い！」

小鳥たちは一目散に逃げ出した。

「……これでいいか、和臣？」

落ち着いた声が電話越しにうなずき返す。

「ま、満足してくれたようで何よりだっ！　というわけでこれ以上は生き恥は晒せぬ！　切り捨て御免！」

なぜか武士口調になって、強引に通話終了ボタンを押下した。

「そうか……脱臼なのか。脱臼直後は死ぬほど痛いはずなのに……やせ我慢しやがって」

頼もしい親友。無二の友、その無事とつかの間の休息。誠一郎が心地よい充実のため息を吐く。

「ずいぶん楽しそうね、葉山誠一郎」

「ろ……六條さん」

「田中君の容態はどんな感じ？」

肩に掛かっていた髪の毛を背中へかき上げる。まるでお嬢様然とした振る舞い。

「肩の脱臼だって言っていました。全治二、三週間ってところです」

「そう、それはなにより」

聞いておきながら、さほど嬉しくもなさそうな物言いだった。

「昨日は災難だったわね。あんな大人数相手の喧嘩は大変だったでしょう？」

「……和臣がいましたから」

「そうね、心なしか生き生きしているように見えたわ。さぞかし格好良かったんでしょうね。だってあのコージが負けるんですもの。かつて風紀委員だった頃は、負ける姿なんて誰も見たことがないく

らいに強く、恐れられてすらいたのに。私もコージが無様に倒されるところを見てみたかったわ。本当に、風紀委員を辞めてからの彼は墮落を過ぎて、墮ちるところまで墮ちたわね。いっそ、そのまま地獄まで直滑降、ノンストップで転落死してくれた方が助かるのだけど」

「……」

「――で、その後、あの女はどうだった？」

「あの女って誰のことですか」

六條がいうあの女とは誰のことなのか、わざわざ聞かなくても分かる。だが、誠一郎は六條の言い方が引っかけり、あえて聞き返した。

「藍子よ。国方藍子。あの子は心配したでしょう？ 大好きな葉山君が傷ついたんですもの」

腕を組んで不敵に笑う。

「抱き合いでもして慰めてもらった？ それとも傷の舐め合いっこでもした？ あの女のことだから言えばなんでもしてくれるんじゃない？ というか、もうすでにそんな関係でもおかしくないわね。」

四六時中一緒でしょう？ あなたたち二人は」

「藍子をそんな風に言うのはやめてください」

誠一郎の声をなかったことにして、六條は続ける。

「分からないわね。葉山君の一体どこにそんな心惹かれる要素があるのか。藍子が一般受けする容姿だってことは百歩譲って認めるとしても……葉山君は見てくれも一般人のそれなのに、どうして藍子は惚れているのかしら。世の中は分からないわ」

誠一郎の目の前に進み出、品定めをするような視線で、昆虫標本にでもするかのように上から下まで視線を刺してくる。

「あ、そうだ、藍子ついでに教えてくれない？」

誠一郎の胸を人差し指でとんと突く。

「あの機械のような藍子は一体どんな感じに甘えてくるの？ 体をすり寄せて上目遣いにねだってくるの？ お尻を突き出して雌犬のように？ 強引にまたがってくるとか？ 自ら激しく腰を振ってくる？ それとも案外マグロ？」

「やめてください……！」

「ああ、そうね……一見おとなしそうな女って、外面の皮を剥いてしまえば、案外堕ちるのは早いと言うし、他人には聞かせられないような淫猥な声で、あんあん鳴くのかしら、まったく興味が尽きないわ、藍子には」

「やめてください！」

胸を突いていた六條の手首を握りしめる。白く細い手首。握りしめた手首は、誠一郎の親指と中指でちょうど一周してしまうぐらいに細い。いやらしい笑みを浮かべていた六條も、誠一郎のこの行いには笑みを不満へと塗り替える。

「葉山君。自分が今、何をしているか分かってる？」

振り払おうとはせずに、強く握りしめられた手首を言葉で制しようとする。

「……手を、放しなさい。それとも風紀委員お世話になりたいの？」

「……」

親友をけなされた怒りを吐き出したい、そんな衝動に駆られたが誠一郎はなんとか口をつぐむ。

「素直でいい子ね、葉山君は。どこかの淫乱女とは大違い」

以前、藍子にされた時と同じく、手首をさする六條。それと符合するように、偶然にも握った場所はまったく同じだった。

「前置きはいいい加減にしてください」

「ふーん、気が付いていたのね。もう少し藍子をネタにして遊びたかったけど……いいわ、茶番は終わりにして、そろそろ本題に入っ
てあげる」

ポケットから、あるものを取り出す。

「これは何か、分かる？」

それは、白い布のようなものだった。大きさ三十センチ四方。皺が寄ってしまつてくしゃくしゃで、何かを拭き取ったような汚れがある。

考える暇など必要としなかった。背中を巨大なハンマーで叩かれたよう驚きに、心臓が口から飛び出してしまうのではないかと錯覚した。記憶の引き出しを開けて中を探るまでもない。

それは作戦実行中、唯一にして最大の懸案事項になったもの。作戦終了後に処理されなければいけない残件。

……藍子のハンカチ。

部室での作戦説明。鼻血を出した誠一郎に藍子がすかさず差し出したハンカチ。血を拭い、洗って返そうと思ってポケットに無造作

に突っ込んだまま、オペレーション・スクール・ナース・オフィスに臨んだ。作戦実行のただ中、南京錠に付着した自らの手汗を拭うために使用して、保健室のベッドの下に慌てて飛び込んだ。そのときに保健室に放置せざるを得なかったハンカチ。ないと思われていた証拠。

「そうね、私にはただの汚いハンカチに見えるわ。誰の目にもそう見えるんじゃないかしら。でも葉山君、その様子だと、あなたの目にはそう見えないみたいね。ただのハンカチなのに。ただの血の付いた汚いハンカチなのに」

尋問をする刑事のように、誠一郎の周囲をゆっくりと歩き始める六條。

「このハンカチは扉のすぐ近くに落ちていたものを私が拾ったの。……落とし物は持主に返さなくてはならない、そうでしょう？ 私は親切心でこうしているのよ。だから、そんなに緊張しないで？」

正面から、六條の笑み。

「高木先生に聞いたら、先生のものではないそうよ。もう一つ、身体測定前に保健室を出るときには扉付近にはハンカチはなかった。つまり、先生が保健室をいったん出て、戻ってから身体測定が始まったときにはすでに保険室内に存在していたの、保健室のベッドの下に隠れていた卑劣な犯人も、この……誰かさんのハンカチもね」

右から、六條のささやき。

「知っているでしょうけど、私は藍子が嫌い。嫌いだからこそ藍子のことはよく知っているの」

後ろから、六條の足音。

「……人は好きと嫌いでしか記憶できない不便な生き物。その他の有象無象を記憶しない。それは無関心でしかないから。頭に入ってもすぐに消えていく。人の記憶は常に好きか嫌いかなのであって、好むか好まざるかではないのよ」

左から、六條の危険な香り。

「保健室のベッドの裏に隠れていた何者かが、藍子のハンカチを落としていた。……けれどなぜか急に飛び出してきて逃げていった……。まったく、とんだシンデレラもいたものね。自分の仕業であることを示す証拠を残して逃げるなんて」

時計回りに声が誠一郎を追求する。

四人の処刑者に銃を突きつけられているような、汗さえ蒸発する感覚だった。

「――もう、十二時の魔法が解けてもいい頃合いよ」

「……」

完成させるはずのパズルのピースが手の中からこぼれ落ちた。最後の一つのピースをはめれば完成した美しい未来予想図は、もはや未完成のまま。代わってピースの抜けたパズルの穴から覗くのは、犯行現場の一部始終……。

「俺は逃げられないんですね」

誠一郎は覚悟を決めていた。もとより、リスクを覚悟しての行動だった。

世界を敵に回すと宣言した。それは学園の自治会、風紀委員を敵に回すと言うことでもある。もちろん、六條もその敵の中に含まれる一人だ。しかしながら、それが六條であるからこそ、誠一郎はそんなに犯行を認めていた。

……他の誰でもない六條だからこそ。

「見覚えがない、知らない、存じない……汚職政治家のような言い訳をしたっていいのよ。もちろん、きちんと調べさせてもらうけれど。自治会及び風紀委員の力を最大に使ってね」

「その必要はないです。それは藍子のハンカチですし、付着しているのは俺の血です。言い訳もしません」

「拍子抜けね、てっきり言い訳をしてくるのかと思ったわ。それに、まだ証拠は出そろっていない。言い訳と釈明の余地は残されているのに、潔のいいことね」

「俺はどうなるんですか？ ……謹慎ですか？ 停学ですか、それとも……退——」

「ねえ、葉山君、私の右腕を見なさい」

声を断ち切られる。六條は左手で自分の右腕をぽんぽんと叩く。

「私は今、風紀委員ではないの。ただの六條七海、個人としてここにいるわ。その六條七海個人が、葉山誠一郎に少しだけ興味があるのよ」

「興味……？」

試すような表情、挑発するような眼差しが、誠一郎の心臓を茨で締め上げる。

「そう、興味よ」

動悸を高鳴らせたが最後、棘が心臓の表面をことごとく突き刺す。誠一郎の頭の中では、触れるな危険、というブザーが鳴り響く。

「今回の事件、風紀委員としての六條七海はなにも見ていなかった。そういうことにしてあげる。証拠も返してあげる。この汚らしい血と汚れを洗って、証拠をきれいさっぱり隠滅して、藍子に返してあげればいいわ。部活動も継続していいし、馬鹿みたいな日常を送るのも構わないわ。つまり……不問ということね」

確実に餌をちらかせられていると言うことが分かる口調だった。目の前にニンジンぶら下げられた馬が必死に走るような、そんな見え透いた罠の匂い。

「まあ、タダでとは、さすがにいけないけれど」

あえて、自ら罠にははまる。罠であると分かっている罠にはまる。文豪、谷崎潤一郎が描いた『痴人の愛』、その主人公である譲二がそうであったように、誠一郎もまた。

「俺は……何をすればいいんですか」

それも良いだろう、と誠一郎は思った。

「――私の犬になって」

六條に耳元でささやかれる。ぞっとするほど刺激的な声。

「ご主人様がお手と言ったら、手を差し出す。回れと言ったら回る。取ってこいと言ったら取ってくる。ちんちんと言ったら恥部でもさらけ出す……そんな主人に忠実な犬にね。それで、今回の事件は何

もなかったことにしてあげる」

「……っ！ ……分かった」

「商談成立ね。それじゃ、これからよろしくね葉山君。いえ……犬の、誠一郎君」

誠一郎にハンカチを握らせると、満足そうに去っていく六條。

体育館裏、その背中を見送りながら、誠一郎は心の中で親友二人に謝罪していた。

他にどうしようもないと思えた。

そんな言い訳じみたことを思いながら、誠一郎は藍子のハンカチを強く、強く握り締め続けていた。

【第一部・END】

エピローグ・「六條七海」(後書き)

一旦、終わりです。単行本で言う第一巻的な終わり方で本当にすみません。あとがきで色々書くこうと思ったのですが、言い訳がましくなりそうなので書きません。

長い間お付き合いいただきありがとうございました。また次回作でお会いできることを、心より願っております。

小説に対する評価・ご感想は、もれなく作者の栄養になります。
ではー

閑話休題・第一話「くんかくんか」

日曜日の朝は、カーテンから差し込む一条の光と、窓の外を飛んでいく鳥たちのおしゃべりに彩られていた。薄暗い部屋に差し込む太陽光はまるでスポットライト。

ハウスダストなどと不名誉にあだ名された埃も、ひとたびスポットライトを浴びれば金糸のように美しく蘇る。舞台の中央でバレエのようにくるりくるりとひるがえる様は、さながら舞台の中央で踊るプリンシパルだ。部屋の主がもれなく寝坊助な日曜日にあつては、まさに埃達にとっては自らの演目に自信を持てる唯一の時。

そんな優雅なひとときを、一人の少女が邪魔をした。

光を遮る美しい黒髪は、埃の誇りを簡単に打ち砕く美しさに満ちあふれていた。

「おはよう、誠一郎」

静かにつぶやいた少女の名は、国方藍子。

まばたきをすれば黒曜石のような美しい瞳を長いまつげが隠す。薄く紅を惹かれた口唇は、白磁のような肌の中で唯一ほんのりと朱に染まっただけで、なまめかしさを演出していた。全ての道がローマに通じるように、全ての美に通じる表現はこの国方藍子という少女に続いている。

大げさな表現が大げさではない……そんな三十億分の一という女性と大別されるカテゴリーの中でも、飛び抜けて少女は美しかった。

「よく寝てる」

少女ははらはらとこぼれ落ちてくる長い髪の毛を耳の裏に流すと、すやすやと眠る一人の男に顔を近付ける。

男は枕に顔を埋める形で惰眠を貪っていた。一定のリズムで布団が上下していることから、安らかな睡眠であることを思わせる。

「誠一郎の寝顔。気持ち良さそう」

味わうようにつぶやいた。

少女の唇と誠一郎の頬の隙間は一センチ。呼吸をすれば吐息が届く距離。

まるで香りを楽しむように、少女は鼻をすんすんとひくつかせた。寝苦しい夜を経た男性特有の汗の匂いが鼻腔をつつく。少し酸味のある匂いが藍子の胸の奥をちりちりとくすぶらせる。焼けた炭が酸素を喰らって炎に変わるように、藍子の中で誠一郎の匂いは体中に火を灯していく。

「くんかくんか……。いい匂い」

鼻を鳴らす。異性であれば顔をしかめるかも知れないその匂いは、藍子という少女にとっては体中に纏わせたいほどかぐわしい香りであった。

匂いが胸を焼き、下腹部に熱い火照りを宿らせる。

まるで熟した果実を握りつぶすような錯覚が藍子の中で実感に変わる。

「犬のように匂いを嗅ぐなんて、はしたないことは分かっている。でも、これは光合成だから。二酸化酸素を取り込んで酸素を生成するようになものだから。……すう……はあ」

握りつぶした果実からは、瑞々しい液体が指と指の間からじゅくじゅくと漏れだしていく。絞り出されていく。絞り出されているはずなのに流れ出る水の量は一向に無くならない。藍子は太ももをも

じもとすりあわせながら、誠一郎の顔をのぞき込み続ける。

「誠一郎。わたしは、このまま誠一郎に触れることができる。手で頭を撫でることもできる。髪の毛に鼻を埋めることも出来るし、耳をはむことだって出来る。誰の唇も受け止めたことのない唇に口づけることも出来る。でも、わたしはできない。誠一郎に許しを得ないで、誠一郎の知らないところで、誠一郎の意識のないところで、身勝手にわたし自身の欲望を満たすことは許されない。わたしは誠一郎のものだから。誠一郎のそばにいたいから、わたしはわたしを我慢するの。こうして、見つめているだけで我慢するの」

無表情であつた美しい白面は桃色に上気し、吐息もわずかだが荒さを増す。

「触れずに、見つめるだけ。見つめるだけ。誠一郎を見つめるだけ。誠一郎、まつげ長い。ひげが少しだけ生えてる。口をもぐもぐしてる。むにゃむにゃしてる。額にうっすら汗をかいている。誠一郎、昨日はどんな夢を見たの。その夢の中に、わたしはいた……？」

吐息がくすぐったいのか誠一郎は身じろぎし寝返りを打つ。

吐息をすきま風と勘違いしたのか、誠一郎は布団を探し求めるように腕を伸ばしたかと思うと、そばでのぞき込んでいた藍子の首を抱き寄せてしまう。藍子の体は軽量で、簡単に誠一郎の腕に抱え込まれてしまう。

……誠一郎はなおも夢うつつ。

藍子はなすすべ無くベッドの中に引きずり込まれ、抱き枕の要領で誠一郎に抱き締められてしまう。

「……。これは夢」

寝ているのは誠一郎なのに、藍子は驚いたような声を漏らす。自らに突然訪れた至福を信じられない。抵抗することもなく目をぱちくりとするだけ。

「わたしは布団。誠一郎の布団。なれるかじゃない。なるの」

幸せが少しでも長続きするように念じる藍子である。

その一方で、夢の中の誠一郎は、布団の代りになっても有り余る藍子の抱き心地に満足したのか、ついには藍子の胸に顔を埋めてしまった。薄手のカットソーに、ショートパンツという軽装は、抱き締める誠一郎にとっては女性の柔らかさをより実感できるのだろう。少ない胸の谷間を楽しむように頬ずりをはじめてしまう。

感覚を顔に出さない藍子が、くすぐったさに思わず体が反応してしまいそうになる。

染みこんでくる、熱。広がっていく、熱。

「これ以上は……駄目」

少し強い口調で拒否したのは、誠一郎の行いではない。

藍子の中に留めている熱い感情が顔を出し始めたのである。

誠一郎に触れるだけでいとも簡単に沸騰する藍子の中の液体。

胸をいっぱいにさせ、そこから溢れた感情が下腹部からにじみ出そうとしていた。

閑話休題・第一話「くんかくんか」(後書き)

題名の通り、閑話休題です。ちょっとした連載になりますますがよろしくお願いします。内容は読んでいただければ分かると思いますが、しごく健全なお話です。

閑話休題・第二話「なにかもをひとつに」

自分が危ういバランスの上に立っていることを、藍子は頭がぼろっとなることで自覚した。

誠一郎の腕に抱かれている、今。

感じられる二の腕、筋肉の固い張り。うっすらとかいた汗の滑り、熱さ。髪の毛から香ってくる胸をかきむしりたくなるような、つんとした男性の匂い。

藍子の肌の内側、理性という一枚皮の下で激しく暴れるもう一人の自分。誠一郎との間にある暗黙の境界線を簡単に飛び越えてしまえる距離。息が切れる。フルマラソンを世界新記録で走り終えたような呼吸困難が、激しい吐息となって誠一郎の短い髪をそよがせる。

「わたし、誠一郎を食べてしまいたい……。誠一郎でお腹を一杯にしたい。誠一郎とわたしとひとつにしてしまいたい。包み込んで、飲込んで、なにかもをひとつに……。誠一郎とひとつに」

ちかちかする。

雲の上を歩いているような浮遊感と共に、赤子のな単純思考が藍子の背中を押しはじめる。母親からおっぱいをもらおうとする赤ん坊のように、無意識の中で口を開けたり閉じたり。何かを食べるような、食べたいとねだるような、そんな動きを繰り返す。

はむはむ。ぱくぱく。

悪い瘴気に当てられてしまった旅人が、森の中で混乱に倒れるように、藍子もまた誠一郎に迷いはじめる。藍子にとって誠一郎は、この世で一番幸せな死に至る毒であった。

寝ぼけたままの誠一郎。無防備な誠一郎。安心しきった誠一郎。ふわふわとした意識をもてあましながらも確実に頭を茹で上げる愛おしさ。

可愛い。本当に可愛い。

小さなふくらみを歪ませながら頬ずりする誠一郎が可愛くて仕方がない。

押しつけられた額で潰れる我が胸のかすかなふくらみ。胸の先端にちくちくとした、こねくり回されるような痛みをじわじわと感じ始める。けれど、その痛みはなぜか数秒後には痺れに変わっていく。

「誠一郎、誠一郎」

……感覚の変遷は、最後に例えようのない、むずがゆい快感へと取って代わる。

藍子は体をぴくりと跳ね上がらせた。

「……胸がきゅってなるから、わたしは誠一郎を食べていいの」

なにやら意味の分からないことをつぶやいて、

「……かぷ」

藍子は誠一郎の耳をかじった。

「痛ッ!?! ……んあ? あ!?! あああっ!?! うわあああああ

ああああっ!?!」

胸の中で惰眠から目を覚ました誠一郎。

箱根駅伝の往路と復路をたった一人で走破するが如く、状況判断という脳の電気信号は、シナプス、脊髄、筋組織を最短ルートで往復した。

脳みそは一瞬のうちに覚醒へと至る。

「な、何をやってやがる!？」

突き飛ばされた藍子はベッドから突き落とされる。激しく床を転がった挙げ句、誠一郎にお尻を突き出す四つん這いの格好で止まる。

「おはよう、誠一郎。今日もいい朝」

悪びれないいつも通りの平板な顔があった。藍子は起き上がると居住まいを直す。

胸の奥と下腹部の奥では、まだかすかに火がくすぶっていた。

「まったく最悪の朝だ! 最悪のっ!」

頭をボリボリとかきながら、誠一郎は藍子をにらみ付ける。

「誠一郎、怖い顔」

「誰のせいだと……はっ!」

何かに気が付いた誠一郎はかぶっていた布団を跳ねとばすと、藍子に背を向ける。

見えないようにパンツの中身を確認する。

「大丈夫、誠一郎の貞操は守られた。童貞記録更新中だから安心していい」

「お前に守られる童貞なんかいらん」

「……! いらならん頂戴」

「お前にはやらん」

「誰にあげるの」

「誰にもあげない! 童貞は俺のものだ!」

ベッドの上であぐらをかいて宣言する。

「……」

「……」

二人の間に沈黙が横たわった。

「なんだろう……言ってて、すごく悲しかった」

落とした肩を元に戻すと、こほんとひとつ咳払いする誠一郎。

「まあ、部長として一応、報告しておこう。……今日も起たなかった。はは……」

カーテンの隙間からのぞく朝日が眩しく、寂しそうに笑う誠一郎の前歯をきらりと輝かせた。

「朝立ち報告、拝承」

「女の子が朝立ち言うな」

「……。ノクターナル・ペナイル・トゥマーシス」

「なんとなくだが、お前の言っていることは理解できた。さすがに付き合いが長いからな」

「誠一郎の反応がわたしは少し悲しい。意味が何か聞いてくれたら、モーニング・ウッド、モーニング・グローリー、あるいは夜間陰莖勃起現象、とご主人様に躰を強要された牝豚のように従順に答えるつもりだったのに」

「うん、解説ありがとうな藍子。でも、そろそろ駄目だぞー」

藍子の背後に回りスリーパーホールドをきめる。

「……苦しい、誠一郎、まだ寝るには……早い……時間」

タップして謝罪を示す藍子にため息を吐く。

閑話休題・第三話「わたしはえっちなかも知れない」

顔を洗った誠一郎があくびをかみ殺しながら冷蔵庫を開ける。冷蔵庫の中身に渋面しながらも、姿勢を整えてテーブルに着いている藍子に目を向ける。

物言わず、ただ中空の一点を見るときもなしに見ている姿。

たとえるならば美術品のような、あるいは絵画のような美しさ。オランダ美術を代表するヨハネス・フェルメール、彼が書いた作品にはたくさんの女性が登場する。彼の絵は、主題を示すものは細かに描写するのに対し、その周囲の背景などはあっさりと描く。それ故に主題が恐ろしいほどに引き立ち、描かれた女性は独特の匂い立つ美を放っている。

座る女……まるでそんな題名を冠された絵の中から飛び出してきたかのように、藍子の瞳に映る青は見る者に印象を残した。フェルメールの使う絵の具に見られる鮮やかな青は、その美しさも相まってフェルメールブルーとさえ呼ばれる。ならば、藍子の放つ青は、その名の通り藍色。藍子の色。藍子ブルーとでも呼ぶのだろうか……そんなことを誠一郎は思った。

「どうしたの、誠一郎」

視線を感じた藍子が無表情のまま首をかしげる。

「あ、いや……牛乳飲むだろ？」

冷蔵庫にぽつんと入っている牛乳を掲げてみせる。

「……！ これは皮肉ととる」

「皮肉じゃない、日本人の朝のスタンダードだ！ いいから、牛乳、

飲むよな？」

「飲む」

コップを二つ並べる。パックの口から注がれた牛乳が、コップの内側にぶつかり、内周をくると回る。勢いの良さに危うくこぼしそうになりながらも二つのコップに等量の牛乳を入れていく。ひんやりとした牛乳パックの感触、朝の光の中で見るコップ、透ける牛乳の白……その三つになぜだか誠一郎は、これが朝なんだと感じていた。

「誠一郎、わたしはえっちかも知れない」

牛乳パックを冷蔵庫に戻す。

「ふむ、少し性に対して好奇心旺盛なことは認める。だがな、エロさなら俺も負けていない。なんせ勃起部部长だからな。牛乳という単語だけでご飯三杯はいけるぞ、はっは！」

藍子の目の前にコップをおく誠一郎。

「一方で、勃起部部长なのに勃起できないとはこれいかに」

「いいんだよ、積極的に勃起をしようという部なんだから……できなくても。心がけだ、心がけ」

「……」

藍子にじっと見つめられてしまう。

無表情だか、きつとジト目であることには間違いないだろう。

「……まあ、それはいいとして、腹減ってるか？」

「減ってる」

おなかに手を添える藍子。

「食べるか？」

「食べる」

こくりとうなずく藍子。

唯々諾々と従う姿が見た目よりも子供っぽい。出された牛乳入りのコップを両手で持ち、中の液体をくるくると回して遊んだあとに、そっと口をつけてこくこくと飲んでいく。

なんとなくミルクをぺろぺろと舐める子猫のようで、食べ物やら飲み物やらを次々と与えなくなる衝動に駆られる誠一郎。草花を愛するあまりに水を与えすぎてだめにしてしまうパターンだなと、誠一郎は苦笑いする。

「了解。それじゃ再び冷蔵庫を開けまして……卵……卵……お、良かったちょうど四個あるぞ。これは俺とお前で二個ずつというところか。良かったな、卵があるなんて珍しいぞ。お前はラッキーだ！」

朝の何ともいえないテンションのままで冷蔵庫を探っていると、牛乳を半分ほど飲んだ藍子が、コップの中で揺れる牛乳に視線を落としていた。

「……わたしは淫乱なの」

「……。俺が三個で藍子がひとつというのも、体格差とか胃袋の大きさとか性差的な意味ではいいのかもしれないけど、なんとなく半分がいいような気がするんだ、うん」

「誠一郎を見るとわたしが止まらなくなるの」

「卵が見つかったのはいいとして、ろくな朝飯作ってやれないけど

いいよな？ 俺は和臣みたいに無欠超人じゃないから、せいぜい作れるのは目玉焼きか……悪ければ焦げ付きスクランブルエッグってなもんだ」

かみ合わない、かみ合わせるつもりもない会話の平行線。

藍子は藍子でまるで述懐するように、誠一郎は誠一郎で分かっている。あえて触れないように、明るさを保ったまま朝食の準備をする。

「話しているときは大丈夫。どきどきもばくばくもない、ただのどきどきだけ」

「目玉焼きの次は、うん、やっぱりサラダだよな！ 幸い冷蔵庫のなかには、キャベツとトマトがある！ 藍子はトマト大丈夫だったよな？」

「心臓が制御できないの。自分勝手に体中に熱を送り出すの」

「キャベツは千切りしよう。こう見えて千切りの誠一郎とちまたでは評判なんだ。そういえば昔のスーパーファミコンのソフトでロマシング・サガ2つてのがあって、その技の中に千切りとか、短冊切りとかあったっけ」

藍子の言葉を聞きながらも、まないたの上のキャベツを千切りにしていく。

「あのゲーム好きなんだよな……。初めてラスボスに行ったとき、ラスボス手前でセーブできるんだけど、そこでセーブしちゃうともうダンジョンの外に戻れないんだよ。それ知らずにセーブしちゃって……ラスボスがこれまた強いんだ。クイックタイムっていう魔法を覚えておかないとほぼ積むね、もう絶対倒せない。涙を忍んではじめからやり直したよ。ようやく最終皇帝にまでたどり着いたのにさ……」

フライパンに油を引いて、熱せられたところに卵を落とす。二つ落とした丸い黄身は、仲良く身体を寄せ合っていた。

近くて遠い、近いように見えて実は遠い……そんな目視では測りきれない距離感と対比するように、フライパンの上では黄身が二つ寄り添い続ける。

「誠一郎の無防備な姿を見て、わたしはおかしくなっちゃった。すぐ誠一郎が欲しいって身体がむずむずするの。誠一郎誠一郎したくなるの」

テーブルの上に並べられていく藍子の言葉は、まるで心の見本市。誰にも取引されることなく、ただただ陳列されるだけ。洗練されたものでも、切磋も琢磨もされていない原石そのものだった。

「わたしの身体に隙間があって、そこからわたしの熱がじわじわあふれ出てくる。わたしの中の誠一郎スイッチが押されると、わたしはもれなく熱暴走する。そして、染み出ていくの。熱いのが熱いままわたしのここから。じゅくじゅくって。わたしはそれに対抗する術を持ち合わせていない」

コップの表面には歪曲した藍子の美しい面。

ぐにゃりと歪んだそれは、自分をあざ笑っているようにさえ藍子には思えた。

「わたしではどうしようもない。止められない。栓が欲しいの。わたしの穴を、隙間を埋めてくれるきついくらいの栓……。誠一郎がわたしに栓をしてくれたら。してくれないから、だから、いつまでもわたしは流し続けるしかない――」

「藍子！」

「……！」

藍子が驚いたように顔を上げる。誠一郎が目玉焼きの載った皿を両手で持っている。その顔は怒っているでも悲しんでいるでもなく、優しげだった。

藍子の目の前に置かれた皿には華やかな彩り。

黄身が仲良く二つ並んだ目玉焼き。もしも目玉焼きに表情があるのなら、それは間違いなく……笑顔。微笑む二人が並んだポトレートに間違いなかった。添えられているキャベツは花畑で、トマトは太陽。

「できたぞ、俺特製の目玉焼きだ。言っておくが、傑作だぞ」

ナイフとフォークと、塩、胡椒。ソースとマヨネーズ、サラダドレッシングはお好みで。

テーブルには朝食と、その中心点にある調味料。いただきますと両手を合わせたところで、誠一郎は続けた。

「ま、難しいことは考えるなよ。俺たちは昔からずっとこうしてきたんだ。これからもこのまま、今まで通り楽しくやっていこう。俺たちの関係が変わることなんて、変わる必要なんてない。俺たちはもうレベル99なんだ。とっくの昔にレベルはカンストしてるんだよ」

「……うん」

藍子も誠一郎に従うように両手を合わせて、いただきますと続く。

「トマトたくさん」

「お、食べるか？ 欲しいならやるぞ」

「くれるの。食べたい。トマト食べたい」

「この欲張りめ。いいだろう、ほら、あーんしてやるぞ」

餌をねだるひな鳥のように口を大きく広げると、藍子は一口で誠一郎の差し出したフォークからトマトを奪い取った。

「もぐもぐ……みずみずしくておいしい。さすが誠一郎特製トマト」
「……スーパ―のを切っただけだけだな！」

無表情にかすかな幸せを漂わせる藍子に、誠一郎はちくりとした痛みを抱えるのだった。

閑話休題・第四話「えっちなのは駄目だぞ」

ごちそうさまをしたあとは、何となく居間でゲームを始める二人。イソップ寓話の北風と太陽もびっくり。旅人は家にこもる作戦に出たのだった。ソファに仲良く隣り合わせで腰掛けた誠一郎と藍子。P S 3のコントローラーをひとつ藍子に握らせる。誠一郎がセンタ―のP S ボタンを押してやるとテレビに映されたホーム画面に充電切れの表示。

「悪い、藍子のコントローラー充電切れてた。俺がいつも使っているの使ってくれ。逆に俺は有線で充電しながらやるしかないな」

普段から一人用のソフトばかりで、友人とパーティープレイをしない人間によくある現象である。

手慣れた仕草でケーブルをつなぎ終わった誠一郎が、再びソファに腰を落とす。

「誠一郎がするゲームは相変わらずファーストパーソンシューターばかり」

「FPSな。好きなんだから仕方がないだろ」

藍子が棚に並べられたソフトを見てつぶやいた。

コール・オブ・デュティシリーズ、バトルフィールドシリーズ、キルゾーンシリーズ、レジスタンスシリーズに、レフト4デッドシリーズ。

シリーズ物ばかり増えてきて新規タイトルがないと嘆いているゲームーの泣き言が聞こえてきそうな、シリーズ物だらけのラインナップだった（※注・一部シリーズの中にC E R O レーティングがZ指定も含まれます。十八歳未満の方はお気をつけください）。

その中で誠一郎が取り出したのは、レフト4デッドというゲームであった。

ゾンビウイルスの蔓延によってゾンビだらけとなってしまった町から、生き残った四人の人間が脱出するというゲームだ。

四人の人間は本来それぞれをプレイヤーが担当することになっているが、オフラインで画面を上下に分割して二人でプレイすることもできる。残りのふたりはコンピューターが担当するという具合だ。このゲームの醍醐味である疾走するゾンビが大挙して襲ってくる様は一見の価値ありだ。

そんなゾンビたちから逃れるため、プレイヤーは重火器や近接武器を駆使して戦うことになる。つまり、ワンマンプレーの許されない、いわゆる協力プレイが鍵を握る、手に汗握るゲームである。

「じゃ、一緒にプレイしよう、クーププレイだ」

協力プレイを選択し意気揚々と始めようとする誠一郎に、藍子が首をわずかにかしげる。

「……クープ」

「どうした？　なんか気になることでもあるのか？」

「なんでもない」

「……なんだよ、言えよ」

「気にしない？」

「ああ、気にしないから言ってみろよ」

指先でアルファベットのシー、オー、オー、ピーを空中に描く藍子。

「COOPの読みはクープじゃない。コープが正解」

「ぐ……っ！　わ、悪かったなっ！」

赤っ恥である。顔を真っ赤にして叫ぶ誠一郎を横目に、藍子は口
ード画面を指さす。

「始まる」

「分かってる！」

「気にした」

「気にしてない！」

「間違いは誰にでもあること。駐車場の看板にある月極という文字と同じ。月極という文字を初めて見た人は絶対にそれを『つきぎめ』とは読めない。『げつきよく』と誤読してしまう。初見殺しと言っている。誰もが一度は必ず『げつきよく』と読み間違え、それを知見者によって正される。その延々と続くサイクルの一部になっただけ。なにも恐れることはないの。誠一郎はこれで月極と問題なく読めるようになった。これからはそれを後から来る人たちに教えていけばいいだけ。ひとつ大人の階段を上れたと考えればいい」

「そんなもので上れる大人の階段だったら、あと何千階段上れば俺は大人になれるんだろうな……」

「誠一郎、大人の階段を一気に上るいい方法がある。それは」

「えっちなのは駄目だぞ」

「……」

「これ見よがしに肩を落とすな。第一、そんな思春期にありがちな脱なんちゃらしたぐらいで上れる階段なんていうものは、単なる本人の錯覚さ。見かけ状のものであって、実際には一皮どころか、皮の一枚も剥けてさえないんだ」

「どうして誠一郎のえっちな発言は良くて、わたしが言う駄目なの。矛盾を感じる」

「俺のどこがえっちな発言だったんだよ……」

「皮が剥けたとか、剥けないとか」

「予言する。いつかお前は捕まるだろう」

「そして、わたしは二つの意味で誠一郎の虜になる」

「……」

「虜になるのは、警察と、誠一郎の愛とで、二つの意味がかかって」「意味は分かっているからな！ さすがにそこまで鈍感じゃないぞ俺は！ まあ……だからって敏感でもないけどな」

「やっぱり誠一郎のえっちな発言が良くて、わたしのが駄目なのは解せない」

「お前がいったい俺の発言のどこにセクシャルな要素を感じているかが、俺には分からない！」

「発言ではなく誠一郎という男性自身がセクシャル。もちろんこれも二つの意味で」

男性自身が何とナニをかけて二つの意味になっているかなんて、決して口には出すまいと心に誓う誠一郎。

対して、下ネタを連発する美少女……藍子は、相変わらずの無表情で平板な声であるが、どことなく楽しそうである。

長年のつきあい、蓄積されてきた経験値。誠一郎にのみ分かる藍子の機微の変化を、藍子のかすかな喜怒哀楽を、誠一郎は漏らさず感じ取る。

閑話休題・第五話「汚物は消毒」

「……ほら、冗談はいいからゲームやるぞ。サバイバルはもう始まってるんだからな。やらないなら俺がやるから見とけ」

誠一郎が少し突き放したようにいうと、藍子はコントローラーを渡さないとばかりに胸に抱く。

「わたしも一緒にプレイしたい。誠一郎とゾンビ倒すの」

「ふふん、そうこなくっちゃな。お、俺は退役軍人キャラか、藍子のは紅一点の女キャラみたいだな。では……まずはそこにある武器を取るんだ。操作はやりながら覚えていけばいいか」

慣れている誠一郎はスタート地点に用意されている武器をさっさと選んでいく。ご丁寧に台の上に置いてあった武器は、イスラエル製のサブマシンガンUZIと、アメリカ製レミントンM870である。

誠一郎は迷わずショットガンを選択した。

「誠一郎の武器はポンプ式のショットガン。わたしもそれがいい」「いいけど、このショットガンは慣れないうちは難しいぞ。遠距離の敵には駄目だし、一度一度ポンプアクションするからな。こんな感じで」

ゲーム画面のキャラクターがショットガンを壁に向けて打ち始める。派手な銃撃音のあとにガチャリとキャラクターがポンプアクションをし、ショットシェルが地面を転がる。それからまた射撃。それを三回、四回と繰り返す。一発一発の間にはコンマ数秒の間があった。

「な？ 撃った後の隙が大きいんだ。藍子はおとなしくサブマシンガンにしとけ。威力はそれなりだけど、距離を問わず活躍できるし連射もできるからな、おすすめだ」

「うん、分かった。サブマシンガンにする」

素直に従った藍子がふらふらとした慣れないコントローラーさばきで銃を手を取った。ゲーム内のキャラクターは至ってサバイバルする気満々なのに、操作する側が不慣れなので動きが滑稽になる。それがとてもシュールだった。

「ではスタートだ。俺のそばを離れるなよ」

「……！ スタートのはずなのにゴールした気分になった」

ほろ酔い気分のOLよろしく頬をピンク色にして身体を寄せてくる。

「言っておくが結婚はゴールじゃないぞ、スタートだ。二人三脚で、しかも途中から障害物競走に変わるらしい」

「それでもわたしは誠一郎がウエディングケーキに入刀してくれると信じてる」

「信じるのは勝手だけど、アメリカのことわざでこういうのがあるぞ。ウエディングケーキはこの世で最も危険な食べ物である、ってな」

「……」

してやったり顔の誠一郎を見ながら、藍子は無言でゲームのキャラクターを操作する。サブマシンガンを持った女キャラが誠一郎の操作するキャラに近づいていく。

「伊達政宗のことわざにこういうのがある。朝夕の食事はうまからずともほめて食うべし。誠一郎も器を磨くべき」

——バラバララッ！

「ああっ！　なぜ俺のキャラ撃った！？」
「手が滑った」

ゲーム内でも味方に撃たれたキャラが、誠一郎よろしく誤射を怒っている。

「この野郎……っ！　俺も危うく手が滑りそうだぜ……！」

歯ぎしりしながら無言無表情の藍子とにらみ合う。

「背中には気をつけろよ藍子……！」
「それはわたしのセリフ」

協力プレイが鍵であるゲームは前途多難であった。

誠一郎と藍子、そしてコンピューターが操作する二人、合計四人が各々異なった武器を取って、路地裏を進んでいく。おどろおどろしい音楽流れ始めると、路地裏の角から、二階の窓から、ゾンビが次々に襲いかかってきた。

「誠一郎、ゾンビきた」

「了解。落ち着いて狙って撃て。なるべく頭に当てるようにするといいぞ。ゾンビは昔から頭が弱点ってのが、相場で決まってるんだ。

ジョージ・A・ロメロ監督がそう決めたからな」

「誠一郎、ロメロ監督のゾンビは走らない。でもこのゾンビは走ってる」

カチャカチャとコントロローラーを操作しながらの会話。

画面では胴体にショットガンを受けたゾンビが派手に吹っ飛ばされていった。誠一郎のキャラが弾を撃ち尽くしリロード動作に入る。その隙を補うように藍子のサブマシンガンが迫り来るゾンビを足止めにする。なんだかんだ言っただけで息が合い始めるのが藍子と誠一郎だった。

「確かに。走るようになったのは現代ゾンビで、基本的にゾンビってのは走らないものだ、俺は思ってる。リメイク版のドーン・オブ・ザデッドとか、28時間後なんかのゾンビは、もろに疾走してるしな。アレはある意味で今までのゾンビの常識を覆す新しいゾンビの形として新鮮だった。でも、ロメロ党の俺としてはやっぱりゾンビは走らないで欲しいんだよな。知能で劣るゾンビが圧倒的な数がじわりじわりと押し寄せてくる……そんなゾンビがいいんだ。……そういえばロメロ監督はゾンビにも知能があつて、だんだん進歩していくっていうのが最近の監督作品なんだっけ。ゾンビもやっぱり変わっていくんだよな……人と同じで」

誠一郎のキャラと藍子のキャラが互いに背中を預け、挟み撃ちにしてくるゾンビの大群を迎え撃つ。

「誠一郎」

「ん？」

「わたしは変わらない。わたしは誠一郎がゾンビになってもそばにいる。怖がったりしない。食べたいなら食べていい。脳みそでもなんでもあげる」

「藍子……。俺は……お前の言っている意味が分からない……!」

どさくさに紛れてとんでもないことを言われたが、誠一郎はやりわりと否定してあげた。

ゲームは序盤の盛り上がりを迎えていた。ゾンビと人間、のべつまなしの攻防が繰り広げられている。ゾンビに殴られて体力も半減足を引きずり、移動速度が遅くなっているキャラクターも出始めている。回復キットを使って治癒させることも可能だが、キットは有限。数の暴力の前では風前の灯火でしかない。このままではじり貧だ。

そのとき、一進一退の攻防に変化が訪れる。

……それは人間側にとっては凶と出る変化であった。

「誠一郎。メタボなゾンビが出てきた」

「そいつはブーマーって言って――」

誠一郎の声は間に合わない。路地の角から突然現れた巨体が、大量の何かを吐き出した。

「……! 得体の知れない汁でわたしの身体が汚された。視界がふさがれて、体中がべとべと。得体の知れない汁がわたしの身体にぶっかけられた。視界がふさがれて。もう体中がべとべと」

「……わざわざ二回も言うことか? いちいち表現も変えてまで」

「表現を変えたところに気がつく。さすが誠一郎」

正確にはブーマーの吐き出した液体を浴びると、浴びた人間は視界をふさがれた上に、ゾンビが大量に押し寄せることになる。周囲を取り囲まれた藍子のキャラは、殴る蹴るの攻撃を受け、ついには地面に倒れ込んでしまった。女の子キャラの悲鳴が路地裏を反響する。

「女の子一人に対して、男が集団で暴行している光景。まさか、誠一郎はこれが見たかったの。わたしが集団に暴行されて、汚され、墜ちていく様をゲームに投影する。それをおかずにして誠一郎は悦楽の——……！」

ぶつぶつと変態的なことをつぶやく藍子の腹部に無言のひじうちを炸裂させながら、誠一郎はゲーム内では藍子のキャラクターを助ける。藍子のキャラクターは藍子の痛みを代弁するようにヘルプを叫び続けていた。

「ちなみに言っておくが、あの建物の屋上で煙をもくもく上げながらこそそしているやつがスモーカーと言って、アイツは長い舌を伸ばしてキャラクターを縛って身動きをとれなくするやつかいな敵だ」

丁寧解説する。

「見ろ、俺のキャラクターが縛り上げられて宙ぶらりにされているだろ？　こうなったら俺一人で脱出することができないんだ。……だからと言ってはなんだが、早く舌を切るなりスモーカー本体を倒すなりして助けてほしいんだが」

「スモーカーの空気の読めなさに失望している。そこはわたしを緊縛するべきところ」

「俺はお前の思考回路に失望しているよ！」

スモーカー本体を倒して誠一郎のキャラの拘束を解いた藍子に、突然、黒い影が迫った。

「……！　誠一郎、わたしのキャラが空から降ってきた非行少年に

よって路上レイプされてる、助けて」

「その二つの意味で非行（飛行）少年はハンターっていうゾンビの一種だ。しかしながら、お約束過ぎだな……」

路上で女の子のマウントポジションを取ったハンターは見ようによつてはそう見えなくもない。

「ちなみに、キャラは馬乗りにされてタコ殴りにされているだけだ。レイプじゃない、安心しろ」

「……わたしはレイプじゃなければ路上で馬乗りにされてタコ殴られても安心できてしまう誠一郎の思考回路に失望してる」

「今助けるからな！　くたばれハンター！」

「ごまかした」

「危なかったな！　さあ、もうすぐでゴールだ！」

難関をくぐり抜けた誠一郎と藍子。

その後も悪戦苦闘は続く。藍子が火炎瓶を投げて狭い室内を火の海にしてプレイヤーを直火焼きにしたり、

「汚物は消毒」

「俺は汚物じゃない！」

ゾンビに取り囲まれた誠一郎のキャラごとアサルトライフルで斉射したり、

「ゾンビと間違えた」

「未必の故意すぎる！」

いち早く安全な部屋に駆け込んで、その後誠一郎のキャラが来るのを待たずにドアを閉めたり、

「ドアを開けてくれ、藍子！　ゾンビが！　殺される！」

「これが極限下に置かれた人間の本性。本当に怖いのはゾンビよりも人間」

「せめてゲームぐらいはリアルを裏切ってくれ！」

誠一郎のキャラが倒れているのを感動の棒読みセリフで見捨てたり、

「誠一郎の勇姿は絶対に忘れない。敬礼」

「まだ生きてるから！　助けられるから！」

「誠一郎がおとりになってくれた」

「お前が勝手におとりにしたんだろうがっ！」

とにかく波瀾万丈のサバイバルゲームは過ぎていった。

閑話休題・第六話「誠一郎液専用」

プレイヤー達がビルの屋上へとたどり着き、無線でへりに助けを求める。

艱難辛苦を乗り越え、ついにつかみかけた脱出への切符。その切符を確実に履行させるためにも、ゾンビによる波状攻撃から最後まで身を守らなくてはいけない。

へりがビルの屋上にたどり着くまでの数分間が、永遠にも感じられてしまう。

「これが最後」

「ああ、ここで最後だ」

「頑張る」

藍子が道中で手に入れたアサルトライフルM16A3をリロードさせる。ゲーム中では安定した性能が魅力で、サブマシンガンの上位武器にあたる。

一方の誠一郎は威力が高く、連射も可能なベネリM4 Super 90ショットガンである。近距離では無類の強さを発揮するが、ショットガンだけに中遠距離は苦手。また、連射が可能なために弾切れが早く、弾込めの時間もあるので注意が必要な武器である。

「気を抜くなよ、最後だけあってゾンビとか特殊感染者も連続して襲ってくるぞ」

特殊感染者とは通常のゾンビとは違い、特殊能力を秘めたゾンビのことである。ゲロを吐いて視界をふさいでくるブーマー、長い舌でプレイヤーを絡め取るスモーカー、飛びかかって爪で攻撃してくるハンター。大量に襲ってくるわけではないが、どれも一筋縄では

いかない難敵である。

「あの大きいのもくるの」

「ああ、来るぞ」

「あの大きくてたくましくて堅くて太いものを持った敵。あんなモノ、受け止めきれない」

「受け止める必要はない、逃げながら戦え。ちなみに大きくてたくましくて堅くて太いものを持った敵には、ちゃんとした固有名詞があるからな。タンク、っていう固有名詞が」

「でも、わたしは受け止める。誠一郎のタンクなら」

「早速使い方間違ってるからな！」

「誠一郎、次射装填急いで。まだわたしという誠一郎液専用タンクには余裕がある」

「液……タンク……。今の発言、女性として最低だな。理解できてしまった俺も最低なんだろうが……」

そんな下ネタを交えつつ、ゲームが佳境に突入する。

ヘリコプターが到着し、プレイヤー達が必死にそこに駆け込もうとする。それを遮るようにゾンビと特殊感染者、さらには地響きと共にタンクが襲来する。その豪腕で殴られれば、大ダメージに加え、軽々と吹き飛ばされてしまう。ビルの上なので、外に吹き飛ばされでもしたら即死である。

往年のゲームにありがちな、ラストでの敵のオールスター総出演に、興奮が洪水となって押し寄せる。

「必ず生き残るぞ！」

「生きて故郷に帰ったら、誠一郎と添い遂げるの」

「……藍子、お前死ぬような気がするぞ」

スモーカーにがんじがらめにされている藍子を助けながら苦笑い

する。

そのとき、誠一郎のポケットから携帯電話の着信音が鳴り響いた。菅野よう子作曲のThank!という曲。イントロが印象的で、オープニングに使われたカウボーイビバップというアニメも放映終了してすでに十年以上経った。というのに未だに様々な番組で流される名曲中の名曲である。

「誠一郎、電話」

「仕方がないな……ちょっと待ってくれ」

最後の激闘に水を差すように鳴り響いた着信音。ゲームを一時停止する。

あれほどまでに激しい戦闘の音が鳴り響いていたのに、一瞬で訪れる静寂。

興ざめという言葉が一番理解できるシチュエーションの完成である。

誠一郎がポケットから取り出した画面をのぞき見れば、ゲームの興奮なんてまるでなかったかのように顔がこわばっていた。

「誠一郎……」

様子がおかしいことに気がついた藍子が、誠一郎の手元をのぞき込もうとする。

「……あ、いや、なんでもない。ちょっと電話出てくる」

その藍子から携帯電話を隠すようにして誠一郎は部屋を出て行く。玄関の外に出た誠一郎は、未だ鳴り止まぬ携帯電話の画面を見る。そこに表示されていた名前――

六條七海。

誠一郎は知らず息を飲み込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7070n/>

わたしはあなたのおかずになりたい

2011年10月3日09時16分発行